
ワールズエンド

佐倉匡平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールズエンド

【Nコード】

N0346W

【作者名】

佐倉匡平

【あらすじ】

星を待っていた。雪の降る夜に、それは奇跡を望むような心地だった。星なんて見えない。そんなことは分かりきっていた。けれど僕は白い大地の上に仰向けになって、顔を濡らす雪の冷たさを感じながら、それでも星を待ち続けていた。白い息が空に溶けて、僕は思わず、涙が出そうになった――

世界の端で、見えない星を追い続ける少年と少女の話。

#00 星に願いを

星を待っていた。

雪の降る夜に、それは奇跡を望むような心地だった。星なんて見えない。そんなことは分かりきっていた。けれど僕らは白い大地の上に仰向けになって、顔を濡らす雪の冷たさを感じながら、それでも星を待ち続けていた。白い息が空に溶けて、僕は思わず、涙が出そうになった。

「星、見えないね」

彼女が言った。寒さからか、それとも淋しさからか、それはまるで震えるようだった。

彼女は小さな手を、空に向かって伸ばした。そしてぎゅっとなにかを掴んだ。雪ではなかった。彼女は片目をつむって、雲を掴みとろうとしていた。手袋もせずに赤く染まった手が、心細げに震えているのがわかった。僕は彼女の手を握りしめたかった。でも冷えた手はかじかんで、うまく動かなかった。

「ふたご座流星群」

彼女はそっと呟いた。

「三大流星群のひとつで、一年でも一番盛大な星のお祭り。でも痕はあまり残らないし、あんまり明るくもなくて、少し地味な流星群」

僕は彼女を見た。彼女は空を見ていた。

「でも、きっとこの流星群には、一年で一番たくさんの方の願いが込められている。凍てつく大気と、ちょびっと痛い掌と、コートの柔らかい感触と、そんなものを感じながら、遠く遠くで孤独に消えて行く星々を、一年で一番多くの方が見守っている」

彼女が僕を見た。薄い微笑みと、優しい瞳がそこにはあった。

「ねえ、知ってる？ この流星群は、軌道の変化で21世紀頃からどんどん見えなくなっていて、22世紀には見えなくなるって言われているんだよ。でもね、消えるどころか、少しずつ増えている」

彼女が空を見たので、僕も空を見た。暗闇の奥から雪がふっと現れては、静かに僕らに降り積もった。

「まるでそれは、私のことを見て、って言っているみたい。消えゆく私をもっと見て、って私たちに願っているみたい」

静かだった。雪がありとあらゆる音を吸い込んで、それは冷たい息となって僕らを撫でた。そんな中で彼女の声だけが、まるで魔法のように温かかった。

「じゃあ、流れ星が願いを叶えてくれるのは、彼らなりのお礼なのかな」

僕がそう言うと、彼女ははっとした表情で僕を見た。僕は少し驚いて、ちよっぴり照れくさくて、彼女から目を逸らした。

彼女の手が、僕の手を握った。すごく冷たかったけれど、触れた部分が熱を帯びて、やがてそれはひとつになった。

「うん。きつとそう」

彼女の息がふわりと白く空に舞い上がった。

「だから、見てあげたかったな」

僕の手を抱く彼女の手が、ぎゅっと力強くなった。そこから淋しさが伝わってきて、僕は思わず彼女を引き寄せると、横になったまま、強く強く抱きしめた。壊れそうなほど繊細な彼女の体はびくりと一度強ばって、やがて雪が溶けるように力が抜けていった。彼女の髪の毛の匂いがした。温かな吐息が僕の首元を湿らせた。

僕は彼女の目を見て言った。

「僕が君の流れ星になる」

彼女の潤んだ瞳が不思議そうに揺らいで、やがてそれは笑みになった。僕はすごく恥ずかしくなって、「笑うなよ」と、再び彼女を抱きしめた。

「ごめんなさい」

笑いをこらえきれないまま、彼女が言った。僕はふてくされていたが、僕を抱きしめる彼女の腕には先程より力が込められていて、なんだかそれは少し切なかった。

「すごく嬉しい」

「本当に？」

「うん。でも、あなたは流れ星にならないで」

「どうして？」

「流れ星は、消えちゃうの。だから、消えないで」

僕の胸が、ぎゅっと縮こまるのがわかった。腕の中のこの弱い女の子が、愛しくて愛しくて、僕の吐く息は震えた。

「消えない。絶対」

彼女は応えなかったけれど、僕の胸に頭を摺り寄せた。

僕にはこの瞬間、永遠というものの在処がわかった。そしてこの腕を緩めたら、すぐにどこかへ消えてしまうこともわかった。だから僕はただただ彼女を抱きしめていた。消えゆく運命の雪の中で、それはやはり奇跡でも願うかのような心地だった。

「ねえ」

彼女が僕の名を呼んだ。さよならを告げるような響きだった。

「願い事をしよう？」

そうして僕らは、叶えられない約束をした。

#01 散る桜、残る桜も、散る桜

季節は春だった。桜の花はすでに散り始め、少し淋しげな木々の下で、湿った地面に薄汚れた花びらが積もっていた。早足で歩きながらそれを見て、きれいだな、と薫は思った。去りゆくものの名残がもたらす、悲恋のような美しさだった。

薫はため息をついて、少し昔のことを思い出した。真っ白な微笑みや、草の匂いや、魔法の言葉——そういったものが当たり前前に存在していた日々があった。薫の思考はそんな日々を駆け巡った。けれど生温い感傷はすぐに霧散して、あとには行き場のない空しさが残った。薫はその場所を埋めるために、春を思った。

春。

薫はこの季節が好きだった。果実がその実を膨らますように、日に命が形づいていく様子が手に取るように感じられた。優しい匂いのする空気に、暖かな日差し。風は母親の子守唄のように、心地よい吐息で体を撫でていく。ありとあらゆるものが、穏やかな時の流れに身を委ねているかのようにだった。自分も全てを委ねて眠りたいものだ、と薫は思う。だが彼にはある女性と約束があった。

薫がいるのは学校で、名前は『上乃木学園』といった。私立の小中高一貫校で、薫はつい先ごろ高等部に進学した。初等部の新入生に「お兄様」と挨拶されることも、この歳になると慣れてしまった。薫にも確かにそのような時代があって、その上に今が築かれているのだけれど、記憶はもう遥か彼方にある、手の込んだ冗談のように思えた。

薫は紺のブレザーに身を包み、買い換えた真新しいローファーで桜色の絨毯を踏みしめながら、坂道を下っていく。緩やかなカーブに沿ってたくさんの桜が植えられていて、その光景は春という言葉の象徴であるかのように鮮やかだった。時として強く風が吹けば、桜の雨が体に打ち付けた。

薫が向かっているのは、『生徒会棟』と呼ばれる建物だ。五階建ての大きな建物で、それぞれの階に小中高生徒会の会議室が設けられている。なお最上階にあるのは生徒会長三人の執務室だ。自転車小屋と体育館の間に位置し、入棟するには、生徒会役員かゲストにのみ渡されるIDカードが必要となる。

薫は生徒会棟の前に着くと壁に埋め込まれた端末にゲスト用IDカードをスラッシュし、端末に促されるままに声紋・網膜・静脈を自らのデーターベースと照合した。『桜井薫』という人物が認知され、入出者情報に名前と日時が記載される。外観は木造の古めかしい建物だが、過剰なほどのセキュリティだ。ロックが外れた音がして、薫はドアを引いて中に入った。用があるのは五階だ。階段で五階へと向かう。

薫は途中で数人の生徒と擦れ違った。みな女で、一人は不思議そうな顔をして、一人は薄く微笑みかけてきた。中等部と思われる女生徒二人組は、階段の踊り場に張り紙をしていた。『P・L・A・Y。』『自由と秩序』『薫風祭まで、あと25日』……。

薫風祭とは、スポーツ大会のことである。一月先の話であるが、生徒会はその準備に追われていた。基本的に教員は行事に関与しないため、様々な申請は生徒の代表である生徒会役員によって行われる。競技選択、ルール制定、学年間のハンディキャップを埋める措置など、その他にも考慮することはたくさんあった。役員たちの議論の

声が、壁を通して薫の耳にも聞こえてくる。

しかし一変、四階は驚くほど静かだった。耳を澄ませば階下から話し声が聞こえてくるが、四階自身は雪の日の洞窟のようにしんと静まり返っている。物音ひとつなければ、生き物の気配すらない。薫は三つある執務室の中から一つを選び、ドアの前に立つと、気持ちを引き締めてノックをした。少し間があいて、静けさの底から返事があった。女性の声が、どうぞ、と告げた。薫は「失礼します」と声に出して、部屋に入った。

執務室は一般教室と同じくらいの広さで、たくさんの本棚に囲まれていた。ジャンルは多岐にわたり、『マクマリー有機化学概説』『真珠夫人』『終わらない夜』など、文字という文字がずらりと整列して薫を見つめているかようだった。そんな部屋の中に、声の主はいた。部屋の奥に鎮座する古風な机に向かって、書き物をしている。伏せられた顔は枝垂れる黒髪に隠れて、窺い知ることとはできない。薫はこりこりという万年筆の進む音を聞きながら、彼女の仕事が終わるのを待った。

二分ばかりして、彼女の筆が止まった。顔を上げて、万年筆を優しく机の上に置く。そしてゆっくりとリムレスの眼鏡を外した。

「ごめんなさい、待たせてしまって。よく来てくれたわ、薫。こちらに来なさい」

空間に澄み渡るような、細く美しい声が薫を呼んだ。彼は全身が震えるような感覚を覚えた。その声は淡い幻想の奥から手を差し伸べるかのように、抵抗し難い力で彼を惹きつけた。返事をせず、薫はゆっくりと彼女に近づいた。机を挟んで見つめ合う。薫が立っているのに対し彼女は座っていて、自分が彼女を見下しているという状

況に、薫は気持ちの悪さを覚えた。

彼女は名前を愛上小百合といった。美しい女だった。その美しさは、言葉を超越し、概念すらも突き抜けて、孤高だった。あえて言葉にするなら、神意的という言葉がそぐわしい。月の光によく映え、森の奥深く、深い沈黙を讃える泉の水のような麗らかさを秘めた、非常に細やかな顔立ちである。

小百合はこの部屋の主——つまり高等部生徒会を率いる生徒会長だ。彼女はその人柄と美貌で生徒のみならず教師からも絶大な支持を集めている。彼女が姿を見れば自ずと視線は集中し、集会での演説では生徒が失神することもままあった。ファンクラブも三つあり、彼女は皆に——狂信的なまでに——好かれている。

しかし中には小百合を苦手とする者もいた。そのひとりが薫である。薫はどうしても小百合に対し純粋な好意を持つことができなかった。嫌いではないが、苦手意識が強く、小百合と対するときは無意識の内に壁をつくった。美しさに気圧されて、といった理由ではない。おそらくそれは、薫が小百合の本当の性格を知っているからである。

小百合はじつと薫の顔を見つめたのち、ちよいちよいと手招きをした。薫は健気に従って小百合へと顔を寄せる。

——小百合の手が伸びて、薫の顎に触れた。撫でる。

「よしよし」

薫は身震いする心地だった。けれど反抗してはいけないことを知っていた。

やがて小百合は手を引つ込めると、微笑んだ。

「さて、じゃあ行きましようか」

＊

上乃木学園は山の麓にあり、それゆえ木々や坂が多い。また土地が広大である。小中高一貫という特殊な環境も関係して、それは山二つにも及んだ。大半が未だ切り開かれていない山林ではあったが、校舎を通り抜け、運動場を越え、さらに山を登った先には旧校舎と呼ばれる建物を取り壊されることなくひっそりと佇んでいる。木造の二階建てで、現在の三分の一ほどの大きさしかない。至る所で風化が進行しており、立ち入りは禁止されていた。

生徒会棟を出た二人が訪ねたのが、その旧校舎である。手には二人とも白い布袋を持っている。まるで壁のように屹立する背の高い校門には重々しく鎖が巻かれ、それは大きな南京錠で嚴重に封印されていた。乗り越えようとするものを防ぐため、門には反しもついている。そこから見た旧校舎は魔の住む館のようにも見えたし、学校に似せて造られた巨大な実験施設のようにも見えた。

小百合はサークルに数十もの鍵が付いた鍵束の中から迷いなく一つを選択し、南京錠に差し込んだ。錠前が外れ、鈍い音を立てて地面に落ちる。鎖も小百合は容易に外して見せた。見ればどちらも古臭い割に目立った汚れはなく、日常的に人が出入りしていることが窺えた。もちろんそれは薫と小百合である。

「前から思っていたんですけど、それ、鍵がまとめてあって不便ですし、危なくないですか？」

薫が鍵束を指して言うと、なんでもないことのように小百合は笑った。

「大丈夫。私が管理しているから」

さすが自信過剰、と薫は思った。

軋みながら開いた鉄の門を抜け、薫たちは旧校舎の中へと侵入する。鍵を用いるまでもない。渡り廊下と校舎を繋ぐ戸の鍵が閉まらないことを知っており、ふたりはそこから中へと潜り込んだ。校舎の中はしんと静まり返っているが、斜陽が差し込み仄明るい。光は宙を舞う塵を映し出し、薫と小百合の影をつくった。老朽化の進む木の床が悲鳴を上げ、どこか遠くでカラスが鳴いた。不気味に後を引く鳴き声だった。

そんな中、不意に薫は幻聴を聞いた。

子供の笑い声だった。男の子と女の子が、楽しそうに笑っている。その声は風に吹かれて空に溶けるようにか細かったが、壁に反響して様々な方向から薫の耳を打った。

薫はここを訪れるたびによくこの声を聞いた。どこか昔を思い起こさせるような声だった。そしていつも通り、小百合には聞こえていないようだった。薫は呆けて、その声をただ聞いていた。

やがて床の亀裂に足を引っかけて、薫は我に返った。振り返ることなく小百合が「気をつけなさい」と言った。幻聴は消えている。薫は無言で肯いた。そしてやはりこの校舎はどこか不思議な心地がすると思った。外界とは異なる独特な雰囲気、満ち満ちているようだ。

った。

小百合は階段をのぼり、やがて二年二組の教室の前で立ち止まると、「今日はここにしましょう」と言った。そして教室の中に消えていく。薫は後を追わずに隣の教室に入った。以前薫が小百合に続いて同じ教室に入った際、小百合が躊躇せず服を脱ぎ始めたことがあったからだ。それからはずこうして別々の教室に入ることにしている。

乱雑に並んだ机の一つに布袋を載せ、薫はそこから白い稽古着と黒い武道袴を取り出した。制服を脱ぎ、下着の上から着る。小柄ながら筋肉質である彼の体が、道着に隠される。その服装は彼の普段着であるかのようにとてもよく馴染んでいた。着慣れていることは一目瞭然だった。全体的にくたびれているのも、何十何百と稽古と洗濯を繰り返した証であろう。

薫は二年前まで武術を習っていた。流派は『章月流』という。薫の家には代々伝わる流派である。今は訳あってやめてしまい、自ら章月流の技を振るうことを禁じている。しかしこの稽古着と袴はその当時袖を通していたものだ。

薫の様から想像できるように、薫と小百合が旧校舎へ訪れたのは、組手を行うためである。一年程前に小百合が薫を誘い、時折こうして互いに道着に着替え、組手を行うことにしている。目的は小百合のストレス解消である。

小百合は実は極度のサディストだ。生徒会長という学校や生徒に尽くす役職は、彼女にとってみれば生理的嫌悪感の塊である。そのストレスを薫との組手で発散しているのだ。

薫は構えをとって、しかしすぐに解いてため息をついた。しばらくそのままじっと立ち尽くし、もうそろそろ小百合も着替えを終えているだろうと教室を出て、憂鬱な思いで隣の教室に入る。ノックをすることに意味はない。小百合は薫が予想したとおり目を閉じて意識を高めており、薫などまるで意に介さなかった。白の稽古着と深い藍色の袴姿で教卓の上で胡座をかくその様は、絶大な支持を受ける生徒会長には相応しくない姿だったが、見慣れている薫はやれやれと感じるだけだった。

仕方がないとしばらく薫も沈黙の底で物思いに耽った。錆びた窓を開いて、そこから校庭に植わった桜の木でも見るふりをしながら、今日の夕食とか、明日の天気とか、そういった取り留めのないことを考えるよう努めた。自らにそう言い聞かせていないと、昔のことばかり思い返してしまいそうだからだ。あの日からもうすぐ二年が経とうとしていた。二年も経つと記憶は薄れてゆくけれど、強い思いが胸にはまだあった。約束があって、その日は近かった。

「薫」

凜とした声が思考を払った。薫が目を向ければ、険しい表情で小百合が薫を見つめていた。薫が言葉を紡ぐより先に小百合は言った。

「なにを考えていたの？」

「なにも」

薫は即答した。小百合は沈黙した。カラスがどこかで不吉に鳴いて、風は淀んで地面に落ちた。

「そう」

短く言って、小百合は構えをとった。

「なら、始めましょう」

薫は一度深く呼吸をすると、無言で構えた。一気に緊張が高まり、静けさが密度を増した。時間が緩やかになったように薫は感じた。唾を飲み込みたい思いを呑み込んで、彼は美しい敵の瞳にのみ集中した。

小百合と薫の距離は、四メートルあった。間には三つ机があり、周りにも数十に及ぶ机が並んでいる。決して組手に向いたステージではない。それでも彼らは真剣だった。特に小百合の放つ気配は只ならぬものだった。視線だけで肌が焼かれるように薫は感じた。

「ねえ、やっぱりただやるだけじゃつまらないわ。賭けをしましろう」

小百合は言った。

「敗者が勝者の言うことを聞く。どうかしら？」

薫は首を振った。

「不公平です」

「なぜ？」

「俺は先輩に勝ったことがない」

くすりと小百合は笑った。

「女々しくて、情けないわね」

薫は無視した。小百合は続けた。

「いいわ。ハンデをあげる。私はあなたを叩きのめしたら勝ち。そこちはクリーンヒット一発でいいわ。どう？」

「いいですよ。でも、その条件なら俺が勝ちますよ」

「……ふふ、安い挑発ね。餓鬼がなめんじゃないわよ」

少しずつ、小百合のどす黒い本性が滲み出始めていた。薫はひどい嫌悪感を覚えた。それは怒りにも似ていた。

愛上小百合。

彼女は偽物だ。その言葉遣いも、仕草も、微笑みも、皆が尊んでいる小百合という人格全て、小百合が自らの生徒会長像に合わせて創り出したものだ。本当の小百合はもっと汚くて、醜くて、馬鹿げている。クレイジーなサディストだ。薫はそれを知っていた。みな騙されているのだ。この魔女の魔法に誑かされているのだ。そう考えると怒りは燃え上がった。青い炎のような、静けさを孕んだ怒りだった。

「……行きますよ」

薫が言って、小百合は笑った。

「おいで、僕？」

薫は緊張と怒りが飽和点に達するのを感じ、そして、跳んだ。

重力の鎖を引きちぎって、その跳躍は薫と小百合との距離を一気に詰めた。体を傾け、背骨を軸に空中で二回転して、その勢いで足蹴を放った。それは気を銜うには十分すぎるアクロバティックな一撃だった。

しかしその足の先に小百合はいない。小百合はくると身を翻して、薫の攻撃を避けていた。

薫は机と机の間に着地すると、体勢を立て直すことなく後ろ回し蹴りを放った。小百合は上半身を反らしてそれを避ける。

薫は止まらなかった。くるくると回転しながら、足払いに上段と中段への回し蹴り。薫はぶんぶんと幾度もその足を振り回した。けれど小百合には当たらない。彼女はバックステップでその全てを躲けてみせた。

くすりと、小百合が笑う。

「その程度？」

薫は回転を止めて、渾身の右正拳を放った。

だが、いつの間にか小百合は背後にいた。

彼女の手が背中から伸びてきて、薫の顎に触れる。

「ハウスよ、わんちゃん」

ドンッ、と薫の背中に衝撃が走った。小百合の当て身が彼を吹き飛ばしたのだ。

机にぶつかりそうになったところを、薫は机に手をつきその上で回った。跳び箱を使ってムーンスルトでも決めたような、そんな様だった。勢いを殺して、机の上に着地する。

小百合が口笛を吹く。

「体術はさすがね。体操選手に向いているわ」

「馬鹿にしないでください」

「あら、褒めているのよ。喜びなさい」

誰が、と薫は内心毒づいた。

「ほら、来ないの？ 来ないなら私から行くわよ」

「急ぐ女は嫌われますよ」

「あら、僻み？ 別にあなたに嫌われたって構わないわ。みんなから好かれているもの」

「誰も本当のあなたを好きな人なんていませんよ」

「かっちーん。頭に来ること言うじゃない」

「はは、短気ですね。擬音も古臭いし。歳、とりましたか？」

「……残念まだ17、よっ！」

小百合が近くの机を掴んで、薫目がけて投げつけた。薫は跳び上がってそれを避ける。机の上からの跳躍なら、薫は天井まで跳ぶことができる。薫はそのまま小百合に落下した。彼女の上方から攻撃に移る。

「猿もびっくりの跳躍ね」

小百合は余裕の笑みを見せながら、やはり薫の攻撃を難なく避けてみせた。それは舞うような動きだった。あまりに流麗で、風に揺れ動く木の葉や川の流れを思い起こさせる、自然な動きだった。薫が着地したときにはもう小百合は薫の背後を取っていた。

「まあ確かにスピードもジャンプも凄いわ。でも――」

薫は慌てて振り返る。

「隙だらけなのよね」

当て身が、薫の腹をえぐった。

薫は机を巻き込んで、後方に吹き飛んだ。あまりの勢いに、受け身をとることもできなかった。

轟音と激痛。

状況の整理もままならない。体のどこが痛むのか。全身が痛むのだ

と悟ったときには、眩む視界にひどい吐き気を覚えていた。頭を打ったらしい。増大する痛み、薫の思考は急激に冷え切った。ああ、自分はなにをしているのだろう、と思った。

仰向けに倒れたそこからは、汚い天井が見えた。痛みを押しつけるように、閉塞感がずしりと薫の体にのしかかってくる。息が詰まるのは、当て身による衝撃か、それとも先のない未来を思い出してしまったことによる圧迫感か。

どうでもいい、と薫は思った。

そしてちらりと開いた窓のほうを見た。先程薫が開けた窓だ。その向こうに四角く括られた青空があった。

「ちょっと、いつまで寝ているの？ 起きなさい」

小百合の声がした。

「少し押しただけで倒れてもらっては困るわ。まだまだ勝負はこれからなんだから」

薫は小百合の声には返事をせずに、ゆっくりと立ち上がった。頭の痛みはまだ目は霞むが、さほどではない。袴についた埃を払い落として、何度か咳払いをする。その度に軋む胸の骨は、歯を食い縛って耐えた。それより体にうまく力が入らないことが厄介だった。全身に喝を入れるため、薫はキツと目の前の美しい女を睨みつける。勝算はなかった。なら、この女でもいいかもしれない。そう思った。

震え、歩みも覚束ない脚で、薫は再び跳ぶ。

章月流を捨てた薫が行き着いたのが、このスタイルだった。跳躍と足技。元々薫はこのふたつに秀でていた。ただそれらは章月流の動きの中でより活かされるものだ。我流では章月流ほど活かしきれないことを、薫は知っている。

それに対し小百合のそれは『愛上流舞闘術』と言った。舞踊を取り込んだ愛上家に伝わる古武術である。

愛上流舞闘術の特徴は足運びの美しさで見切り、武器として鉄扇を好むことにあり、相手の背後をとることを得意とした。一對多の闘いに長け、するりすると敵の攻撃を避けては鉄扇で首を切り裂き、その者が通り抜けると血の雨が降った。決して敵にその身を捉われない足運びを前提とし、その美しき舞が続く限り敵を殺し続けるという、現代まで生き延びた歴とした殺人術である。

だから薫は知っていた。

我流では愛上流舞闘術に勝てるはずがないということ。

薫が我流で小百合に勝つということは、薫が愛上流舞闘術を打ち崩すことと同義だ。数百年も受け継がれてきた殺人術に、章月流を捨てた薫の拳が届くはずもない。それがたったの一撃だったとしても、である。そこには筆舌に尽くし難いほどの壁がある。

「がっかりよ」

攻撃の先に小百合はいない。声は、背後から聞こえた。

着地より先に小百合の当て身が薫を吹き飛ばして、手をつくべき机もなく、薫は地面に勢い良く倒れた。倒れた先で机に頭をぶつける。

鈍い音がして、またしても視界が揺らいだ。

「学びなさい。あなたの無駄の多い動きは確かにファンタスティックだけど、隙だらけなのよ。忠告したでしょう」

生まれたばかりの仔馬のような、そんな有様で薫は立ち上がる。不思議と気分は瀕死のスーパーヒーローに近かった。心に想うものがあり、負ける気はしなかった。けれど勝てる気もなかった。それは一種の奥の手のようなものだった。

「小百合さん」

「なに？」

「……くそばばあ」

「なっ……!!」

小百合は目を見開いて、驚きを顔にした。薫自信驚いていた。こんな言葉、普段から使うことはない。

しかし薫は続けた。

「クソババア。あなたですよ、愛上小百合さん。どれだけ自分のことが好きなのかは知りませんが、いつもいつも気取って、見てるこっちはすごく不愉快なんです。上辺だけ取り繕って、実際は気味の悪い魔女のくせして、人に好かれようとか思わないでください。無駄美人は人に迷惑をかけず、ひとりぼっちで死ねばいいんです。あなたの本当は、誰の心にも残りませんから」

——ダンッ！　と鈍い音が轟いた。

それは小百合が机を殴りつけた音だった。殴られた机は脚が折れ曲がって、やがてその姿を保てずに崩壊した。木の天板が無残にも二つに割れ、なにかの暗示のようだった。

「……言いたいことは、それだけ？」

小百合が感情のない目をして呟いた。それでも小百合は美しかった。だからこそより一層不気味だった。

「ええ。最後にこれだけ言えれば満足です」

薫は微笑んだ。生唾を飲み込んで、あくまでも傲岸不遜に構える。

「もう疲れました。俺も本気を出します。あなたも本気で来て下さい。あと一発で、決めましょう」

小百合が口の端を釣り上げた。ぞっとするような歪んだ笑みだった。

「後悔、するなよ？」

「もちろん」

その言葉を言い終えた、その刹那。

薫が瞬きのために目を閉じた、その瞬間。

——薫の目の前に、小百合は移動した。

確かに、元々それほど距離が開いていたわけではなかった。障害物もなかった。しかしそれはあまりにも短い間の出来事だった。正に瞬間移動に近い足さばきだった。愛上流舞闘術の本気を感じて、その恐怖に薫は背筋がざわざわと騒ぎ立てるのを聞いた。

そして薫は、笑った。

薫の見つめる先で、思わず小百合は目を丸くしていた。小百合はもう薫を攻撃するモーションに移っていた。先程同様、当て身を叩き込む体勢だ。最後の一步を踏み込む間近だった。止まることはできないし、威力を抑えることもできない。その段階になってようやく小百合は我に帰ったようだった。薫が笑ったことがきっかけだろうか。なにせよ、小百合のことだからすぐに気付くはずだ。

だが、もう遅かった。

薫のすぐ後ろには、開いた窓があった。

——このまま小百合が当て身を叩き込めば、薫は、オチル。

小百合の顔が恐怖で引き攣るのがわかった。それは見ていて滑稽だった。

ここは二階だ。二階から落ちて、人は死ねるだろうか。おそらく死なないだろう。運動が得意でない者であれば、悪くて足をひねるか、折るか、といった程度の話だ。しかしそれは足から着地した際の話

である。頭から落ちたら人はどうなるのだろう。死ぬかもしれないし、死なずに、一生を病院のベッドの上で過ごすことになるかもしれない。そんなことはわからない。誰にも証明できないことだ。

しかし今、薫は、そんな二階の教室から落ちようとしている。

誰にもその結末を防ぐことはできないように見えた。その場には、加害者と被害者しかいなかった。世界の果てで二人、加害者は既にナイフを振り下ろし、被害者は既に諦めていた。それは喻えるならばそんな状況で、薫には覚えがあった。

そうして薫は、小百合の渾身の当て身を受けた。

薫の体は浮き、それは目論見通り窓枠から飛び出した。薫は痛みと共に解放感を覚えていた。重力や、怨みや、記憶。そういったものからの解放だった。

しかし再び重力にとりつかれるその寸前、小百合の手が薫のズボンのベルトをつかんだ。薫は上半身だけ窓から外に飛び出た形で、静止した。正に落ちる直前だった。

小百合は薫を教室の中に引きずり込み、そして薫の胸元を掴んで怒鳴りつけた。

「おまえ、俺に殺してもらうつもりだったのか！」

小百合は感情が昂ぶると男口調になる。薫はそんなことをぼうと呆けたような顔で思い出していた。今や皆を魅了するあの美しい顔は消え去り、怒りと悲しみと戸惑いでぐちゃぐちゃになった顔がそこにはあった。薫は思わず笑ってしまいそうだった。

「答えろ、薫！ おまえは今、死ぬ気だったのか！」

薫に答えるつもりはなかった。自分でも答えはわからなかった。死んでもいいとは思っていたけれど、決して死にたかったわけではなかった。むしろ絶対に死ぬわけにはいかなかった。ただこの女で試してみるのもいいかと思い、丁度背後に開いた窓があったから、実行しただけだ。それを開けたのが薫だという事実も、ただの偶然に過ぎない。綺麗事で済ませるならば、薫は小百合を信じていた。小百合が助けてくれることを、信じていたのだ。

「貴様……！」

小百合が齒軋りののちに拳を振り上げたのを見て、薫は小百合の腹を殴った。小百合が苦しげな声を上げて、やがて薫の胸元から手を離れた。薫は衣服の乱れを直して、小さな声で言った。

「賭けは俺の勝ちですね、先輩」

「なっ、おまえ……！」

跪いた小百合は薫を見上げ、薫は小百合を見下ろしていた。それはやはり薫にとって複雑な思いを抱かせるものだった。小百合のその顔は、いつか見た母の顔に似ているような気がした。

薫は目をつむって言う。

「約束です。俺の願いは、俺から監視を外すこと」

小百合は一瞬驚愕の顔で薫を見た。その後薫から目を逸らすと実に

悔しげに顔を歪めて、言った。

「それは……、断る」

薫は目を開けて、思わず笑った。

「先輩が決めたルールです。それを先輩が破るんですか？ 生徒会長である、あなたが」

「ああもうわかったよわかった！」

小百合は諦めたとしても言うように両手を上げるジェスチャーをした。

「もう二年だ。そろそろだとは思っていたんだ。監視は外す。……薫、おまえを信じるよ」

薫は微笑んだ。

「ありがとうございます」

「……はあ、してやられたわ」

小百合は床の上で胡座をかき、腕を組むと、むくれた表情で薫を睨みつけた。そうそう見ることで顔じゃなかったのが薫はおかしくて吹き出した。そんな顔をしていても美人だというのがまたおもしろかった。

「ご機嫌ね」

「すみません。勝ったものですから」

「たった一撃、それも不意打ちじゃない。それまではコテンパンにやられていたくせに」

「それでも勝ち勝ちですから。勝者が正義です」

「わかっているわよ。だから悔しいんじゃない。次は負けないわよ？」

薫は笑った。

「はい」

すると小百合は突如真面目な顔に戻って、言った。

「そういえばこの後どうするの？　もしよかったら一緒に食事に行きましようよ」

薫はあくまでも残念そうに首を振る。

「すみません。この後は美緒と由宇と夕食の予定なんです」

「ああ、そういえば金曜はその予定だったわね。でも、残念ね。こんな美人の誘いを受けることなんてそうそうないわよ？」

「はは、そうですね。じゃあ今度奢ってください」

「え、私が奢るの？」

「先輩が行っているような高級料理店じゃ、俺なんて水も飲めませ

んよ。親元を離れている身ですから」

「まあ、それもそうね。それじゃ、今度予約しといてあげるわ。その日は絶対空けときなさいよ」

「……ええ、必ず」

薫はその言葉を最後に、深く深く小百合に礼をして、背を向けた。組手の後はいつも薫が先に帰るのが通例だった。小百合と薫が共に下校する姿を小百合のファンの生徒が見たら、大変な事態に発展する可能性があるからだ。

けどそれも今日で最後だ、と薫は思った。そして教室を出る前に、一度振り返った。

そこには床に胡坐をかいて座る美女がいて、不思議そうな顔で薫を見つめていた。

薫は言った。

「先輩」

「……どうしたの？」

薫は出来る限りの笑みを、小百合に向けた。

「俺のこと、恨まないでくださいね」

小百合の驚く顔を背に、薫は教室の戸を閉めた。

#02 青の王子さま

薫は急な坂道を下っていた。学校からの帰り道である。焦茶色の学生靴を背負い、手持ち無沙汰に白い布袋をぶらぶらと揺らしている。歩みはどことなく重い。ローファアを引きずるようなその様からは、押し隠した疲れが漏れ出ている。

思い出されるのは、小百合とのやり取り。

「いてて」

急な胸の痛みに、薫は思わず呟いた。外側はもちろんのこと、内側も痛み出したから驚いた。苦いものが喉の奥から込み上げてくるような思いだった。

「大丈夫？」

薫の隣を歩く少女が、心配そうな顔で薫の顔を覗き込んだ。少女は名前を倉野美緒といった。小百合の美しさに比べれば平凡に映る容姿だが、それでもその顔立ちは可愛らしいと言えた。まだ幼さゆえの固さが残る、野桜の蕾のようであった。髪はショートカットとしても短いほどで、むき出しの額と耳が仄かに赤い。春の夕暮れは微かに冷たかった。

薫は微笑んだ。

「ああ、大丈夫だよ。いつものことだから」

「本当に？ あんまり無理しちゃだめだよ？」

「わかってるよ。でも、これで最後だから」

すると美緒は大きな目でぱちぱちと瞬きした。

「あれ、今日で終わりなの？」

「ああ。最後に勝ててよかったよ」

「あ、勝ったんだ。おめでとー」

「なんだよその意外そうな声」

「えへへー」

ばれたか、といった調子で、美緒は少し照れくさそうに笑った。

「でもなんだか嬉しいね。すごいね」

「まあ、不意打ちだけどさ」

「き、汚い！」

「不意を見せた小百合さんが悪い」

「あ、なるほど。そういう考え方もあるかも」

薫と美緒は顔を見合わせて笑った。

二人は幼なじみだった。誰よりも互いのことを知っている。たくさ

んの秘密と、忘れがたい記憶を共有していた。それはまるで双子星のようだった。

しかしそのような関係とはいえ、互いに全てを知り得るわけではない。特に美緒の性格は実に捉えがたいものだった。あっけらかんとしているようで、その実とてもよく周りを見ている。困っている人や動物を見ると放っておけず、誰彼隔てず平等に接する。そのくせ時折見せる悪戯な態度が非常にいじらしかった。優しく接すればからい、冷たく接すればしおらしくなる。どう扱っていいのか、薫は未だに判断に困っていた。

坂が終わって、三叉路にぶつかる。薫たちは右に曲がった。夕焼けが目眩しかった。ああ、なんて赤い、と薫は思った。

「ねえ、今日のお料理はなんだろうね」

美緒の問いかけに、薫は唸った。

「なんだろうな。まあでも、おかみさんの料理だからなにが出ても美味しいよ」

「うん、それもそうだね」

薫と美緒は、『サンIIテグジュペリ』と呼ばれる小料理店に向かっていた。二人の共通の友人の両親が、サンIIテグジュペリを切り盛りしている。友人の名前は後藤由宇といった。薫と美緒は毎週金曜日にそこで食事をいただいている。親元から離れて暮している身からすれば、家庭の温かい（それも非常に美味しい！）食事を週に一度食えることができるのは、とてもありがたいことだった。後藤家にはいくら謝辞を述べても足りないだろう。

「でもなんでおかみさんの料理はあんなに美味しいんだろうね」

「まあ、焼きそばを失敗する美緒からしてみれば当然の疑問だよな」

「むっ！」

美緒が薫を睨みつけた。

「そんな薫だって得意料理冷奴じゃん！」

「いや確かに冷奴は好きだからたまに食べるけど、別に得意じゃないし、得意とか議論するような料理じゃないし」

「あれは料理じゃないもんね」

「……おい、それは抗議が来るぞ」

「あ、そういえば豆腐の上にかき揚げや天ぷらを載せたものを『ぎぶとん』っていうんだよ？ 知ってた？」

「へー、それは知らなかったな。……って、なんだかうまく話題をすりかえられた気がするんだが」

「へへへー」

してやったりという顔で、美緒が笑った。

そうこうしている内に二人はサンIIテグジュペリの前まで来ていた。由宇の家は学校からさほど離れていない。普段は自転車通学のふた

りだったが、金曜日は空腹を促すため、そして食事の後に満腹の胃袋を動かすため、徒歩で通学することになっていた。彼らの家も学校からさほど離れていない。

サンⅡテグジュペリは小さな店だった。木と暖色の照明で庶民の家庭の温かさを強調し、それでいて清潔感にはとても気を配っていることが所々から窺い知れた。経営を始めて十数年経っているというのに、窓枠や床の隅にいたるまで美しい。むしろ味が増しているようにすら感じられる。食器や小物のセンスも洒落ているようでどこか懐かしいものが多かった。人々が知らない内になくしてしまった温もりやいとおしさといったものが、サンⅡテグジュペリには様々な形で残されているようだった。

しかし薫たちは店内に足を踏み入れることはなかった。裏へと回り、庭に出た。小さな庭だ。手入れが行き届いたそこでは夕日の下で様々な色の花が咲き誇り、きらきらと輝いている。縁側には一人の少年が座り、年老いた柴犬の首を撫でていた。由宇だった。

「由宇」

薫が声をかけると、由宇が応えるよりも早く、柴犬が薫に駆け寄ってきた。鼻を鳴らしながら頻りにジャンプをする。弱々しい足で、それでも必死で。そして続いて美緒にすりつく。美緒は満面の笑みで喜んだが、犬の方が二人の来訪を喜んでいる様子だった。動物は喜怒哀楽がはっきりしていて、薫はこんなふうに喜ばれると素直に嬉しいと感じた。思わず笑みが漏れる。

「こら、サンテックス。やめなさい」

由宇が言った。それは小さな声で、春の夕空にさっと染み込むよう

だった。とても澄んだ声である。たとえどれだけ遠く離れていても、彼の声ならば聞き取れるように薫は思えた。

サンテックスは由宇の言葉を聞くとぴたりと大人しくなり、早足で由宇の元へと戻って行った。よしよしと由宇が頭を撫でると、舌を出して実に嬉しそうな表情をした。

「よく来たね」

由宇は笑顔で言った。それはあまりにも完成された笑みだった。どこにも隙がない。誰が彼の揚げ足を取ることができるだろうか。薫は自分にはできっこないと改めて思った。

彼は白い襟付きの長袖を着ていた。ズボンは深い緑で、黄昏の闇に沈んでいる。きらりと胸元の青い石が光った。

由宇は爽やかな容姿の男だ。歳は薫と美緒と同じで15。だがその歳の少年にしては珍しく、性格はとても落ち着いていた。決して感情的にならず、いつもどこかで冷たく物事を見ている。けれど時に正義感に熱い姿も見せ、虐めをする者や基本的な社会のルールを守れない者を許さなかった。とは言っても罪を憎んで人を憎まず、そういう者からはきちんと話を聞いた。そして決して暴力には頼らず、理を積み上げた会話で説得した。学業だけでなくスポーツにも長け、生徒たちの模範のような男だ。

薫と美緒のふたりが由宇と出会ったのは中等部一年の話で、付き合いは三年になる。もう気は知れていた。薫と由宇にいたっては、休み時間の度に会話をする仲だ。

「こんばんは、由宇」

美緒が言った。由宇は美緒に目を向けた。

「こんばんは」

そして今度は二人に話しかける。

「もうすぐ来る頃だと思って待っていたよ。さあ、上がって。もうすぐご飯できるから。俺は母さんの手伝いしてくるけど、君たちはいつも通り居間でゆっくりしてていいよ」

「今日は私もなにか手伝おうか？」

由宇は立ち上がると、首を振った。

「大丈夫だよ、美緒。待ってて」

そして家の中へと消えてしまう。

薫と美緒は靴を脱ぐと、縁側から家の中へと入った。小料理店を内に孕んでいるというだけあって、後藤家自体は大きな家だ。しかし大黒柱たる父親はいない。後藤家は、母親を中心に回っていた。

「あら、薫くんたちいらっしやい」

おじゃましますと薫たちが畳敷きの居間に入ると、若い女がふたりを出迎えた。首からエプロンを垂らし、髪は後ろでひとつに纏めて頭巾の中にしまっている。後藤家の長女、つまり由宇の姉だ。もうすぐ29になる。

「ああ、ちょっと待ってね。テーブルの上片付けちゃうから」

長女が新聞やリモコンといったものを乱雑にちゃぶ台の上からどかす。薫と美緒は「ありがとうございます」と言っ、邪魔にならないう静かにその様子を見ていた。

「いいよ、持ってきて」

長女が大きな声で言う。

すると居間の引き戸が開いて、長女よりも若い女が二人食事を運んできた。ひとりは短い髪にパーマをかけていて、もうひとりは頭巾の隙間からポニーテールを出している。パーマが次女で25歳、ポニーテールが三女で20歳だ。由宇の姉三人衆である。当然皆美形だ。

三人は、三回に分けて料理や飲み物や食器といったものを食卓に運んだ。なにもせず見ているというのは非常に心苦しいものだ、と薫は食卓に鎮座して独りごちた。これは後藤家で食事をいただく度に思うことである。

バイバイ、と三人が台所に戻り、続いて由宇の母親が居間に現れた。炊飯器を持った由宇も後ろにいる。

「こんばんは、おかみさん」

薫と美緒は揃ってそう挨拶した。由宇の母親は皆からおかみさんと呼ばれている。割烹着に頭巾姿という昭和のお母さんといった格好の彼女は、とても温和そうな笑みで二人に話しかけた。

「こんばんは。今日も来てくれてありがとうね。早速だけど今日の料理は――」

おかみさんはちゃぶ台の上の料理に目をやってひとつひとつ説明を始めた。

「もう四月も終わりでしょ？　ちょっと早いけど、アジが手に入ってるね。なめろうにカブとニンジンのつみれ汁でしょ。あと五月の食材といえば新じゃが。鶏肉とジャガイモをカレー風味で揚げてみたの。このアスパラは新鮮だから生浸しにして、桜えびはまたひじきと一緒にふりかけにしたから、ご飯にかけて食べてね。おかわりもたくさんあるから。それと……」

その他にも食卓にはたくさんさんの料理が並んでいた。ちゃぶ台からはみ出してしまいそうだ。薫はその様を見ているだけで食欲が湧いてくるのを感じた。運動してきたこともあったが、なによりもやはりおかみさんの料理がとても美味しそうだからだろう。おかみさんの手には魔法がかけられているようだ、と薫は思った。

「そんなところかしらね。さて、由宇、ご飯よそった？」

「うん、よそったよ」

最後に由宇が配膳したご飯が食卓に置かれる。それを見届けるとおかみさんは立ち上がった。

「それじゃあ私はまだ仕事があるから台所に戻るわね。あなたたちはゆっくり食べていいから。おかわりはいつも通り由宇に言っ
てね」

そう言い残すとおかみさんは居間を出て行った。居間には薫と美緒と由宇の三人となった。おかみさんや由宇の姉たちはサンⅡテグジュペリの仕事が忙しくて、一緒にごはんを食べることができないのだ。

三人はいただきますと合掌して、食事を始める。

「ああ、おいしい……」

早速つみれ汁を飲んだ美緒が、しみじみとした口調で呟いた。顔は綻んで、幸せが溢れ出ている。

薫は黙々と食べ進めたが、心の内では美味しくて美味しくてたまらなかった。にやけてしまいそうだった。

「どうかしたかい、薫。嫌いなものでもあった？」

そんな薫の様子に気付いた由宇が声をかけた。

「いや……、ただ、本当に美味しくて」

「ねー？　なんでこんなにおいしいんだろう。早く弟子入りしなくっちゃ」

「あはは、なに言ってるんだよ。美緒の料理だってうまいじゃないか」

その言葉に薫は思わずむせそうになった。由宇はこういう言葉をさりうと言う。そしてそれがまったくわざとらしくないのだ。薫は正直にすごいと思う。

その言葉に美緒も少し驚いている様子だった。

「え、そうかな……」

由宇は逡巡せず続ける。

「そうだよ。この前ご馳走になった味噌汁、すごく美味しかった。だから美緒はもっと自分に自信持って大丈夫だよ。少なくとも俺と薫は美緒の料理好きだから」

今度こそ薫はむせた。なんだって？

美緒は少し赤くなっているようだった。

「で、でも、薫いつもばかにするし……」

「美緒と薫は付き合い長いから、わかってるだろう？ 薫は照れ屋なんだ。心の中では美緒の料理美味しい、最高って思ってるよ。絶対に。賭けてもいい。だって知ってた？ 美緒の料理食べてる時の薫の顔、すごく安心してるんだ」

「由宇！」

薫は語気を荒らげて言った。

「なに適当なこと言ってるんだよ」

「適当じゃないよ、本当のことじゃないか。この前だって――」

「あーわかったから続き言わなくていいから！」

薫が遮ると由宇は大人しくなった。何気なく薫が美緒を見ると、美緒も何気ない風を装った視線を薫に向けていた。目が合う。次の瞬間美緒はつーんとそっぽを向いた。なんだよ、その態度。薫は顔をしかめた。

そこからしばらくぎくしゃくした食事が続いた。沈黙を割ったのは由宇だった。

「そういえば今日はどうだったの？」

「なにが？」

「生徒会長との組手だよ。勝った？」

あー、と薫は思い出して、汁をすすった。

「まあ、勝ったよ」

「え、勝ったの!？」

薫は由宇を睨みつけた。

「驚きすぎ」

美緒が大きな声で笑った。不愉快だ、と薫は思った。

「おまえ、美緒よりひどいぞ」

「ごめんごめん」

由宇が謝る。「ちょっとどういふこと。私がいつもひどいっていうの？」という美緒の非難は、無視した。

「でもすごいじゃないか。初勝利だね。おめでとう」

「不意打ちだけどね」、と美緒。

「そうなの？」

「まあな。でも、隙を見せた小百合さんが悪い」

「ははは、確かにそうかも。でも珍しいな、彼女が不意を突かれるなんて」

薫は一瞬小百合との組手を思い出した。窓から上半身だけ外に出て、そこから見た空を思い出した。

「なんだよ、やっぱり信じられないのか」

薫が不満げに言うと、由宇は再び笑った。

「いや、ごめん、そうじゃないよ。でも、なんでかなって。隙を見せるとか、そういうイメージないから、あの人に」

「だからイメージに囚われすぎなんだよ。小百合さんの本性は魔女だって教えただろ？ 気をつけないと桃みたいに皮剥かれるぞ」

「はは、なんだよそれ。さすがにそこまではしないだろ」

「まあ、確かに」

三人は笑い合う。微笑ましい時間だった。窓の外では夜が静かに息をして、月が爛々と輝いていた。サンテックスが小さく一度吠えて、時計の長針がかちりと一つ前に進んだ。

クラスメイトのことや先生のこと。最近の流行や面白いテレビ。そんなことを話しながら食事をしていたら、時も過ぎ、あれだけあった料理もあらかた片付いていた。胃袋が膨れて、薫はベルトを緩める。銀のやかんに入った冷たい水が喉に心地良かった。もう一杯注いで、飲む。

「あーお腹いっぱい」

美緒が脚を崩して言った。

「おい」

「わかってるよ。ちゃんと姿勢を正して、手を合わせて、ごちそうさまでした、でしょ？ はい、ごちそうさまでした」

「よし、許す」

「はは、何様だよ、薫」

程良い満腹感と疲労感に、薫は若干眠気を感じていた。目をこすり、欠伸を噛み殺す。本当は片付けをしたかったが、今はサンIIテグジュペリも忙しい時間なので、食器を持って行くと邪魔になる。申し訳ないが、ちゃぶ台の上に重ねて置いておくのが常だった。

薫は由宇に目を向けた。当たり前のように、由宇が笑顔になる。

「どうした？ 眠い？」

「いや、大丈夫。それより由宇。絵、見せてくれないか？」

「え、あ、絵かあ……。あー……」

薫の発言に、突如由宇は下を向いてしまった。恥ずかしがっていた。

「あれからほとんど進んでないよ？ 新しく書いたものも無いし」

「別にいいよ」

「私も見たい！」

美緒の元気な声に押されて、由宇は苦笑した。

「わかったよ。じゃあ、ついてきて」

由宇はふたりを二階にある彼の部屋へと案内した。戸を開けて、中に入る。

——その瞬間、空気が変わった。

「わあ……」

美緒が声を上げた。美緒はいつもこの部屋に入るとき声を上げる。けれど薫も初めは思わず声を上げてしまった。その光景は、思わず

声を上げてしまうほど、綺麗だった。

青。

青だった。青い絵だ。真っ白なキャンバスの上に描かれた青い絵が、部屋中、所狭しと飾られていた。どの絵を見ても、赤や黒といった色は見当たらない。サンテックスも、春の風に揺れる桜も、遠く海の向こうの教会と鐘の音も、全てが青かその派生色で描かれていた。温もりも、冷たさも、喜びも、悲しみも、彼は青という色だけでそのすべてを表現しようとしていた。そこにあるのは、そういった水彩画だった。

由宇が移動式の回転椅子に腰掛ける。

「ほら、別にこの前見たのと同じだろう。そんなおもしろくないよ」

「それは？」

薫が部屋の中央、イーゼルの上のキャンバスを指差す。薫と美緒のいる位置からは裏側しか見えない。

「あー……、まあ、少しは進んだけど、ちょっと詰まってる」

「見てもいいか？」

「……うん、じゃあ、見えてみてよ」

薫はキャンバスの表へと回った。

それは少女の絵だった。青い青い川の上に少女が浮かんでいた。水

に濡れた髪は重みをもって膨らみ、ワンピースの裾も広がっている。少女の目は閉じられていて、それは安らかな笑みであった。少女の周りには青い鳥が三羽飛び回っていて、小さなそのくちばしで軽快に歌をうたっているようだった。幻想的で、とても微笑ましい絵だった。そして薫と美緒は、その少女を知っていた。

上乃木春花。

三人のクラスメイトで、由宇が好意を寄せている相手だ。

「鳥、描いたんだね」

先週二人が見たときは青い鳥はいなかった。川も少女の顔もあまり書き込まれていなかった。少し進んだと由宇は言っていたが、十分書き進んだように薫は思えた。

「うん。青い鳥なんて、チープかな」

「全然そんなことないよ。すごくかわいい」

「ありがとう。薫はどう思う？」

薫もすぐくよくよくできた絵だと思った。けれど一箇所だけ気になった。

「ここ、なにか書き足すのか？」

その絵には、明らかに不自然な空白があった。美緒も気になっていたようだ。二人で由宇を見る。

由宇は苦笑した。

「やっぱり気付くよね。そうだよ。そこに描くべきものがないんだ。だから、詰まってる。筆が止まってる。他の箇所をもっと描き込んでもいいんだけど、バランスもあるから、先にそこを埋めてしまいたいんだ」

薫は口を覆い隠すように手を添える。考えるときの癖だった。

「春花の誕生日は……」

「8月23日だよ。時間はあるから描き直してもいいんだけどさ、構図は気に入っているんだ」

「うん。この前見た時より春花だってわかるね。春花っぽい、っていうか」

「ありがとう、美緒」

「そうだ、青いバラなんてどう？ あと、青い蝶とか」

「バラに、蝶か。うん、蝶はいいかもしれないね。鳥が食べちゃいそうだけど。薫はなにか思いつく？」

薫は真面目な表情で言った。

「それを考えるのは、おまえの仕事だろ」

すると由宇は何かを思い出したような顔をして、そして笑った。

「はは、やっぱり薫は厳しいな。……でも、その通りだね。これは

僕が考えるべき問題だ。時間もあるし、きちんと考えて、納得できる形で春花に渡すよ」

薫は肯くと、急ににやりと笑って、由宇の首に腕を回した。

「まあ、しっかりやるんだな、『青の王子さま』」

「あ、それは言わない約束だろう」

由宇が不満そうな顔をした。

由宇は皆から、『青の王子』と呼ばれていた。三人が出会った中学一年の時には既に、由宇は王子だった。彼のことを知る人は皆、由宇を王子と認識していた。もちろんそれは彼の家が『サンⅡテグジュペリ』という小料理店を開いていたことが大きい、性格、容姿、声――彼を形作る全てから、王子に欠かせない気品や恭しさ、揺ぎない正義感が伝わってきたことも事実だった。

そんな由宇が青の王子と呼ばれるようになったのは、中学二年の頃だ。彼の描いた絵が、世界児童画展で文部科学大臣奨励賞を獲得した。小さな町はにわかに騒ぎ立ち、由宇は一躍有名人となった。

その時書いた絵も、青い絵だった。ぞっとするような、美しい青の絵だった。今の由宇が描く温かさを秘めた青ではなく、戦慄が走るような青だった。その鋭利な冷たさがなければ、内閣総理大臣賞をとっていたかもしれないし、落選していたかもしれない。とにかくそれは、中学生が描くにはあまりにも洗練された青の絵だった。薫は恐怖すら感じたことを覚えている。

それから彼は『青の王子さま』と呼ばれるようになった。胸にぶら

下げた青い石もそれに相応しかった。

しかし由宇は、そう呼ばれることを嫌っている。自分のような庶民が王子と称されることが、恥ずかしく、申し訳ないようだった。俺なんてそんな素晴らしいものじゃない、と由宇はよく言った。今日も由宇は眉根を寄せた。

「薫はそれ、言わないはずじゃないか」

「さっき俺のことをからかった罰だよ」

「別にからかったつもりなんてないよ、まったく……。それに俺はそんな柄じゃない、って何度も言っているだろう。みんなが思っているほど、俺はいい奴じゃないよ」

「そんなことないよ」

間髪入れずに、美緒が言った。薫と由宇の視線が集まる。けれどそんなものは気にせず、当たり前のように美緒は笑顔で続けた。

「由宇は私にとっての王子さまだよ」

薫は咂然とした。由宇も驚いているようだった。先程は由宇が美緒を褒めて、今度は美緒が由宇を褒めた。なんでこの二人はこんなにも素直なのだろう、と薫は思った。こっちが恥ずかしくなってくるようだった。

その時、美緒の携帯が鳴った。画面を見て、渋い顔をする。

「あー、礫からだ。ごめんね、先に下戻ってるね」

そう言って美緒は部屋を出て行った。残された二人はしばらく沈黙を守った。再び話したのはやはり由宇からだった。

「美緒ちゃん、いい子だね」

「ん……、ああ」

「手、離しちゃだめだよ」

「……わかってるよ」

薫は目の前の青い青い少女を見ながら、美緒のことを思った。

そろそろ、帰る時間だった。

#03 嘘ついて、風邪ひいて

薫と美緒は、同棲していた。

もちろん同棲にいたるまでには、それなりの事情と過程があった。誰かがいなくなって、誰かが傷ついた。深い深い傷が未だに消えることなく疼いている。ただそういった内情に踏み込まず事実だけを記すならば、そういうことになる。

さらに彼らの暮らす家にはボディガードがいた。九重礫という女だ。礫は今日も玄関で二人を出迎えた。全身を黒いスーツに包み、髪型はポニーテール。化粧もせず、切れ長の目で鋭く二人を見据えている。冷たく暗い印象の女だった。なにを考えているのか、まるで表情から読み取ることができない。ボンドガールのような雰囲気があった。

「おかえりなさい」

礫が言った。

「ただいま」

美緒が言った。美緒は礫と話するときだけ、態度が少し冷ややかになる。それは美緒らしくない変化だった。薫はその変化に気づいていないふりをする。

実際のところ礫が守っているのは、美緒一人だ。美緒さえ無事であれば、礫は火中の薫を容易に見捨ててするような女だった。礫にとって

薫は美緒の害であると同時に、美緒の盾でもあった。その一点と、もう一つのある理由のために、薫は生かされているに過ぎない。現に礫の薫を見る眼は、モノを見るそれだ。

薫と美緒が共に住んでいる家は、二階建ての一軒家だ。薫の父親が用意したものである。桜井家は決して裕福ではなかったが、父の顔が広がった。彼は警察官だった。

美緒は礫と共に居間へと直進し、薫は一人階段をのぼった。二階の自室の扉を開け、電気を点ける。電灯が白々しく室内を照らし出した。簡素で狭い部屋だ。シングルベットと机がそれぞれ壁に寄せられて配置されており、本棚のみならず机の上もベッドの下も沢山の物が積まれている。薫が古本屋から買い漁った小説だ。

薫はベッドに倒れこんだ。胃は満たされ、全身には心地よい疲労と、痛みがあった。頭はぼんやりと膜がかかったようで、うまくものを考えられなかった。どうやら眠気に襲われているらしい。睡魔の存在をすぐ傍に感じた。黒猫が塀の上からこちらを見つめているような感覚だった。にゃあと声がして、薫も鳴いた。すると誰かが笑った。美緒の声だ。

「『にゃあ』だって！　ぷぷっ、薫ったらかわいい」

……いつの間にかつむっていた目を開けると、声は消えた。どこにも美緒の姿はなかった。猫もいない。

改めて、眠い、と思う。

少し夢を見ていたみたいだ。黒猫と美緒の夢。不吉で穏やかな夢。薫は目をつむって、思い出す。猫が鳴いて、薫も鳴いて……。

薫の意識はそこで途切れ、深みへと沈んでいった。再び夢を見たような気もしたが、定かではなかった。

気付けば部屋は暗かった。電気を点けたまま眠ったはずなのに、そこには当たり前のように暗闇が居座っている。そして人の気配もあった。美緒だ。

美緒はいつもの白いパジャマ姿で、ベッドに腰掛けていた。左手は膝の上に、右手は薫の手に添えられていた。下を向いて、うつろな目で足元を見つめている。見るからに元気がなかった。薫はそっと声をかける。

「美緒」

はっと驚いて、美緒が薫に顔を向けた。小さな笑みが、小さな顔に浮かぶ。

「おはよう、薫」

「おはよう。……今何時？」

「もう十一時だよ。午後十一時。礫も眠っちゃった」

「そっか……。あー、じゃあ、だいぶ眠っちゃったな。ごめん」

「んーん、大丈夫。薫、疲れてたもん。おいしいご飯も食べて、お腹いっぱいだったしね。私だってねむねむだよ」

薫は体を起こし、壁に背中を預ける。

「じゃあ、寝る？」

「うん」

「それなら俺、風呂入って、歯磨いてくるけど、……どうする？」

美緒は薫の目をじっと見て言った。

「私も行く。下で待つ」

「……そっか。オーケー」

薫は目をこすりながらベッドから抜け出て、着替えの準備をした。パジャマと新しい下着を手につつ。その間背中に美緒の視線を感じたけれど、気にはならなかった。

二人は階段を降りて一緒に洗面所の中へと入り、しっかりと鍵を閉めた。薫は服を着たまま風呂へと入り、そこで服を脱いだ。ビニール袋を二枚使い、その中に濡れないようにしまつて、風呂の隅に置いておく。美緒は風呂の戸に背中を預けてしゃがみこんだ。一枚の戸を隔てて、薫は体を洗い、美緒はその音を聞いている。自分を守ってくれる者の存在を、その音から感じているのだろう。

「ねえ、薫？」

やがて声が聞こえたので、薫は頭を洗う手を止めた。

「なに？」

「さっき、薫、眠りながら『にゃあ』って鳴いてたよ」

薫は絶句した。後から美緒の笑い声が聞こえてくる。デジャブだと薫は思った。

体を洗い終わると、戸を少しだけ開けて、美緒がバスタオルを渡してくれた。体を吹き終われば服を渡してくれる。薫は風呂の中で着替えを終えた。火照った体で美緒と向かい合う。彼女はとろんとした目をして、とても眠そうだった。ぽんぽんと薫が彼女の頭に手をやると、「ふぬー」と不思議な言葉を発した。

「もう少し待ってて」

薫は急いでドライヤーで髪を乾かし、歯を磨いた。その間美緒は壁に寄りかかって目をつむり、今にも眠ってしまいそうだった。おそらく座ったらもう立ち上がれないのだろう。努力して立っているようだった。

薫と美緒は手を繋いで階段をのぼった。そして同じ部屋に入る。そこは二人の寝室だった。テレビと戸棚と小さな冷蔵庫と、クイーンサイズのベッドが置かれている。薫は衣服を整理すると、冷蔵庫からミネラルウォーターの入ったペットボトルを取り出し、戸棚から出したコップに注いだ。静かな寝室にとくとくと水の注がれる心地よい音が染み渡る。薫は一口飲むと、ベッドに腰掛ける美緒に渡した。

「……ん、あ、ありがとー」

危うげな手つきながら両手でコップを掴み、美緒はゆっくりと水を飲み下していく。薫は電気を消した。窓から差し込む月の光が、仄

かに室内を照らしている。儚い闇だ。ガラスのコップが淡く光っているようにも見えた。

水の減ったコップを受け取り、それをナイトテーブルに置く。薫は優しく美緒の額を人差し指で押した。すると美緒はその勢いでベッドに倒れ込んだ。「あたっ」と変な声が上がった。

「こら、美緒。布団の上に寝るな」

「わかってるよー。じゃあ人のこと押したの誰よーもー……」

不平を言いながらごろごろと転がって、美緒はベッドから落ちた。薫が布団をめくると、再び這い上がってきた。一緒に布団の中へと入る。

「あー、だめ。私もう眠っちゃう……」

美緒が小さな声で言った。そして薫の手を掴んだ。手は温かだった。薫の隣に美緒が存在していることの、それがなによりの証拠だった。それは喜ばしいことであり、そしてとても淋しいことでもあった。

美緒は精神的な問題で、一人になることができなかった。一人になると極度の不安に苛まれ、なにをするにも近くに親しい人の存在を求めた。ある程度我慢できるようなものになってきたが、未だにそれが計り知れないストレスであることに変わりはない。だから美緒は薫が風呂に入っている間も傍にいるし、寝るときも一緒だ。美緒にとってはそれが当たり前前で、一人こそが異常だった。

倉野真緒。

美緒の双子の妹であり、二年前まで薫の立ち位置を任されていた少女だ。

だが、彼女は今ここにいない。

薫は真緒の代わりだった。九重礫一人では決して担いきれない重要な役であり、ただそれでも代替品に過ぎないことは事実だった。その事実について薫がなにも感じていないと言え、嘘になる。しかしなにも感じていないと己を偽ることこそ肝要だった。薫は嘘つきだった。

ふと横を見れば、美緒は寝息を立てていた。それはあまりにも無防備だった。そつとキスをすることもできれば、首を絞めることもできる。ただ美緒の手の感触が、いつも薫を冷静にした。薫は目をつむって、自分も眠ろう、と思った。

しかし夜は冷たく、長かった。疲労に体は浸かっている、思うことがあった。先程中途半端に眠ってしまったこともあって、目は冴えていた。それでも薫は眠ろうと努めた。そして確かに眠った。だが眠りは浅かった。再び目を開けたとき、まだ窓の外は暗かった。星が輝いていた。

布団がめくれ上がっていて、美緒は腹部を出して眠っていた。薫も下半身にしか布団がない状態で、寒気を感じた。冷える夜だ。薫は美緒の着衣を整え、布団を直した。そして水を飲む。美緒はどんな夢を見ているのだろう、と思った。

静かに部屋を抜け出て、トイレに向かう。すると待ち構えていたかのように、暗い廊下の途中に九重礫が立っていた。それはさながら亡霊のようにも見えた。壁に背中を預けて、腕を組んでいる。彼女

の眼が薫に向けられた。

「言っておくことがある」

礫の真剣なまなざしに、薫も真面目に聞くことにした。

「なんですか？」

「今日、度々外から妙な気配を感じた」

「妙な気配？」

薫は眉根を寄せた。礫は一日中家の中にいるため、外というのは家の周りのことになる。礫の雰囲気から言っても、話の流れから言っても、それは穏便な話ではなかった。

「妙、というのは？」

「この家を気にしていた。それは間違いない。だが意思が感じられなかった。盗みに入りたい、殺してやりたい、そういった意思が」

「意思のない気配……ですか。たしかに妙ですね」

「ああ」

「姿は？」

「捉えられなかった。どの監視カメラにも映っていない。それどころかどこから見られていたのかもわからなかった。見られていたかどうかすら定かではない。ただそこに、気配があった」

気配だけがあり、姿どころか意思すら持たない。それは話だけ聞けば幽霊を思わせた。「幽霊みたいですね」と正直に薫が言うと、礫はいくらか口元を歪めた。しかしなにも言わなかった。馬鹿馬鹿しいとでも告げるようなため息の後、薫に尋ねる。

「おまえは外でなにか感じることはなかったか？ 美緒様と一緒にいるときに異変はなかったか？ 今日でなくてもいい。小さなことでもいいから、なにかあれば話せ」

薫は口元に手を当てて、最近の出来事を振り返った。しかしこれといった心当たりは無かった。礫の言うような妙な気配が近くにあれば、いくら薫でも気付くはずだ。なにより薫には自分を監視している人物がいるというのに、彼（もしくは彼女）がそんな気配を見逃すとは思えない。

「なにも。普段どおりです」

すると礫は案外素直に引き下がった。「そうか」と呟いて、「ならいい」と背を向ける。

「気を抜くなよ。外ではおまえが美緒様の盾だ」

そう言い残して、礫は自室へと戻っていった。

＊

翌朝、薫と美緒は朝早くに目を覚ました。ふたりで一階の台所に行き、朝食の準備をする。居間には既に礫がいて、三種類の新聞を読み分けながら、テレビのニュースを聞いていた。相変わらず器用だ

なと思う。

朝食はベーコンエッグとサラダ、そしてご飯だ。基本的に朝食はご飯と、桜井家では決められている。よく薫の母が言ったものだ。朝はご飯食べて力出さなくちゃね、と。母の作る料理は美味しかった。『サン||テグジュペリ』のものとは違った美味しさがある。似ているけれど、それはどこかで確実に違っていた。久しぶりに食べたいと思うことは、きっと、すごく罪なことなのだろうと、薫は思う。

物思いにふけていたため、ベーコンエッグを少し焦がしてしまった。だがまあいいだろうと、薫はそれを皿に分けた。三人分用意し、盆に乗せてダイニングテーブルの上へと持っていく。まだ眠そうな美緒の担当は、サラダだ。レタスをちぎって、細切りのニンジンと大根を盛って、水菜を散らして、おかみさん特製の青じそをかけたものである。簡単だけど、少し酸っぱい青じそがからんでとても美味しい。

礫は基本的に薫たちの生活に関与しない。ただ、守るだけだ。でも食事は一緒にとりし、挨拶もする。礫は確かにそこにいる。

三人はいただきますをして、食事を始めた。しかし食卓にはベーコンエッグにかける醤油がなかった。いち早くそれに気づいた美緒が、取りに行く。三人分の水も用意しようと、薫も後から立ち上がった。

台所で出会ったとき、美緒はその手にドライヤーを握っていた。薫は思わずぎょっとして、動きを止めた。美緒は薫が来たことにほとんど気づいていない様子で、薫の横を通り過ぎようとする。すれ違いざまに、薫は美緒の腕を掴んだ。

「ん、あ、あれ？　どうしたの、薫？」

美緒が薫の顔を見上げる。よく見ればその瞳はとろんと潤んで、頬は赤く染まっていた。そういえば起きた時からこんな様子で、うつらうつらと眠たそうだった。当初は寝ぼけているのだろうと思っていたが、嫌な予感がした。

「どうしたのって、それ、どうするつもりだよ」

「え、もちろん卵とベーコンにかけるんだよ」

「ドライヤーを？」

薫が指さすと、美緒はようやく自分がなにを手を持っているか気がついたようだった。薫が驚いた以上に驚き、慌てて背中に隠すと、あははと照れ隠しに笑う。

「あれ、おかしいな。朝だから、寝ぼけてるのかな」

薫はむりやり美緒を近くに引き寄せて、その額に手をおいた。……やはり平常よりも熱い。

「おまえ……」

「えへへ……、ちょっとね、ぽーとするかも」

風邪だった。明らかに、風邪だ。薫はため息をつき、夜中に美緒が腹部を出して眠っていたことを思い出した。

「まさかとは思っていたけど、そのまさかか」

「え、なんのこと？」

「いや、いいんだ」

薫は頭をかいて、眉根を寄せた。こんなことになるとはまさしくまさかだったが、なってしまった以上は仕方がない。台所から顔を出し、テーブルで醤油を待つ礫に声をかける。

「礫さん、美緒が風邪を引きました」

「知っていた」

当然のように礫は言う。気付かなかった薫を非難するようにも聞こえた。

「知っていたなら言ってくださいよ」

「自分で気付け。そもそもどうせ昨晚も裸で寝かせたのだろう。毎晩貴様が無理をさせるからだ」

「いやいやいやいや、朝からいつもの下品なくだりはいらないます。そもそもものにも、僕たちは健全です。あなたのほうがいやらしい。少しは自重してください、礫さん」

「ほう。そうやっておまえはまた処女である私を馬鹿にするのだな。下衆め」

苛々とした表情で、礫はご飯を食らった。咀嚼しながら薫を睨みつけている。礫は性的な経験がないことをコンプレックスにしており、十五という若さで同棲している薫を事あることからかってくる。

もちろん主人である美緒にはなにも言わないが。

薫は首を振った。そして美緒に向き直る。

「ごめん、気付かなくて」

「うんうん、大丈夫だよ。私、元気だもん」

そう言って力こぶをつくる美緒だったが、笑顔が弱々しかった。

「醤油とドライヤー間違える人が大丈夫なわけないだろう。そもそも洗面所にあったはずのドライヤーと醤油をどうやったら間違えられるんだか……」

謎だった。

「とにかく、ベッドに行こう。眠ってなきゃ駄目だ」

「でも」

「でももへちまもないんだよ」

「なんでそこでへちまがでてくるの?」

「へちまなおまえにはわからないよ」

「なにそれ! 意味わからないけど、むかつく!」

「そんな弱々しい声で言われても怖くないよ。いいから、ほら、ついてくる」

薫は嫌がる美緒の手を引いて、階段をのぼり、寝室まで連れていった。むりやり寝かしつけ、布団を普段より多くかけてやる。熱いと美緒は文句を言ったが、自分が病人だという意識はあるのか、蹴飛ばそうとはしなかった。薫は子機で一階の礫に電話をかける。

『なんだ』

「すみません、冷たい水の入った洗面器と、あとタオルをお願いできますか？」

『……行っているのか？』

「え？ あ、はい。もちろんですけど」

『そうか。てっきり私は弱った美緒様をおまえが襲っているものだと――』

薫は電話を切った。襲っていると思うなら、お前が守りに来なくちゃ駄目だろうと、心の中で強く突っ込む。礫のボディガード精神はどこかで致命的に狂っていると薫は思った。

「ねえ」

苛立つ薫に、小さな声で美緒が声をかける。

「ん、あ、悪い。どうした？ 水分とるか？」

「うんうん」

美緒は首を振った。そして手を伸ばす。その手は薫の服の裾を掴んだ。

「ごめんね」

美緒が言った。小さな声だった。

「すぐ治すから、ごめんね。許してね」

最初薫は美緒がなんで謝るのかわからなかった。迷惑をかけてしまったことに対して謝っているのかと勘違いした。けれどすぐに思い直した。彼女の言葉の後ろには、さらに無言の言葉があった。美緒は、このタイミングで風邪を引いてしまったことを謝っているのだ。大事な日を目前に控えた、このタイミングで風邪を引いてしまったことを。

全てを悟って、薫は微笑んだ。

「気にすることないよ。大丈夫、すぐ治るさ。てか、謝るくらいだったら言う事聞いてちゃんと寝ろ。早く寝ろ。ほら寝ろすぐ寝ろはいもう寝たー！」

美緒もくすりと笑う。

「そんな早く寝れないよ。お腹だって空いたし、喉だって乾いた」

「わがままなお姫様だな」

「えへへー、わらわの前に跪けー。そして茶菓子持ってこーい」

「茶菓子？ 歳くったお姫様だな」

「そう。アラサーで焦ってるの。おしとやかになろうとお茶を始めただけど、お茶菓子がおいしくてどんどん太っちゃって、前よりモテなくなっちゃったの」

「ははっ、どんな設定だよ。でもまあ、美緒らしいお姫様だな」

「あ、ひどーい。お姫様泣いちゃうよ？ 泣かせたらその人が結婚しなくちゃいけないんだよ？」

「でも相手は美緒なんだろう？」

「え？ あ、う、うん。そうだけど……？」

「それは困ったな」

「困るんかいっ！」

傍目からしたらあまりにも馬鹿らしい会話をして、薫と美緒は笑い合った。そこには幼馴染同士にしか出せない独特の空気感がある。薫は改めて、自分がたくさんの美緒の表情を知っていることに気づいた。笑顔や泣き顔はもちろんのこと、親しい者に向ける表情と学校での彼女の表情が違うことも知っている。とても素直で優しく見える美緒にだって、数えきれないほどの様々な表情があるのだ。時には美緒だって、人を憎む。その表情さえ、薫は知っている。きつと真緒もその表情は知らないはずだ。

やがて薫が頼んだものを持って、礫がやってきた。薫はその場を礫に託し、おかゆをつくりに一階に戻る。そこでダイニングテーブル

を見れば、きれいに礫と美緒の料理がなくなって、皿だけが残っていた。礫はよく食べる。そして食べるのが早い。この事実がボディガードゆえのことなのかはわからないし、知りたいとも思わない。

おかゆは冷蔵庫にしらすがあったので、しらすがゆにした。持って行って、食べさせてやる。それを礫は不服そうに見つめていた（もちろん薫は無視した）。

やがて礫は一階に戻って、薫と美緒はしばらく二人きりで過ごした。互いにさほど話さなくても時間はいつの間にか過ぎていった。そして九時頃に、美緒は眠ってしまった。すうすうという寝息を確認して、薫は一階の居間へと向かう。礫は報道番組を見ながらコーヒを飲んでいた。これがボディガードの正しい姿なのだろうか。激しく疑問に思う薫だったが、無視して声をかける。

「美緒が眠りました」

「そうか。睡眠薬でも使ったのだな。そしていかがわしいことをしたと。了解した」

「了解しないでください！ てかそんなことが起きていると思うなら助けに来いよ！ ああもう苛々するな！」

するとようやく礫が真面目な表情で薫を見た。そして言う。

「出かけるのか？」

薫はその言葉に驚いた。自分が今から礫に言おうとしていることがまさにそれだった。報道番組に視線を戻して、礫は続ける。

「驚くことでもないだろう。お前の意思ぐらい表情を見れば読み取れる。早く何処かに向かいたいと、顔が語っているんだよ」

「……さすがですね。見直しました」

「おまえに見直されても嬉しくないがな」

薫はため息をつく。

「まあ、じゃあ、そういうことです。美緒をお願いできますか？」

「起きたときにおまえが隣にいないと知ったら、荒れるぞ？」

「それでも、行かなければいけないところがあるんです」

「どこだ？」

「駅前です。小百合さんから食事に誘われているんです」

嘘だった。

「ほう。二股か。ご盛んだな」

「……残念ながら、小百合さんを相手にするだけの胆力も体力も持ち合わせていませんよ」

薫は笑って、じゃあお願いしますと、家を出た。

＊

斜陽が美しい森だった。薫は息を切らして、そんな森を歩いていた。森の空気は冷たく、そしてとても澄んでいた。影は幾重にも光を切り裂いて、足元の湿った苔は薫の靴にへばりつく。どこから聞こえてくるのはおそらく鳥の羽音で、右か、左か、様々な方向から耳を打った。気付けば自分の息の音がとても大きく聞こえていた。興奮しているのか、と薫は自問した。それはそのはずだった。なにしろ、一年ぶりなのだから。

やがて視界が開けて、広場に出た。草原がうねる、森の中の空き地だった。そこに、一人の少年が立っていた。12、3の顔つきで、つばの付いた帽子を目深にかぶっている。

少年が帽子をずらして視線を薫に送った。大きな金の瞳が輝いて、そしてにやりと、笑う。

「やあ、薫」

そこには一年前と同じ姿で、幽霊がいた。

#04 幽霊

彼には名前がなかった。だから薫は彼のことを『名無し』と呼んでいた。味も素っ気もない名前だ。しかし彼は名無しと呼ばれることに抵抗を見せなかった。むしろ進んで受け入れてみせた。下手な名前をつけられるよりはそのほうがいい、と。

名無しは12、3歳ぐらいの少年の姿をしていた。季節に合わせて服は変えてみせたけれど、いつも帽子は欠かさなかった。そして帽子の下には金の髪と、きらりと光る悪戯な金の瞳があった。にやりと微笑むと、それはとても可愛らしい。小生意気さはあったけれど、その年の子よりも純粹さを感じた。しかしそれが偽りであることを、薫は知っている。彼はとても狡賢くて、腹黒くて、憎たらしい。

名無しは自分のことを語らない。薫は幽霊だと信じているが、それも定かではなかった。だが名無しは薫にしか見えない。美緒も、真緒も、彼のことを見ることはできなかった。他の人間がどうかは分からないが、おそらく見えないのだろう。名無しも初めて会ったとき、いかにも驚いた調子で言っていた。僕が見えるのかい、と。

「やあ、薫」

一年ぶりに会った彼の姿は、記憶にあるものと全く同じだった。彼が幽霊だということを理解はしていても、驚かざるを得ない。この年頃の少年は、一年で大きく姿を変えるものだ。でも、名無しは変わらない。出会ってもう五年になるというのに、その当時から彼の姿は変わっていない。

「変わらないな」

正直に薫は言った。その言葉に、名無しは乾いた笑い声を上げる。

「何を今さら言っているんだい？ 久しぶりだから、僕のこと忘れちゃったかな？」

「忘れるかよ。嫌でも忘れられないさ」

「むっ、失礼な物言いだな。忘れたいのかい？」

「……まあ、少し」

「ははっ、やっぱり薫は正直だね。まあ、そんなところも嫌いじゃないよ」

名無しが手を差し出した。

「さあ、こっちに来なよ。僕にとって一年なんてあっという間だったけど、君にとっては長い時間だったはずさ。とても、とてもね。積もる話だってあるだろう？ 僕だって君と話ができて寂しかったんだ。さあ、話をしようよ」

名無しの言葉は全てとても嘘臭くて、白々しくて、相手に対する蔑みに満ちている。けれどそれを感じさせない笑顔と声があった。本当に変わらないなと思うながら、薫は名無しに近づく。

そこは森の中の広場だ。そこだけ木は退いて、くるぶしまでの草が地面を埋めている。見つけてはいけない宝物を見つけてしまったような、思わず息を潜めたくなるような、そんな神聖さを感じさせる場所だった。それは名無しがここにいるからかもしれない。名無し

の持つ気配は、明らかに生きているもののそれとは違っていた。いつ消えてもおかしくない儚さがあった。

そんな名無しはにこりと笑って、指を振る。指先からは魔法のように輝く塵が散らばって、足下に降り注いだ。

「お話には椅子とテーブルと、あと紅茶が必要だね。秘密の庭で開かれる秘密のお茶会だ。参加者は僕と薫。美緒ちゃんがいなのは残念だね。さぞかわいくなっただろうに。風邪とはタイミングが悪い」

薫は一言も美緒が風邪だなんて明かしていないが、そんな秘密なんて名無しにしてみれば開けっ放しの宝物庫も同然だった。ため息をつく。

「心を読むのはよしてくれ」

「ノンノン。前も説明したはずだよ、薫。読むんじゃない。見るんだよ。それは決定的な違いさ」

「知ったこっちゃない」

そんな会話の間に、地面の上にはもうテーブルと椅子が用意されていた。名無しが光る塵で創り上げた、テーブルと椅子だ。名無しの合図ひとつで霧のように消える偽物だが、使用できる点は変わりない。さらにテーブルの上には紅茶の入ったティーポットと、カップが二対、他には砂糖とミルクとレモンも用意されている。これらは口にすることはできるが、味はしない。喉を抜ける感触すらない。薫にはその原理なんて想像できないが、興味もなかった。

なにはともあれ、そこには瞬く間に西洋風に飾られた庭の風景が描かれた。薫と名無しは椅子に座って、背を預けた。

「それで？」

紅茶に砂糖とミルクを入れ、それを金のスプーンでかき混ぜながら、名無しが言った。

「言いたいことがあるなら言いなよ。別に隠さなくたっていいんだよ。それともなんだい？　こんなスポーツキャップをかぶったちびっ子が紅茶を飲むのは分不相応だとも言うのかい？」

凶星だったが、薫は無視した。

「まあ、冗談はさておき」

間を置かず名無しが言葉を繋いだ。ここらへんのリズムはさすがに心得ているな、と薫は感心する。

「明日の話をしよう」

それはまさしく、本題だった。

「それで、薫。約束の日から一年だ。どうするつもりだい？」

薫は目をつむった。すると湧き上がるように様々な思いが瞼の裏に浮かんだ。きっと名無しも同じものを見ているはずだ。そう思うと恥ずかしかったけれど、苛立たしさのほうが勝った。心を見ることができる名無しにとって、質問という行為はさして意味を成さない。意味があるとすれば、それは相手の動揺を見ているだけだ。そして

楽しんでる。

薫は目を開けて、名無しと視線を合わせた。

答えなんてもう、決まっていた。

「誓いを果たすよ。実行する」

すると名無しは待っていましたとばかりに、満面の笑みを見せた。

「意思是固まったんだね。おめでとう。これで君も美緒ちゃんも苦しみから開放されるわけだ。素晴らしい選択だと思うよ」

「心にもないことをありがとう」

「やだなあ、本心だよ。心の底からおめでとう、って思ってるさ」

「それはそれでむかつくけどな」

「ははっ、じゃあどうしろって言うんだよ」

名無しがティーカップをソーサーの上に置いた。

「まあいいや。とにかく事は明日だ。なにか不安要素はあるかい？協力できることなら、助言するよ」

「そうだな……」

薫は口元に手を添えて、考える。

「監視は運良く外すことができた。本当かどうかはわからないけど、小百合さんは冗談は言うけど嘘はつかない。彼女が信じてくれたように、俺も小百合さんを信じようと思う。ただ問題は礫さんだ。彼女はきつと、邪魔になる」

「ああ、九重礫か。彼女なら大丈夫だよ。なんとかなるから。もうすぐね」

「？　どういう意味だ？」

「言葉通りの意味だよ。九重礫は障害にならない、彼女のことは心配しなくていい、って言っているんだ。僕の言葉に今まで間違いがあったかい？」

そう言われて、薫は口を噤んだ。未だ信用はできないけれど、名無しは時折嘘のような真実を告げる。そして彼の言葉通り、それが間違ったことはない。

「じゃあ問題ない。礫さんの邪魔がなければ大丈夫なんだ。……あ、いやもうひとつあったな。美緒の風邪だ。ひどくなったら、家から出られない」

それに対しても、名無しはにかつと笑ってみせた。

「大丈夫。明日にはよくなってるよ。九重礫が上に薬を要請したみたいだ。昼過ぎには届くから、帰ったらそれを飲ませるといい」

薫はため息をついた。

「本当におまえは便利だな。なんでもわかって」

「ははっ、そんないいものでもないよ。君にはわからないだろうけど」

そう言うとな名無しは指をふるってお茶菓子を創った。白磁の皿の上に載ったクッキーだった。それを見て薫は、そういえば美緒が冗談で茶菓子を欲しがっていたな、と思い出した。これを持っていったらきつと驚くに違いない。食べられるけれど食べられないお菓子なんて、自分で言っている馬鹿みたいだ。

そんな薫の心を見た名無しが言う。

「君たちの会話はいつでも楽しそうだね」

「そうか？　どこらへんが？」

「んー」

薫の真似のつもりだろうか、名無しは口元に手を添えて微笑んだ。

「互いに近づこうとして、傷つき合っているところが、かな？」

「……………」

ある意味予想通りとも言える答えに、薫は絶句した。目を細めて、じとーっと名無しを睨みつける。

「……嫌味だな」

「ははっ、ありがとう」

精一杯の敵意を向けてもなお、無垢な笑顔を見せる名無しだった。薫はため息するほかない。降参だった。満足そうにクッキーを頬張る名無しが、余計恨めしい。

「まあそれはそうとして、美緒ちゃんが風邪で苦しんでるなら、もう帰ったほうがいいんじゃないのかい？ 用事も済んだだろう？」

ふと思い出したように、冷静な口調で名無しが言う。薫は不服だったが肯いた。

「それもそうだな」

でも。

薫はそう思って、あたりを見回した。懐かしい景色だった。そして懐かしい匂いがした。そよ風さえも懐かしい。薫はまだこの場にとかった。ここを離れたら、再び現実に戻ってしまう。

「名無し？」

「なんだい？」

「美緒は礫さんに頼んであるんだ。だから、少し休んでいてもいいかな。久しぶりにここで横になって、少しの間でいいから、色々なことを忘れたい。忘れて、休みたい」

忘れられるものじゃないことはわかっていた。けれどそれでも告げた正直な薫の思いに、名無しは微笑んだ。

「もちろん。僕に許可なんていらないよ。休みたければ休んでいい。心配なら僕が起こしてあげてもいいよ。僕はここで紅茶を飲んでるから」

そう言ってクッキーをかじる。

「ありがとう」

素直に甘えて、薫は立ち上がると、近くに寝転んだ。昔いつもそうしていたように、仰向けになって空を仰ぐ。それほど広くない空が地だったが、寝転んでも視界に木は入らない。ただ春の空の青さが薫の瞳に映りこんだ。それは旧校舎の窓から見た空に少しだけ似ていたけれど、やはりどこかが違っていた。どこだろう、と薫は思った。そうして目をつむった。

眠りは気の知れた恋人のように、気付けば隣にいた。言葉はなかったけれど、それでも落ち着くことができた。互いに寄り添い合って目をつむれば、眠りがゆっくりと自分の体とひとつになるのを薫は感じた。眠りに落ちるその一瞬が、とてもとても長い時間のようにだった。その一瞬に思い出は凝縮され、やがて幕が落ちた。

夢は見なかった。

しかし、すぐそこに悪夢が迫っていた。

＊

毎朝目を覚ます度に、雫の落ちる音を薫は聞いた。胸の奥、暗い床に置かれたガラスのコップの中に、どこから零れてくるのか、透明な液体が一粒、ぽつりと滴り落ちてくる。一日一日と日々が過ぎゆ

くたびに、ぽつり、ぽつり、ぽつり……。その一粒には、確かな痛みがあった。そしてコップが埋まっていくほどに、その痛みは重く鈍く薫を苦しめた。あの日から二年が経とうとしていて、コップを占める痛みはもう溢れんばかりだった。

なんでこんなことになってしまったのだろう、なんて自問はしない。それは明らかに薫のせいだ。だから薫は贖罪が如く、ただただ痛みを積み重ねていく。ぽつり、ぽつり、ぽつり、ぽつりと。

薫はゆっくりと目を開けた。眠りは浅かった。隣に美緒がいない違和感が、薫の眠りを妨げた。狂っているとは思うけれど、どうしようもない。薫と美緒はあらゆる意味で互いを求めているのだから。気持ちを切り替えて、さあ起きようと、上半身を起こす。

しかしそこで薫は、もうひとつの違和感に気づいた。視線の先に、なにかが立っていた。

それは人の影のようだった。縦長で黒く、ゆらゆらと揺れている。輪郭は霞んで、うまく焦点を合わせることができなかった。そんな影が、広場の隅に立ち尽くしていた。目どころか頭さえなかったが、それでも薫をじっと見つめているように思えた。意思のない視線で、じっと。

薫は目をこすって、再び影を見た。影はまだそこにいて、動かない。なんだろうか、と薫は思った。名無しの悪戯だろうか。それにしてもくだらない悪戯だ。なにをするでもなくそこに佇むだけで、害も益もない。

少し考えて、幽霊かもしれない、と薫は思い直した。名無しが見える薫であるから、他の幽霊が見えてもおかしなことではない。人の

形を失ってなお現世にとどまろうとする、いわば幽霊の成り損ないのような、そんな存在だと考えた。

薫は幽霊から目を離さずに、ゆっくりと立ち上がる。そして名無しの名を呼んだ。返事はなかった。名無しはどこかに消えてしまっていた。西洋風の家具やお茶菓子といったものも消えている。昔からよくあることだ。いつもいてほしい時に彼はいない。わざとじゃないかと思うほどだ。

幽霊と見つめ合っていると、やがて寒気を感じた。うまく言い表せないが、なんだかよくないものの匂いがした。体は寒いのに、首筋に汗を感じた。逃げたほうがいい、と本能が告げていた。そして同時に、昨夜の礫の話が脳裏をよぎった。

『今日、度々外から妙な気配を感じた』

『意思が感じられなかった。盗みに入りたい、殺してやりたい、そういうった意思が』

『どこから見られていたのかもわからなかった。見られていたかどうかすら定かではない。ただそこに、気配があった』

どうしても目を離すことができずに、そのまま薫は後ずさった。すると幽霊が大きく揺れた。薫はついに幽霊に背を向けた。そして全速力で駆け出した。

背後から音が聞こえた。それは笑い声のようだった。

幽霊が瞬時に形を変え、空を覆い隠すほどに広がった。太陽の光が遮られ、影が薫の体に覆い被さった。そして背筋を襲う圧倒的な恐

怖！ 息が止まった。でも足を止めるわけにはいかなかった。それは死に物狂いに近かった。

薫が森の中に逃げ込むというその刹那、幽霊は嘲笑うかのように薫の前に瞬間移動した。大きさは初めのサイズに戻っていたが、そんなことは関係ない。

ただ、怖かった。

頭が、手足が、胸の奥が、氷のように冷えていく。

急激に薫は右に方向転換した。しかし幽霊から伸びた黒い蔓のようなものが足首に絡みついて、薫は転んでしまった。やばいと思って、叫びたくて、でも叫べなくて、ただ真っ白な頭で、薫は真っ黒な幽霊を見上げた。

「薫！」

背後から声がしたかと思うと、まばゆい光があたりを覆い隠した。薫は目をつむって、パニックになりそうな頭をなんとか抑えつけた。こういうときこそ冷静でなくてはならない。薫は痛みと共にその教訓を得ていた。そう、今の声は名無しの声だ。光が止んで、薫は目を開けた。

「なにぼさっとしてるのさ！ 早く立つんだよ！」

また背後から名無しの声が聞こえた。見れば目の前に幽霊はもういなかった。当然足に絡まる蔓もない。それを知った薫は勢いよく立ち上がった。そしてあたりを忙しく見渡す。影の姿はない。ただやはり背後には名無しがいた。薫よりも小さいくせに、その瞬間だ

けはとても頼もしく見えた。

「名無し！ おまえ——」

「話は後だよ。でもまあとにかく、間に合ってよかった。危ないところだったね。今もだけどさ」

「危ないって、なにがどうなってるんだよ！ わけがわからない」

「だろうね。でも説明してあげる余裕もないんだ。まだ襲撃は終わってない」

またどこからか音が聞こえた。笑い声のような、不気味な音だ。そして音もなく地の底から幽霊が浮かび上がる。草原の中心、まるで十字架みたいに幽霊は腕を広げて、耳障りな音がどんどん大きくなって、それはやがて幾重にも重なり合った呪詛のように聞こえた。

幽霊が再び姿を変える。霧のようだった体に、肉がついていく。冷静に考えれば、変貌の途中で叩くのが一番堅実な攻撃なのだろう。だが薫は恐怖に慄いて、動けなかった。ただその変貌を見つめていた。

そうしてやがてそれは、人の形をとった。骨が浮き上がるほどに細い体の男性だった。全身が黒く、目と耳があるべきところは若干くぼんで、鼻と口だけが割とまともだった。腕も脚も気味が悪いほどに長く、指も小枝のように細いくせしてとても長い。遠目に見るだけで鳥肌が立った。もちろんそれは気持ち悪さだけでなく、十二分に恐怖もあった。

「厄介なものに目をつけられたものだね、薫」

やれやれといった口調で名無しが言う。

「知らないよ。なにかをした覚えもない」

「まあまあ、そんなむきにならないで。光に虫が誘われるのと同じことだよ。仕方が無いことさ」

「仕方がないで済む話なのか」

「はははっ、ちょっと笑えないかもね」

「笑ってるじゃないか！ てか、あれはなんなんだよ」

「ああ、あれ？」

名無しは薫の方を見て、笑顔で言った。

「死に神だよ」

「……死に神？」

薫は聞き返した。

「そう。多分そういう解釈でいいと思うよ。君の魂を吸って、肉と骨を食って、君に成り代わる。ね、笑えないでしょ？」

薫は絶句した。嘘だと思ったかったけれど、名無しはこういう嘘はつかない。

「さあ、来るよ、薫。僕が囧になるから、君は一目散で逃げるんだよ。いいね？」

薫は肯定も否定もできなかった。ただ改めて死に神を見た。

死に神は口を開けて、薫と名無しの様子を窺っていた。呼吸をしているのか、体を小さく上下に動かしている他は動こうとしない。このままずっと動かないのではないかとも思えたが、そんなはずはない。死に神がゆっくりと右手を振り上げた。そしてその手を、振る――

「――逃げろ！」

名無しの合図で、薫はその場から離れた。ただ視界の端で、死に神の手が自分めがけて伸びてきているのが見えた。避ける術はない。薫は名無しを信じた。

「甘いよ死に神くん！」

名無しの声がした。そして次の瞬間、彼の手から光がほとばしった。光は壁のように形を変えようと、向かってきた死に神の拳と衝突した。白と黒が凄まじい音とともに弾けて、あたりに飛び散る。薫は慌てて足を止めた。広場の中心で、死に神が悲鳴を上げていた。金切り声と表現してもいい。聞いているだけで気が狂うようだった。薫は思わず耳を塞いだ。そうして見た。

死に神が右手を引き戻すと、瞬く間にその手が再生された。あたりから黒い霧が集積したようにも見えた。不死身なのか！ 薫はさなる絶望に顔を歪めた。こんな相手に対して、どう対処すればいいのか。

「なに絶望してるのさ！ 早く森の中に逃げ込むんだよ、ばか！」

名無しの叱咤が飛んできて、慌てて薫は再び走りだした。そして今度こそ森の中に逃げ込んだ。足場は悪かったが、それでも全速力で駆け続ける。恐怖が背を駆り立てて、何かを考える余裕もなかった。しばらくは疲れなんて感じなかったし、むしろ高揚感にも似た感覚が、全身を支配していた。

だが唐突に薫は立ち止まった。荒い息を整えていると、少しずつ普段の自分が還ってくる。はたして、俺はなにをしているんだろう。薫はそう思った。答えは明らかだった。逃亡だ。薫は、逃げていた。強大な敵を、自分より小さな名無しに預けて、ただただ必死で逃げていた。

「……馬鹿か、俺は」

薫は呟いた。逡巡するかのように片手で頭を抱えたが、すぐに振り払い、背後を向く。視線は厳しかった。強い覚悟をその眼に込めて、薫は来た道に戻り始める。最初の数歩こそ歩きだったものの、それは早足に変わって、その後駆け足となった。

本当に、自分はなにをしているのか。

同じ過ちをまた繰り返すのか。

冗談じゃない。

冗談じゃない！

恐怖なんてないと言えは嘘になったが、そんなことより早く戻りたいという焦りのほうが強かった。早く！ 早く戻らなくては！

——そうして開けた視界の先にいたのは、死に神に首を締められる名無しで。

「名無し！！！」

気づけば薫は叫んで、そして死に神目がけて全速力で駆けていた。

武術なんてものは、頭で考えて動くものじゃない。何千、何万、何億と同じ型を繰り返して、そしてその動きを体に叩き込む。脊髄反射で肉体が反応できるように。そして薫は実際にそんな経験を積んできた。だから、頭で考えなくても、勝手に体は動いた。

薫の蹴りが死に神の二本の腕を切り裂いた。そしてほぼ同時に、死に神の頭を打ち砕く。

すると死に神の体が霧状に変化して、名無しが解放された。その場に崩れ落ちる彼を、薫は抱き上げる。

「おい、名無し！」

名無しは激しく咳き込んだ。そしていつもの彼からは考えられないような、弱々しい笑みを見せた。

「駄目だよ、薫。戻ってきちゃ」

「だって」

「だってもへちまもないんだよ。薫じゃ、どうしようもないんだから」

「そんなことは――」

――その瞬間、ドンッ！ という衝撃が薫の体を突き抜けた。なにをされたのか理解する間もなく、薫と名無しの体は宙を舞って、広場の端まで飛んでいった。地面に叩きつけられ、ごろごろと転がって、そして湧き上がる絶望的な痛み。薫の左腕は、粉々に砕けていた。おそらく肋骨も折れている。左の肺も破裂しているかもしれない。本当に、信じられないほどの衝撃だったのだ。具体的に言えば、左腕の骨が肉を突き破って外にはみ出すほどである。死に神からしてみれば軽く払っただけかもしれない。しかしそれだけで薫は瀕死だった。

今まで経験したことのない痛み、薫の意識は明滅した。草の上を転がって、言葉にならぬ声で呻いた。血と酸素がどこからともなく抜けていく。このまま死んでしまうのではないかと思った。そしてそれはおそらく的を射ていた。死に神はまだすぐそこにいるのだ。

名無しの様子を確認したかったけれど、涙が溢れて、視界が霞んで、それどころではなかった。ただ近くに名無しが横になっているのはわかった。とにかく早く起き上がらなくてはならない。死に神が自分たちにとどめを刺す前に。

「……薫、生きてるかい？」

名無しの声だった。先程よりもさらに弱々しい声だったが、彼は生きていた。

「どうやら生きてるみたいだね。それは最悪だ。互いにパツと死んじゃえたら、すごく楽だったのにね」

薫は答えられない。ただ歯ぎしりをして、痛みに耐えている。実際名無しの言葉に耳を傾ける余裕もなかった。ただただ痛みが薫を支配していた。

名無しのため息。

「これだから逃げろと言ったのさ。薫じゃ、どうしようもない。さすが死に神だね。死を司る神とはよく言ったもんだ」

やがて痛みが少しずつ薄れてゆき、体が冷えていくのを薫は感じた。頭も冴えていく。とても周りが静かに感じた。まるで雪の中に埋れているようだった。そんな中で、名無しの声がとても綺麗に聞こえた。

「……ねえ、薫。ひとつ質問してもいいかな？」

馬鹿馬鹿しいといった調子で、彼は尋ねた。

「薫はさ、生きたい？」

名無しの質問で、不意にさつと現実感が湧いた。静けさと寒気がひどくなった。この瞬間まであまり意識しなかったが、薫は今、まさに生と死の間に立っている。むしろ死の淵で蜘蛛の糸にぶら下がっているとも言える。このままだと、薫は死ぬのだ。愛上小百合との

ギャンブルなんて比にならないほど、死は確実なものとしてすぐ傍に立っていた。もうすでに冗談では済まされない領域に薫はいるのだ。

死ぬ、と薫は思った。自分が死ぬ。そもそも人は死の旅を続ける流浪人だ。八十年足らずの人生で数えきれぬ人間と擦れ違うけれども、隣を歩いてくれる者は少ない。やがて人は独りであがりを迎える。サイコロの出目が偏れば、早くあがることもある。そのマスの指示であがることもある。いつあがりを迎えるかは、本人すら知らぬことだ。でも、やがて人は死ぬ。それは唯一無二の真実だ。

薫は今まで十五の歳を歩んできた。そのペースは皆とあまり変わらぬものだったと思っている。ただ、そのルートは少し意地悪で、複雑で、知らぬ間に薫自身もそんな迷路の中に迷い込んでいた。正確な道はもう踏み外している。隣には不安げな美緒がいて、多分、ここで薫が先にあがったら、美緒は独り迷路の中でうずくまり、淋しさに泣きじゃくるのだろう。助けて薫と、嘘つきと、美緒は泣き叫ぶのだろう。

薫は、美緒を置いて死ぬわけにはいかなかった。

薫は、彼女のために生きているのだから。

「……死ねない」

かすれた声で、呟く。

「絶対に、死ねない」

「そう」

やれやれ、と名無しはまたため息をついた。

「でもさ、ここで死ねば楽になるよ。後のことなんて関係ないんだ。全てから開放される。それでも君は――」

「何回も、聞くなよ」

小さく汚い声ながらも、薫は叫んだ。強く強く、自分に言い聞かせるために、叫んだ。

「俺は、美緒を守るんだ」

薫は残った右腕に力を入れる。赤く染まった草を掴んで、叫び声を上げて、立ち上がる。痛みで左腕が引きちぎれてしまいそうだった。いや、引きちぎれそうだから左腕が痛いのか。もう、わけがわからなかった。とにかく、薫は死ねなかった。薫には、美緒がいた。

気付けば死に神はすぐ傍に立っていた。二メートルほどある高い身長で、薫を見下している。大きく開けた口から漏れているのは呪詛のような呻き声で、餌を前に喜んでいるのかもしれない。薫は霞む視界の中、そんな死に神を強く睨みつけた。負けるわけにはいかなかった。死に神なんかに、絶対に負けられなかった。

「いい覚悟だ、薫。じゃあ、君にいいものをあげよう」

名無しは仰向けで、薫を見上げていた。その顔には笑顔があった。彼の右腕が上がって、指が鳴らされる。

すると薫と死に神の間に光が生まれた。温かい光だった。白や黄色

というよりも、銀色に近い。きらきらと光の粒ひとつひとつが煌めいていた。夜空にきらめく無数の星を掬い上げたようにも見えた。

「これは……？」

「いいから、黙って見てて」

光の塵はやがて凝集を始めた。息を止めて、薫はその様子を見つめていた。光は内から外に広がるように形を成し、やがて真実の姿を晒した。――それは、光る剣だった。柄尻を上、黙して宙に浮いている。まるで月のような。無限の夜に一筋の希望を映し出す、月のような剣。その剣の輝きに、死に神が戦慄するのがわかった。薫すらも戦慄を感じていた。それはあまりにも神々しかった。

誇らしげに名無しは告げる。

「その剣は、僕たちが助かる最後の可能性さ。でも、難点がある。ひとつは、僕は使えないってこと。そしてもうひとつは、多分、とても残酷で哀しいことだ。――ねえ、薫。君は、世界の端っこで生きることができるかい？」

意味はわからなかったけれども、薫は即答した。

「それが、約束のためなら」

「そう。じゃあ、あとは君に託すよ。使い方は、わかるだろう？」

薫はこくりと肯いて、手を伸ばした。剣に呼ばれているような気分だった。死に神は必死に阻止しようとしたけれど、剣が発する光の塵に触れると、そこが音を上げて蒸発した。悲鳴が上がる。だがそ

の声から、先程のような悪寒は感じない。剣に手を近づけるほどに、鼓動が早くなるのがわかった。細く長い剣だ。それは十字架のように見えて、薫は生を祈り、勝利を誓った。

薫の指が剣に触れる。それはとても熱い。まるで生きているみたいだった。いや、その剣は確かに生きていた。鼓動があつて、その鼓動は薫と同じリズムを刻んでいた。薫が柄を掴むと、二つの鼓動は確かに一つになった。

銀の光がほとばしり、死に神が泣き叫ぶ。言葉にならない声で、痛みを訴えるように。恐怖に震えるように。

両手で握った剣は重さがなくて、羽のようだった。振り上げると、慈悲を求めるように死に神が両手を掲げた。呪いの雄叫びは光の勢いにかき消されて、最早命乞いにしか聞こえなかった。

薫は美緒を思い、強く強く柄を握りしめた。

そして、死に神を切り裂いた。

#05 リバーサイド

気付けば薫は横になっていた。そしてまず驚いたのは、左腕が元通りになっていたことだった。夢を見ていたのだろうかとも思ったが、にわかに信じがたく、薫は仰向けの姿勢で左手を宵の空に透かした。掌はもちろん、その腕にも傷はない。血も、はみ出した骨や肉もないし、痛みもない。薫は呆然として、しばらくそのまま左腕を掲げていた。そしてようやく呟いた。

「なおってる」

その声に、返事はない。がぼっと上半身を起こして周りを見たが、夕日があたりを真っ赤に染めるばかりで、どこにも名無しの姿はなかった。彼の名前を読んでも、夕暮れ空に吸い込まれて、空しさだけが残響した。

薫はため息をついた。考えようとして、やめた。先ほどあったそのすべてを放棄することに決めた。約束の日を明日に控えて、これ以上面倒事に巻き込まれるのは遠慮したかった。夢にしてはあまりにも凄惨で鮮明なあのできごとを、夢として片付けた。あれは、夢であるべきなのだ。

帰ろう、と薫は思った。空にはすでに一番星が輝いていた。明らかに薫は眠り過ぎていた。美緒はきつとカンカンに怒っているだろう。精神的に不安定になっているかもしれない。礫がきちんと薬を飲ませてくれていればいいが……。

薫は傷のない左腕を使って、立ち上がった。

＊

家路を急ぐ薫だったが、夜の森は視界が悪く、抜け出るのに長い時間を使ってしまった。二年前までは週に何回も訪れていた遊び場で、目をつむっていても歩き回れたのに、記憶は驚くほどに薄れていた。これも時のなせる技なのだとしたら、時間というものはあまりにも残酷だと思った。

そうして家に着いたときにはもう空は煌星に彩られていた。本当にやばいと焦りながら門に近づいて、ふと気づいたことがあった。家の電気が全部消えている。それはありえないことだ。礫と美緒の二人で出かけているのだろうか。いや、そんなはずは……。

薫は鍵を開けて、家に入った。やはり玄関は暗く、なにも見えない。嫌な予感がした。ばくばくと激しく脈動する心臓を抑えつけて、電気をつける。

するとオレンジ色の電灯に照らされて、廊下にしゃがみ込む美緒が見えた。膝小僧に顔を押し付けて、パジャマ姿でぶるぶると震えている。「美緒！」と叫んで、薫は美緒に駆け寄った。震える肩を掴む。美緒がゆっくりと顔を上げた。

「……かおる？」

青ざめた顔には涙の跡が張り付いていた。薫は強い胸の痛みを覚えた。なんでこんな状況になっているのか。知りたいけれど、知りたくなかった。言葉が出なかった。

美緒の顔が崩れて、ぽろぽろと溢れる涙があった。大きな声で泣き出す。母親に縋りつく子供のように、両手が伸びて、薫の首に回っ

た。ぎゅうと力強く抱きしめてくる。そこから伝わる淋しさと痛み
に、薫も美緒を強く抱きしめるほかなかった。

やっこのことで、薫は聞いた。

「どうしたんだ、美緒。礫さんは、どうした？」

美緒はぶんぶんと首を振った。

「礫、いなくなっちゃった……。薫も、いなくて……。私、ひとり
ぼっちだった……」

「礫さんが、いない？」

美緒は鼻をすすりながら肯く。

「起きたら、ひとりで。少し待ったんだけど、誰も来てくれなくて。
探しに行ったのに、どこにもいなくて。いたずらしてるんだって思
って、ふたりの名前読んだのに、返事がなくて……。なんでひとり
にしたの？　ひとりには、嫌だよ。真緒、真緒、真緒お……」

片割れの少女の名前をなんども呼びながら、美緒は泣き続けた。二
年もの歳月が経っているというのに、未だに美緒の心には真緒があ
る。真緒を求める美緒の腕の力はとても強い。しかしそれも次第に
弱くなり、やがて鳴き声もやんだ。泣き疲れて眠ってしまったよう
だ。ただそれにしては息が荒かった。額に手を当てればとても熱い。
風邪を引いているのに冷たい廊下でずっと泣いていたために、朝に
比べて熱が上がっているようだった。

薫は美緒を抱きかかえて階段をのぼり、彼女を寢室のベッドに寝か

した。洗面器の水を交換して、改めて冷たいタオルを美緒の額に当ててやる。寝息はやはり荒い。咳は出ないようだが、若干寒気を感じているらしく、布団の中で身を縮めている。薫はしばらくそこでじっとしていたが、やがて立ち上がると、部屋の電気を消し、廊下に出た。扉を閉め、静かな夜に紛れる。

薫はできるだけ物音を立てずに、さらに緊張した面持ちで、家中を点検した。あらゆる扉を開け、中を調べ、そして普段と変化がないことを確認すると、閉めた。一時間ほどかけて調べ終えた結果、いつもと変わらない我が家だということがわかった。どこにも血痕や死体なんてものはなかったし、なにかを隠蔽した後もなかった。ただこの家から九重礫という一人の女だけが忽然と姿を消していた。

薫はほっと胸を撫で下ろした。礫が誰かにやられた、という可能性はこれでほぼ消えた。この家のボディガードである礫は、まず家から出ることはない。だから家の中に戦いの痕跡がない以上、礫は誰とも争っていないことになる。そもそも争うくらいなら援護を要請し、自分は美緒と共に逃亡するはずだ。昨夜の礫の言葉や死に神の夢が頭にあつたため、最悪の展開を考えていた薫は、安堵に包まれた。

しかし疑問は残った。美緒第一主義である礫が、なぜ美緒を放置して消えてしまったのか。そしてどこへ消えてしまったのか。

薫はため息をついて、名無しの言葉を追想した。

『ああ、九重礫か。彼女なら大丈夫だよ』

『九重礫は障害にならない、彼女のことは心配しなくていい、って言っているんだ』

名無しの差し金か、と薫は思った。例の魔術じみた技を用いれば、人間ひとりの行方を眩ませるなんて容易なことなのかもしれない。

薫は礫の派遣元である上乃木家に連絡するべきか逡巡した。ボディガードがいない家に美緒をひとりで置いていたというのは由々しき事態だし、このタイミングでいなくなるというのも非常に不吉な出来事であった。ただ、連絡はしなかった。礫の不在は、薫にとって神が与えた千載一遇のチャンスだったからだ。明日の予定に、礫の不在は絶対の必要条件なのだ。労せずして条件が整ったというのに、上乃木家に連絡して新たなボディガードが派遣されては意味が無い。

心配する気持ちも多分にあったが、もっと大切な事がある。だから礫のことは一度忘れることにして、薫は台所に行くと美緒のためのおかゆ作りにとりかかった。薬を飲ませるためにも、体力を取り戻させるためにも、食事は必要不可欠だ。今日の夕食は俺もおかゆでいいや、と薫は思った。

その時ちらりと時計が目について、あと五時間ほどで今日が終わることを知った。薫はおかゆ作りに集中することで、余計なことを考えないように努めた。時計の針の音がカウントダウンに聞こえて、薫は鼻歌をうたってごまかした。

おかゆと白湯と薬を盆に載せて持って行くと、ちょうど美緒が目覚めたところだった。薄闇の中、薫が盆を持っているのを見ると、「……手、握っててくれなかったんだ」と、残念そうに呟いた。

「ごめん、でもなにか作らなくちゃいけなかったから」

「わかってる。ごめんね、わがまま言って。……なんだか頭がぼー

っとして、うまく考えられないの」

「熱があるんだ。当たり前だよ」

薫はベッドに腰掛けると、自分の膝の上にお盆を置いた。傍にあるライトスタンドのスイッチをいれる。淡い光が闇を丸く切り取った。

「少しでいいから、食べれる？」

美緒は小さく肯いた。

薫は彼女の体を少し起こして、壁に寄りかからせた。クッションと枕で座り心地をよくしてやる。

「ありがとう」

美緒が微笑んだ。薫も微笑んだ。「気にしないでいいよ」。美緒は肯いた。

れんげで少しずつ掬って、薫はおかゆを美緒の小さな口に運んだ。ただ軽く塩をまぶしただけの、味も素っ気もないおかゆだったが、美緒は文句も言わず食した。時折白湯を飲んで、辛そうに息をつくこともあったが、その度に彼女は微笑んでみせた。薫はその都度彼女の心遣いを感じて、胸が痛んだ。

最後の一口を食べ、薬も飲み終わると、美緒は深く息をついて体から力を抜いた。薫は再び美緒を寝かせてやろうとしたが、美緒が最後にもう一口白湯を飲みたいというので、飲ませてやった。すると美緒は満足した表情を浮かべ、自分で横になった。

「……ありがと、薫」

右半身をベッドに沈め、顔を薫の方に向けて、美緒は言った。

「ねえ、お願いがあるの」

「なに？」

薫は優しく尋ねる。

「十一時半になったら、一度起こして。誕生日になる瞬間は、やっぱり起きていたいから」

薫は肯いた。

「いいよ」

最後にもう一度「ありがと」と言っ、美緒は目を閉じた。スタンドライトのスイッチを切ると、二分も経たずに寝息が聞こえてきた。静かで暗いその部屋の中はまるで宇宙のようで、薫と美緒は広い宇宙にふたりぼっちだった。

十一時半までなにをしようかと思ったが、最終的に薫はその場を動かなかった。幾分落ち着いた美緒の寝息を聞きながら、遠くで聞こえる鳴き声の正体を探っていた。鳥だろうか、虫だろうか。あまりに遠い音色でうまく判断できなかったが、確かに鳴き声が聞こえていた。春の夜に、そっと囁くように鳴く生き物——それは少しだけ淋しくなる音色で泣き続けていた。

るるる、るるるるる。くるるるる。

不思議と薫は泣いてしまいそうだった。だからできるだけ息を止めて、じっとしていた。ずっと昔の、懐かしい匂いに思いを馳せていた。そこには美緒がいて、真緒がいて、薫がいた。家族の温もりと、笑顔と、優しい魔法があった。

ハッピーバースデー。

誰かが言った。

ハッピーバースデー。

みんな笑顔だった。

みんなが笑って手を叩いていた。

ケーキの甘い匂いかと思ったそれは、胸の中の少女の髪の毛の匂いだった。薫は少女を抱いて、横になっていた。雪が降っていて、雲の向こうでは星たちがいくつもいくつも流れ落ちていった。ふたご座流星群。それはきつと、宇宙の涙だった。

私を見て。

私を、助けて。

「ハッピーバースデー」

薫はそこではっと目を開けた。隣に美緒が座っていて、彼女は薫の手を握っていて、あたりは暗くて、それは昨晚と似たようなシチュエーションだった。だからはじめ薫は昨晚にタイムスリップしたよ

うな心持ちだった。自分が眠ってしまったことだけはわかったが、寝起きということもあって、頭はうまく働かなかった。

「ハッピーバースデーだよ、薫」

美緒が繰り返した。薫はなにがなんだかわからなかったが、とにかく口を開いた。

「……えっと、ハッピー、バースデー？」

すると美緒は満面の笑みを浮かべた。

「ありがとう」

彼女は言った。そして首をかしげた。

「どうして泣いているの？」

「え……？」

薫は自分の目尻を拭った。確かに薫は泣いていた。そしてとても悲しい夢を見ていたような気がした。

そこで薫は思い出した。

「あ、時間っ！」

「二十四時二分。寝坊だよ、薫」

くすりと美緒が笑う。

「ごめん」

「いいよ、少し前に自分で起きたから。でも、あとで罰だよ？　まだ決めてないけど、すっごく辛い。礫と一日恋人ごっこか」

「……それは辛いな」

「えへへー」

やれやれ、と薫は思った。

「……でも、昨日と今日の境目なんて、全然わかんないね。毎年思うけど、なんだか不思議な気持ち。すごく曖昧で、目に見えなくて、そんなものたちを私たちは大切にして生きているんだなあ、って」

熱と眠気のためか、美緒はうつろな目をしていたが、不思議といつよりもよりも饒舌だった。普段の美緒ならこんなこと言わないはずだ。こういうロマンチックな事を口にするのは、いつも決まって真緒の方だった。

薫は美緒の瞳を見つめた。暗い部屋の中で、さらに暗く沈んだ闇がそこにはあった。自分が見られているというよりは、自分を透かしてなにか別のものを見られているような感覚だった。口調はいつもと同じなのにそんな瞳をするものだから、薫はちらりと恐怖を感じた。そして、美緒は今なにを考えているのだろう、と思った。

だがすぐに美緒は目を閉じた。そして薫に寄りかかる。

「あのね、まだ頭がぼーっとするの。薫の手、冷たい？」

「俺の手？　どうかな」

美緒と結んでいないほうの手を見る。確かに布団もかけずに眠っていたことで手足の先は若干冷えているような気がした。

「私のおでこ、触って」

薫は言われたとおりにする。

「あーいい気持ち」

普段より少し高い声で美緒は呟いた。その額はやはりまだ熱い。薬の効き目が出てくるのはもっと後だろう。

「なにか飲む？」

美緒は首を振った。

「このままでいい。もう少し、薫の傍にいたい」

薫の手を掴む美緒の手に、ぎゅっと力がこもった。痛みはなく、むしろ心地良い強さだった。美緒の頭を撫でながら、薫は改めて呟いた。

「ハッピーバースデー、美緒」

意図的に、美緒の名前だけを呼んだ。ここに真緒はいない。いない少女を祝ったところで、それはきっと空しいだけだ。

それでも美緒は言う。

「ハッピーバースデー、真緒」

今日、4月28日をもって、双子は16歳を迎えた。

けれど、片割れの少女の時は、二年前のあの日から止まっている。

「約束だよ、薫」

美緒が言う。

「わかってる」

薫が言う。

今日は、真緒に会いに行く日だった。

＊

1905年、かの有名物理学者アルバート・アインシュタインは、相対性理論を発表した。運動している時計は静止している時計よりもゆっくり時を刻む、というそれだ。よく理解できなかったのだろう、小さな男の子が詳細を質問した際、本人が使用した有名なジョークがある。

『楽しい時間は早く進むけど、嫌な時間は遅く進むだろう？ そう
いうことさ』

なるほど。相対性理論としては正しくないが、比喻としては正しい

と思える。要はなにを基準にするかによって、同じものも違って見えるということだ。まさしくそのとおり、痛む傷を抱えながら生きるというのは、あまりにも長い時間に思える。

二年。

そう、二年だ。

真緒の笑顔を見なくなって、彼女の声を聞かなくなって、ようやく二年が経とうとしている。

薫が今でも真緒の笑顔や声を思い出すことができるのは、隣に美緒がいるからだ。美緒と真緒は双子で、とてもよく似ている。彼女たちは病的なまでに互いに依存していた。特に美緒は、真緒のことを誰よりも大切に思っていた。そんな彼女が二人の前から姿を消して二年。美緒にとってみればきつと、自分の一部をどこかに落としたまま歩いているような、そんな日々だっただろう。なくなった部分にないを当てはめても、真緒の代わりにはならない。唯一薫だけが、少し、形が似ていた。

薫にとっての真緒は、憧れに近かった。美緒が人懐っこく明るい性格なのに対し、真緒はいつも謎めいた静けさを持っていた。薫はその神秘に惹かれた。彼女はなにを感じ、なにを考え、なにを見ているのだろうか。そのすべてが知りたかった。薫には、真緒と共有したいことがたくさんあった。もちろんそれは独り善がりで、真緒にとってみれば迷惑な思いでしかなかっただろう。けれど真緒は優しくかった。彼女は彼女なりに、精一杯の好意を持って薫に接してくれた。薫はそれが嬉しかった。だけど、真緒はいつも一歩後ろに下がって、透明な壁を間に置いて喋っていた。拒絶でも、達観でもなく、それはきつと、諦めに近いものだったように思える。

真緒が薫に唯一近づいてくれたのは、二年と少し前の、雪の日のことだ。その日は真緒と薫のふたりで、ふたご座流星群を見る予定だった。美緒がインフルエンザで寝ていたこともあったが、真緒は薫と二人だけで見ることを望んでいるようだった。薫にはそれが不思議でならなかったが、尋ねるのはやめた。きっと彼女は答えてくれない。薫にはそれがわかっていた。

天気予報では、夜中には雪もやみ、雲が晴れるという話だった。薫と真緒は夜遅くにそっと家を抜けだすと、懐中電灯を持って二人だけで森に入り、あの広場を目指して歩いた。空は大粒の雪を降らし続け、積もった雪は深く、靴下をぐしょぐしょに濡らしながら、それでも握った手の温もりだけを頼りに二人は歩き続けた。会話もなく、二人ともやまない雪と想像以上の暗闇に、泣き出してしまいうるな気分だった。吐く息の白ささえ失われてしまいうる闇だった。

長い時間をかけて広場にたどり着いた頃には、二人は全身を汗で濡らし、心も体もうへとへとだった。なんとか広場の中心まで歩くと、同時にそこに仰向けになった。雪の冷たさがむしろ心地よくて、降りてくる雪がきれいだった。雪はまだやみそうになかった。流星群は厚い雲の向こうで、見えるわけもなかった。天気予報の嘘つき。なんだかとても淋しい気持ちだった。真緒もとても淋しそうだった。薫は、その時自分が真緒に言った言葉を思い出したくない。恥ずかしいし、なによりすごく悲しくなるから。子供の戯言だった。言葉にするのは容易い。でも力がなかった。ただそれだけだ。薫には、その言葉を実行するだけの力がなかった。

そして約束も、消えてしまった。

全部、薫のせいだ。そんなことは薫自身が一番よくわかっていた。悔やんでも時間は戻らない。同じ時を繰り返すことはできない。最近見た外国映画の中に、『タイムマシン』というものがあった。死んでしまった婚約者のために、主人公がタイムマシンをつくりあげて、彼女を助けようとする話だ。しかし、何度過去に戻ってやり直しても、婚約者は死ぬ。その運命を変えることが、どうしてもできない。薫はそれを見終えたとき、手元にあったコップを壁に叩きつけた。怒りと悲しみの混ざり合った、わけのわからない感情だった。とにかく、あの日から今日で二年の歳月が過ぎた。そしてあの日のように、薫はまた美緒と二人で森の広場に立っている。朝起きてすぐ、真緒に会いに行く前に一緒に行きたいところがあると、美緒を誘ったのだった。

目的は単純なものだ。

薫は今日、この場で、美緒を殺すつもりだった。

これが一年前に自らに誓い、昨日名無しと確認した約束だった。この約束を果たすことだけを考えて、薫はこの一年を生きてきた。自分にはもう、それしかなかった。誰の手でもなく、自らの手で、美緒をこの腐った世界からあがらせる。もちろんひとりでは言わない。薫も一緒だ。そのために、昨日あの場で死ぬわけにはいかなかった。

今、薫のズボンのポケットにはナイフが入っている。短い刃渡りの

薄いナイフだが、華奢な美緒を殺すには十分すぎる獲物だった。これを美緒に突き立てる。喉でも、心臓でも、どこでもいい。とにかく痛みがないように殺す必要があった。あいにく薫はその術を心得ている。このときばかりは薫も武術を教えてくれた父親に感謝した。

「ねえ」

美緒が言う。

「なんでここに連れてきたの？」

彼女の風邪は、すでにだいぶよくなっていた。咳が少し残ったが、さほどではない。葉のおかげだろう。礫には色々と感謝しなくてはならなかった。礫がいなくなっていたからこそ、こうしてなんの問題もなくここにいられるのである。それを言うなら礫を消した名無しにも感謝すべきかもしれない。

名無しの姿はなかった。昨日のあのできごとが関係しているのかとも思ったが、あれは夢だと振り払う。あれだけ楽しみにしていた名無しだから、もしかしたらどこかからそっと見ている可能性もあった。名無しはそういう奴だ。非常にタチが悪い。美緒を殺したあと、自殺の段階になってから姿を見せるのかもしれない。その可能性が一番高い気がした。

薫はふうとため息をつき、深呼吸をする。森の空気が心地よい。そよ風に草木がさやさやと春を囁いて、まだ東にある太陽が、燦々と緑を照らした。

「美緒」

薫は言う。

「ごめん」

美緒はきょとんと目を丸くして、首をかしげた。いつもと雰囲気の違い薫に、訝しげな表情を向ける。

「ごめんって、なに？」

「とぼけるなよ」

小声ながらきつい口調で告げると、美緒はしゅんとして俯いた。「謝られても、困るよ」と彼女は言った。

「確かに、そうだな。ごめん」

「……また謝った」

「あ、いや、これは謝ったことに対するごめんであって」

「ふふっ、なに言ってるの？ 変なの」

くすくすと笑う美緒だったが、若干それには無理があった。

「大丈夫だよ、薫。もう気にしてないよ」

「……嘘つき」

「あ、ひどーい。嘘つきなのは薫じゃん」

「俺がいつ嘘ついたんだよ」

「いつもじゃん！」

「いつもっていつ？ 何時何分何秒？ 地球が何回まわったとき？」

「もう！ 小学生みたいなこと言うのはやめてよね！」

ぶんぷんとふざけた調子で美緒は怒った。それすら痛々しくて、薫は見えていられなかった。

「ごめん」

「……また謝った」

「ごめん」

「……ばか」

「わかってるよ」

「わかってないよ」

「わかってる、誰よりも」

「違う！」

美緒は叫んだ。美緒ももう、自分の思いを我慢できないようだった。

「違う、違う、違う！ 私はもう、薫のこと恨んでなんかいないよ」

？ 薫のせいだなんて、思っていない。あれは、仕方なかったんだよ」

「そんなことない」

「なんで？　なんで今そんなこというの？　なんでここに連れてきたの？　ひどいよ、薫。私だって、やっと整理できるようになってきたんだよ？　お願いだから、もう、やめてよ」

「ごめん」

美緒は薫に向かって走り寄ると、勢いよくその胸に飛び込んだ。痛みがあつて、でもきつとそれは心の痛みだった。

「ごめんね、薫。ごめんね」

涙を流しながら、美緒は謝りだした。なにを謝っているのだろう、と薫は思った。でも、なぜか薫も泣いた。自然と涙がこぼれた。それが美緒の優しさだとしても、もう恨んでないと、薫のせいじゃないと言ってくれたことが嬉しくてたまらなかった。

泣きじゃくり、咳き込みながら、美緒が言う。

「薫、私ね、ずっとずっと前から、薫に言いたかったことがあるの」

薫は片手でしっかりと美緒を抱きしめながら、もう一方の手をポケットの中に入れた。そこにはひやりとした刃の感触があつた。その柄を、ぎゅっと強く握りしめる。

「いつ言おう、いつ言おうって、ずっと考えてた。ずっとだよ？　多分、薫が考えてるよりも、もっとずっと前から。ずっとずっと、

ずーっと前から考えてた」

ポケットから抜き出したナイフを、薫はそっと掲げた。美緒の背後で、刃が陽の光に煌めいた。それは美しく、人を殺すものには見えなかった。

「本当はね、今日、真緒の前で言おうと思ったの。でもね、今、言うね。だから聞いて、私の気持ち。私のことを信じて。私にずっと優しくしてくれた薫のこと、見てたから」

真緒の言葉の一つひとつが、薫の胸を打った。けれど手は止まらない。いつまでも止まらない涙だけが、やめたと薫に叫んでいた。

さよならだ、美緒。

薫は呟く。声に出さずに。

美緒が言う。

「ねえ、薫？」

薫はその声の先を聞きたいと思う。でも、聞いてしまったらいけない気がした。聞いてしまったら、この手を振り下ろせない気がした。

「私ね、薫のこと――」

――だから薫は、美緒にキスをした。

自分の唇で美緒の唇をふさいで、そして、片手で彼女を力強く抱きしめた。

さよなら。

それは、真緒の最後の言葉。

さよなら。

何度も心の中で呟く。最後の一線をこえるために。

そして、薫は、その手を振り下ろして――

「だめじゃないか、薫」

声があった。名無しの声だった。いつも通り、すつとぼけた声だ。悪気がないように聞こえて、その実悪気に満ち満ちている。最低な、子どもの声。その声が突然背後から聞こえてきた。

次に薫は気づいた。ナイフの先に、肉の感触がないことを。薫の刃は、美緒に突き刺さっていなかった。美緒の体は鉄のように硬く、刃を弾いていた。

薫は慌てて美緒から離れる。彼女は薫とキスをしたその形で固まっていた。目はつむられていて、そこから涙が流れている。だがその涙すら頬の途中で止まっている。風に吹かれた髪も重力に逆らいその場に留まり、そもそも美緒はぴくりと動こうとしなかった。

勢いよく振り返り、薫はキツと名無しを睨みつける。彼はいつもと同じように野球帽をかぶり、いたずらな金の瞳で薫を見つめていた。

「おまえ、なにをした！」

当たり前のように名無しは言う。

「すごいだろ？ 美緒ちゃんを世界から隔離したんだ。今彼女はこの世界の人間からは干渉できない存在だよ。自分自身の意識すらないけれど」

「……なんだよ、それ」

薫は呆氣にとられて、呟く。

名無しはにこりと笑った。

「もうこの世界はユグドラシルの鎖から浮遊し始めてるんだ。だからこんな常識はズレな秘法だって使える」

「ユグドラシル？ なんの話だよ」

「まあ、君に言っただってわからないよ。わかったところでどうしようもない」

嘲笑を浮かべる名無しに、さすがに薫も怒りを我慢できなかった。彼がなにをしたいのか理解できなかった。なぜ自分の邪魔をするのか。薫はこの一年、この瞬間のために生きてきたのだ。それは名無しも知っている。決死の思いで実行したことも知っているはずだ。それをちよつとした悪戯で防がれたとするならば、名無しですら薫

は許さない、と思った。

名無しに歩み寄り、彼の胸ぐらを掴む。薫と名無しではだいたい身長差があるので、名無しは爪先立ちになって少し苦しそうだった。

「子供にこんなことしていいのかい？」

「なにが子供だよ、ふざけんな」

薫は歯ぎしりする。こんな状況でさえ、名無しは薫を見下している。怒り狂う薫を嘲笑っている。

名無しは辛そうにため息をついた。

「やれやれ……。いいのかい、薫？」

「なにが？」

金の三白眼が、薫に向けられる。

「由宇の言葉、忘れたの？」

「……由宇の、言葉？」

なんの話だろうか。また適当なことを言って、煙に巻こうとしているのだろうか。それでも薫は由宇との会話を思い出す。いつの話だろう。多分、最近のはずだ。もしくは記憶に残るような重要な言葉のはずだ。だからこそ名無しは話に出した。

「仕方ないなあ……」

名無しは優しく微笑む。まるで由宇のように。

「美緒ちゃんの手、離しちゃだめじゃないか」

その瞬間、短い悲鳴が聞こえた。驚いて振り向けば、美緒が地面から立ちのぼる光に取り憑かれていた。いつの間に動けるようになったのだろうか。美緒を中心とした地面に地割れのようなひびが入って、彼女はそこから漏れ出した光に襲われていた。美緒の周りが色をなくすほどの凄まじい光で、薫ですら恐怖を覚えた。

「え、な、なんなの？」

美緒の怯えた瞳が薫を捉え――次いで名無しに向けられる。

「薫、その子はだれ？」

背筋の悪寒とともに、薫は心臓がせり上がるのを感じた。

「美緒、おまえ、名無しが見えるのか？」

「ななし？ もちろん、見えるよ。そんなことより、なんでそんなところにいるの？ この光はなに？ 怖いよ、薫」

薫は名無しを振り返る。彼はニヤリと笑っている。殴ってやりたい気持ちだったが、それどころではなかった。薫は名無しを放り投げるようにして、美緒へと駆けた。しかし足下が覚束ない。地面が激しく揺れている。さらに薫が駆け寄ることにより光が激しくなった。光はすでに美緒を包みこむほどで、薫もその光に巻き込まれていた。

「美緒！」

薫は右手を伸ばした。

「薫！」

美緒も叫んで、右手を伸ばす。

地面が壊れる感覚があった。目を開けていられない。口に、耳に、息が止まるほど光が入り込んで、内側から壊れてしまいそうだった。

それでも二人は手を伸ばして――

「助けて、薫！」

「美緒ォ！」

互いの手は届かずに、全てが白に溶けた。

#06 キスアンドクライ

目が覚めてもしばらく、薫は動けなかった。片足を夢という沼に沈めた状態で、自分は今何をしているのか、どこにいるのか、なぜ眠っていたのか、そういったことを考えながら、未だ重く背中の中のしにかかる睡魔を払いのけようと必死でもがいていた。意識をまとめようとしても、まとまりかけたところでばらばらに散らばり、脳裏に広がる景色は白へと終着する。やれやれ、と薫は思った。もうなにも考えたくなかった。でも考えなければならぬ。

自分は先程まで、なにをしていたのか。

力を振り絞り、感覚を研ぎ澄ましてみれば、背中にあるのは冷たい土の感触だった。指を動かすと、爪に濡れた土が入り込む。言いようのない不快感にほだされ、薫はさらに動く気力を失った。しかしなぜだろう、なにか大切なことを忘れている気がする。薫は蚊のとまるような速度で、ゆっくりと体を起こした。目を開けようとする、瞳がチカチカと痛む。白い光が網膜に焼き付いているようだった。

白い光……？

記憶はすぐそこにあるはずなのに、いくら手繰り寄せても紐はするするとまるで手応えがない。なぜこんなにも意識がはっきりとしないのか。まるで違う世界への入り口をむりやり通り抜けてきたみたいな、してはいけないことをしてしまったイメージがある。頭痛と眠気。このまま再び倒れてしまいたかったが、そうもいかない。しかしなぜそうもいかないのか。ぐるぐると思考は巡り、脳裏の白は荒野がごとく果てしなく続いている。

ひとつ、ため息。

「美緒？」

不思議と、声が出た。覚醒と夢中の狭間で恋する相手を呼ぶような、そんな感覚だったのかもしれない。けれどその瞬間の薫には、どうして美緒の名前が出てきたのか、まるで理解できなかった。起き抜けにメガネを探すような思いで、もう一度、美緒の名前を呼ぶ。「美緒？」。その響きは、あまりにもしっくりと頭にはまった。美緒。そうだ、美緒だ。俺は、美緒を、殺そうとして、それで――

はっと全てを思い出して、薫は勢いよく目を開いた。ずきりとひどい痛みがその眼を襲う。まだ視界は現実の光に慣れていない。それでも涙を目尻に浮かべつつ、薫は目を開いた。そしてそこに広がる光景に、目を疑った。

「……え？」

思わず声が出た。風になびいて海のように揺れる下草も、優しく自分たちを包み込む木々の壁も、遠くて近い幻のような空も、そこにはなかった。そもそもそこは、森の中の広場ではなかった。嫌な匂いのする、湿った路地だった。レンガ造りの大きな建物が道に沿って屹立しており、空を見上げれば切り取られた青がとても遠くに感じられた。閉塞感の集積所みたいな場所だ。薫は、こんな場所を知らない。焦燥にも似た絶望感が、ひしひしと背中を伝って、薫を責め立てた。

薫はふらふらと覚束ない足取りで立ち上がると、忙しくあたりに目を配り、名無しの姿を探した。「名無し！」と彼の名前を呼んで

もみた。当然返事はなかった。沈黙が壁に反響して、痛かった。焦りがじわりと汗に変わった。ひどく頭が痛んだ。ここはどこだろう。いや、そんなことより、美緒だ。美緒はどこだ。美緒、美緒、美緒！

薫は焦燥のままに路地を駆けた。考えはなかった。頭にあるのは美緒のことだけだった。まだ定まらない意識に足取りは蛇行の軌跡を刻み、積まれたゴミを蹴飛ばして、猫に威嚇される始末だった。石につまずいて転びそうになって、それだけで少しだけ泣いてしまいそうな自分がいることに、なにより薫自身が驚いていた。

やがて薫の足は重くなり、そこから数秒も経たぬ内に停止した。いまだ路地に迷い込んだまま、前には寂れた風景が続き、後ろを振り向いても同じ景色があった。空は遠く、空気は汚い。つんと鼻にかかる腐敗臭が、ひどく気持ち悪かった。

「……なんだよ、これ」

薫は建物に背中を預けて、額に手をやった。レンガは冷たく、服を介してもそのざらざらとした感触を感じ取ることができた。薫にはそれが今の薫と美緒を隔てる厚壁に思えて仕方なかった。

冷静になってしまえば、美緒が近くにいないことは明らかだった。これが名無しの謀り事だとすれば、ふたりが出会うシナリオなんてありえない。不安に苛む美緒を笑い、焦燥にかられる薫を笑う。他人の絶望を食らう悪魔のような存在——それが名無しだ。昔からそうだったはずなのに、なにを安心していたんだろう、と薫は思った。そして、ふと自らの手を睨みつけた。

この手は、最後の瞬間、美緒に届かなかった。あるときこの手が届いていたならば、美緒の手を離すことがなかったならば、彼女は今

も隣にいたかもしれない。どことも知らない場所に送り込まれた不安に身を縮めつつも、薫の腕にしがみついて、薫がいてくれるから大丈夫と、そう言ってくれたかもしれない。そう思うと悔恨の思いに心が負けてしまいそうだった。でも、負けるわけにはいかない。もしどこからか名無しが自分の姿を見つめているとして、悔しがれば悔しがるほど彼の笑みは深くなるのだから。Ifから始まる考えなんて、馬鹿らしい。薫は現実を見つめる必要があった。

さて、と薫は無理をしてそう呟いた。気持ち切り替えて、まずはここがどこなのか知らねばならない。ひとつひとつステップをきちんと踏むことこそ肝要だ。そうすればいずれ美緒に辿りつけるに違いない。すごろくにあがりがあるように、この状況にもあがりはあるはずだ。そのためには賽を振る手を止めてはいけない。

ただ、薫には正直ここが日本だとは思えなかった。イメージとしては、ヨーロッパに近い。地震の多い日本で、拙いレンガ造りの建築物は三年ともたないだろう。

どうしたものかと薫が壁に手を当て、レンガを指でなぞったその時、不意に足音が聞こえてきた。一瞬警戒したが、薫は恐る恐るその方向に向かうことにした。角をひとつ曲がると四叉路があって、足音はその付近から聞こえるようだった。走っているらしく軽快な足音で、四叉路へ差し掛かる直前のようにも聞こえたし、通り過ぎた直後のようにも聞こえた。

「待て」

簡単な話だけでも、してみたい。それが無理なら、人の存在だけでも確かめたい。そんな思いで薫は四叉路に飛び込んで――

そして人とぶつかった。

「いたっ」

「きゃっ」

薫は咄嗟にふんばったので動じなかったが、左からやってきたその人物は弾き飛ばされて、その場に尻餅をついた。近くに積んであった木箱ごと倒れたので、思ったよりも大きな音があたりに響き渡る。

「大丈夫ですか――」

転んだその人を掴み起こそうと、慌てて手を差し出そうとして、薫は思わず絶句した。ぶつかってきたその女性が着ている服装に、目を奪われた。

「あいたたたた……」

――純白の、ドレス。

薫はその場から動けなかった。差し出した手を空に浮かべて、不躰だとは思いつつも、彼女の容姿を観察した。

彼女はセミショートの黒髪に黒い瞳をして、そこだけ見れば日本人のようにも見えた。しかし肌は透き通るように白く、目鼻立ちがくつきりとしている。そして出で立ちに華があった。端的に言えば、実に美しい。小百合のような破壊的な美しさではないものの、ずっと見ていたくなる魅力があり、人懐っこい猫のような愛嬌もあった。まだ歳は若くて、薫と同じか、一、二歳年上といった印象だ。ただなによりもその衣装が彼女の存在を引き締めて、濃縮して、とても

印象深いものとしていた。

純白のドレスはウェディングドレスのようにも見えた。そもそも薫の知識の中では、純白のドレス、イコール、ウェディングドレスの等式が成り立っている。しかしそれにしては、そのドレスは装飾過多のようにも思えた。宝石の埋め込まれたチョーカーに、金に輝くイヤリング。ドレスそのものにも――スパンコールか何かだろうか――きらめく小さな石がいくつも取り付けられている。ベールは被っていないかったけれど、肘までを覆い隠す白い手袋をつけていた。肩から胸元にかけての露出が大きく、薫はそこから意識的に目を逸らした。

薫が差し出した手に気付いて、彼女はその手と薫の顔を見比べた。あまり気持ちの良いことではなかったけれど、彼女を観察してしまった手前、気にするのも失礼だろう。やがて彼女は薫の手をとった。薫はその手を引いて、彼女を立ち上がらせた。

立ち上がったものなお、訝しげな表情で彼女は薫を見つめていた。なにかを求めているようにも見えたが、それがなにかはいくら考えてもわからない気がしたから、薫はじっと黙っていた。

「……………」

「……………」

沈黙。

なんだこれ、と薫は思った。

その時、再び足音が聞こえてきた。そして「音はあっちから聞こえ

たぞ！」という怒声。その音と声にびくりと体を震わせると、彼女はやばいと呟いた。そしてするりと薫の横を通り過ぎる。その際彼女は薫の肩にぽんと手を置いた。

「ありがとう！」

そして笑みを浮かべる。それは間違えて恋をしてしまいそうなほど、魅力的な笑みだった。どう魅力的だったかといえば、それはもう、小学校時代に好きだった女子の笑顔を思い出せば、それが一番近いのではなからうか。

彼女が角を曲がって見えなくなると、さて、と薫は新たな足音の方に向き直った。どうするべきだろうか。

やがてやってきたのはふたりの男だった。ふたりとも深緑のマントを肩に羽織い、腰には剣を帯びていた。模擬刀や模造刀といった類ではなく、素人目にも一目でわかるような、本物の剣だ。薫は一瞬あの銀色に光る剣を思い出した。死に神を切り裂いた、月のような剣のことだ。それと比べると、彼らの剣はあまりにも無骨で、生々しかった。鼠色の金属製で、柄は使用感から黒ずんでしっとりとした色合いになっている。内心かなり驚いていたが、薫は表情に出さなかった。なによりも今は冷静であらねばならい。それに、薫は嘘つきだった。

「おい、おまえ」

一人が薫に声をかけた。薫は高鳴る心臓を抑えつけて、努めて静かに応えた。

「はい」

「先程ここを女性が通らなかったか。白いドレスを着た女性だ」

「ああ、それなら……」

薫は素知らぬ顔で、右を指し示した。

「ここで転んだのち、あちらに」

もちろんそれは、彼女が走り去った方向ではない。剣を携え、二人がかりで女を追うような輩に、真実を教えるわけがない。

「そうか」

素っ気ない返事をして、剣士は薫が示した方向を見た。次いで二人で目を見合わせ、肯く。

「協力感謝する。――しかしておまえ、奇妙な服装をしているな」

その問答で終いだと思っていた薫は、自分を対象とした次なる問答の始まりに、心臓が跳ね上がって息が止まる思いだった。予想外の言葉に、どう返答すべきか急いで考える。薫としては彼らの服装こそ異様そのものののだが、そんな表情はおくびにも出さないし、出すわけにもいかない。

「あまり、ないもので……」

どうしてもとれる返答をぶっきらぼうに返す。服、金、どう取るかと思っていれば、今まで話さなかったほうが、「なんだ、やっぱり乞食か」と呟くのが聞こえた。薫は無視したが、やめろともう一人

がたしなめる。やれやれと思いながら、仮に薫は彼らにそれぞれ名前をつけることにした。ぶっきらぼうで事務的な剣士は『事務員』、自らを乞食呼ばわりした剣士は『悪口』としよう。実にわかりやすい名前である。

「すまないことを言った。これは足しにしろ」

事務員が投げたコインを薫は掌で受け止める。それを見ると、二人はマントを翻して薫の示した方向へと駆けていった。その足は速く、あっという間に見えなくなる。最後に目に焼き付けたのはマントの後ろの紋章で、それは十字と月をモチーフにしたものだった。

剣士が見えなくなってから数秒待ち、ようやくといった調子で薫はため息をついた。鼓動がゆっくりと落ち着いていく。予想以上に緊張していたらしく、背中には冷や汗をかいていた。気持ち悪いと思いつつ、事務員から受け取ったコインに目をやる。重く厚みのある銅色のコインだ。作りが雑で、文字にムラがある。その文字は薫の知らない文字で、描かれた絵にも覚えはない。

「……これでここがわけのわからない場所だってことははっきりしたわけだ」

自ずと再びため息が漏れた。剣にコイン。物証はすでに揃っていた。

「――それ、どういうこと？」

不意に背後で声がしたので、薫は文字通り跳び上がった。慌てて振り返りながら、声の主と距離を取る。

「うわ、そんなに驚かないでよ」

そこにはドレスを纏った彼女がいた。片手を腰に当てて、苦笑している。

薫は思わず大声を出した。

「なんでここにいるんだよ」

「しっ、そんな大きな声出さないで」

薫はむっとした。

「質問に答えろ」

「ここにいて悪い理由があるの？」

「あいつらから逃げてるんだろ？」

「そうだね」

「だったらこの場から離れておくのが定石だろう。俺が真実を教えたらどうするつもりだったんだ」

彼女はあっけらかんと笑った。

「まあ、その時はその時かな、って」

「その時はその時って……」

薫は脱力した。なんて楽観的なことだろう。

「まあまあ、現に君も嘘ついてくれたことだし」

「結果論だ」

「違うよ！ 私、人を見る目はあるからさ。君のこと、信じてた」

恥ずかしげもなく、笑顔でそう言う彼女だった。その笑顔があまりにも眩しくて、薫は言葉に詰まる。浮かべた表情は苦虫を噛み潰したかのようで、彼女は声に出して笑った。

「あははっ、そんな顔しないでよ。でもね、本当だよ。君なら嘘言ってくれるってわかってた。だから残ったの。ありがとう」

そう言うとき彼女は右耳のイヤリングを外して、薫に手渡した。そして両の手で薫の手ごと包み込む。その手は美緒の手とは感触が違った。もう少し大きくて、どこか無機質で、でも温かだった。

「これはお礼。そんな変な服は捨てて、これ売ったお金でちゃんと服買いなさい。そしたら元はいいんだから、もてるかもよ？」

「なっ、余計なお世話だ！」

薫は、彼女にうまくペースを握られていることが不愉快だった。しかしそれと同時に、人の優しさに触れて安堵している自分がいることに気が付いていた。なんと言っても薫もまだ十五歳で、訳のわからない場所に放り出され、緊張し、恐怖を覚えていたのだ。果たして照れ隠しせずきちんとお礼を述べるべきなのか、からかわれたことをもっと怒るべきなのか、複雑な思いに薫は頭を悩ませた。

しかしそんな薫をよそに、不意に手を離すと、彼女はまたしても微笑んでみせた。その笑みが少し残念そうに見えたのは、気のせいだろうか。

「じゃあ私、行くね」

さらりと彼女は告げる。どうやら彼女は剣士たちが走ってきた方向へと――つまり彼らとは真逆へ向かうようだった。なるほど、と薫は思った。確かにそれなら逃げ切れるかもしれない。リスクは大きかったが、結果的にはうまい選択だった。

薫は言う。

「そっか。気をつけて」

「ん。ありがとう」

そこで一度彼女は背を向けた。しかしなにかを思い出したのか、少し間を置いて再び薫に向き直った。表情は曇っている。捜し物が見つからなくて困っているような、難問にぶち当たって悩んでいるような、そんな表情に見えた。薫はその変化に戸惑う。

「……ねえ、ところでさあ」

彼女は少し不服そうな声で言った。

「君、私のこと、知らないの？」

「え？」

薫はぱちくりと瞬きした。そしてしばし彼女と目を合わせる。しかししまじまじと見つめる必要もなかった。見覚えなんてあるはずがない。だから正直に告げた。

「知らないよ。見たこともない」

すると彼女は深くため息をついた。あからさまに意気消沈している。返答を間違えたかとも思ったが、さすがにこればかりは嘘を貫き通せる自信もなかった。

「だよね」彼女は一度俯き、その後残念そうに顔を上げた。「そう思った。君みたいなリアクション、初めてだったし。……なんていうか、ちよつと傷つくね。みんなに知られてるってのも嫌だけど、知らないって言われるのも嫌みたい。私ってわがままだね」

「ごめん、無知で」

いいよ、と彼女は首を振る。

「無知は罪じゃないから。知ろうしないことが罪なの」

「……じゃあ、聞いたほうがいいのか？」

彼女は笑った。

「いいかな、別に。君には知ってほしくない気もする。それに……まあ、それはいいや」

「？　なんだよ」

「うんうん、いいの」

彼女は再び笑顔を見せた。それは胸がときめくような、最高の笑顔だった。

「じゃあ今度こそ行くね。バイバイ」

そして小さな手を振り、駆けていく。ヒールのある靴で走りづらないのかとも思ったが、慣れているようでその速度は早い。すぐに角を曲がって、彼女の姿は見えなくなった。

「……やれやれ」

薫がため息をつくとき、それに応えるように、手の中のイヤリングが小さく音を立てた。ちりと高い音でなるそれは、なにかの始まる合図にも聞こえた。

＊

薫はその後しばらく路地を歩き続けた。ズボンの右ポケットにイヤリングを、左ポケットにコインをしまつて、布地ごしに時々それに触れながら歩いた。するとやがて人々の喧騒が聞こえてきた。どうやら大通りに繋がる道に出たようだ。路地の先を人が流れていく。はやる気持ちを押さえて、薫はゆっくりと大通りに歩み出た。

「——うわ……」

薫は思わず、息を呑んだ。それは、……すさまじい光景だった。日本なら両側四車線にも及ぶような広い道路を、馬車が蹄を鳴らしながら駆けていく。両脇の歩道を歩く人々の服装も、見慣れたそれと

は若干違う。悪く言えばもつと地味で、機能性もデザイン性も薄く、落ち着いた色合いの古臭い服装だった。甲冑を着た男や露天商の姿も見える。その風景はきちんと成り立っていたのだが、薫からは混沌としているように見えた。秩序と整合性のとれた混沌だ。別の惑星にでも迷い込んだのかと錯覚したくなる思いだった。

……しばらくして、薫は路地に戻った。少なからず覚悟はしていたが、こうも常識外れな光景を目にすると目眩がした。はははっ、と笑いがこぼれて、それはおそらくこんな状況に陥った自分への自嘲だった。胸がすごく痛んで、息が上がる。目をつむっていたらあの草原へと戻るんじゃないかと夢想してみたけれど、それも笑みを催すだけだった。馬鹿げている。なにもかもが。こんなのは、嘘だ。嘘だと言えよ、名無し……。

もちろん彼の返事はない。薫はポケットに手を入れて、金色のイヤリングを取り出した。太陽に十字があしらわれたデザインで、剣士のマントに刻まれていたものと対をなすように思えた。

これは、繋がりがだ。不意に薫はそう思った。わけのわからない世界に放り出されて、そこでできた初めての繋がりが。

彼女に再び会おう。

結論はするりと導き出された。そう、彼女に会って、きちんと話を聞いてみよう。誰かに追われているとか、そんなことは関係ない。目的の邪魔になるというのなら、誰であろうと排除してみせよう。次のステップを踏むのだ。賽を振るのだ。彼女を利用してでも、薫は早く美緒のもとへ辿り着かねばならないのだから。

薫はもと来た道に戻り始めた。

＊

……しかし、予想はしていたけれど、再び彼女と会うのは至難の業だった。第一に果てしなく広い街だ。全景は掴めていないけれど、路地を歩きまわっているだけでわかる。遊園地の大迷路が園児の遊び場に思えるレベルである。そして路地が狭く入り組んでいるのも要因の一つだった。非常に建物が多く、ぐるぐると近場を回っているのではないかと錯覚させられる。こんな中あたりをつけずに捜し回るなど、愚の骨頂と言えた。

だから薫は考えた。あれだけ目立つ服装で、昼のうちに大通りへ出るのは難しいはずだと。おそらく路地で夜になるのを待っているか、もしくは既に街の外にいるか。誰かに匿ってもらっている可能性もある。とにかく動き回らずに隠れている可能性が高かった。だから薫はより人氣がなく、汚らしく、雑然とした方向へと歩を進めた。その選択が正しいかどうかは定かでなかったが、闇雲に探すよりは幾分かマシに思えた。

やがて日は暮れ、夕暮れが赤く路地を染めた。むしろ年中影に覆われる路地は暗く、底を染める色は黒に近かった。次第に薫は自分の行動が間違っているのではないかと思い始めた。考えれば考えるほど、思考は泥の中に埋もれていく。まだ自分が発狂していないのが嘘のようだった。

美緒、と薫は思った。美緒も自分のように一人で街を彷徨っているのだろうか。薫の姿を捜して、泣いているのだろうか。そう考えるにより深く自分の行動の不可解さが際立った。なによりもまず美緒を捜すべきではないのだろうか。彼女を殺すその日まで、彼女を守りぬくと決めたはずなのに。だが、やはりその行動は間違っている。

美緒はどこにいるかわからないのだ。そんな相手を闇雲に捜すなんて、それこそ馬鹿げている。まずはどうにかして手がかりを掴む。そのために今、唯一繋がりを持った女を捜して彷徨っているのだ。薫はそうやって自分の行動を説得した。そうしないと、もう、本当に、想いとか、約束とか、強がりとか、そういうものが根元からがらりと崩れてしまいそうだった。

男の声が聞こえてきたのは、まさにそんな時だった。薫は下を向いていた顔を勢いよく上げて、走った。その声には聞き覚えがあった。あの剣士、事務員の声だ。冷淡な声が裏返って、怒気が感じられた。薫はその場の状況が容易に想像できた。そしてそれはまさしくその通りだった。

夕日を浴びて、純白のドレスはきれいな赤だった。袋小路に追いつめられて、彼女は鋭い眼差しで剣士二人を睨みつけていた。剣士らは月と十字の紋章を薫に向けて、じりじりと彼女との距離を詰めている。思わずため息が漏れそうな気分だった。今時マンガでも見ないようなベタな展開だったけれど、これはもう、致し方なかった。

薫は、ゆっくりと歩み寄る。腰の刀を抜いて、殺気でも漲らせていればさぞ様になったことだろう。そのまま時代劇にでも使えそうなシーンである。

はじめに事務員が、次いで悪口がこちらに気づいて、振り向く。

しかし薫は気にせず歩み寄った。そこには躊躇も逡巡も、微塵とて存在しない。

「おまえは、さっきの」事務員が呟く。

「こつちに来るんじゃないよ」悪口が言う。

薫は無視した。

「聞こえねえのか、おい、乞食」

「やめろ、ばか」

薫はそこで一度立ち止まった。言葉は返さず、あくまで無表情で、二人を睨みつける。

事務員がやれやれと首を振った。

「悪いな。なんの用があるかは知らんが、仕事なのだ。口を閉ざし、今すぐここから立ち去ることを薦めよう」

薫はため息をついた。陳腐な台詞だ。B級役者の戯言に近いものがある。

「どうした。聞こえなかったのか？」

「……聞こえたよ」薫は初めて口を開く。傲岸不遜に。できるだけ虚勢を張って。

「ならば――」

「けど、それは無理な相談だ」

腕を上げて、ドレス姿の少女を指さした。

「知り合いなんだ。見過ごすわけにはいかない」

……短い沈黙の後、事務員がため息をついた。

「ならば仕方ない。おまえはそいつを片付けろ。私は彼女を捕まえる」

「片付けろってのは？」

「意味は自分で考えろ」

「……了解。へへ、楽しい仕事だな、ほんと」

ニヤリと笑いながら、悪口がすらりと剣を抜いた。その様は不気味だったが、名無しに比べればなんてことはない。むしろ彼の剣が赤く見えたから驚いた。もちろんそれは夕日が赤いだけのことで、本当の色は鉄に近い。手入れが行き届いてなく、ところどころくすんだそれは、人を切る代物には見えなかった。あまりにも無骨だ。

「……剣は切ることかなわず」

薫は呟く。「ああ？」と悪口は片方の眉を上げた。

「剣は突く。剣は叩く。その軌跡、章月流を捉えることかなわず。恐るるに足らず」

「なに言っただ、おまえ。気でも触れたか？」

薫は無視する。事務員ならまだしも、見るからに低俗な下衆と話す言葉など持ち合わせていない。

悪口は大きく舌打ちをした。

「無視かよ……。まあ、いいや。どうせもうてめえは話すことも叶わない」

剣を構えて、彼は地面を蹴った。

「死ねえっ！」

——それは存外的確な突きだった。薫の心臓の位置を、きちんと捉えた一突き。しかし残念、小百合の当て身に比べれば止まっているようなものだ。背筋が凍るような鋭さが無い。殺意を剣先の一点に込めるほどの集中力もない。せめて芸やひねりがあるのかと思えば、それすら見られない。それは素人に毛が生えた程度の、ただの突きだった。

やれやれと、薫はため息をついた。

一歩右足を動かして、半身で剣閃を避ける。そして左足を差し出すと、悪口の足に引っ掛けた。

「——うわっ」

情けない声を上げて、悪口が体制を崩す。隙だらけだった。無防備な左腕を掴み、鎖骨に手を添え、瞬時に肩から引っっこ抜く。——ガコッ、っと嫌な音がした。

湧き上がる悲鳴。

たかが脱臼程度で女々しい悲鳴だった。その声に気づいた事務員が薫へ向き直る。地に突っ伏し呻く悪口の様子を一瞥したのち、目を細めて彼は自分の剣の柄に手をかけた。

「……貴様」

日は落ちかけて、抜かれた剣の色は先程よりも赤黒く見える。悪口に比べればよく手入れされているらしく、照り返しが眩しい。

——その時、彼女と一瞬目が合った。

彼女はありがとうとでも言うように、満面の笑みを浮かべていた。全面的な信頼の込められた笑みだった。わかっているよ、と薫は心の中で呟いた。

「自分がなにをしているのか、わかっているのだろうか」

視線を戻せば事務員の怒り狂う顔が眼に入る。彼は静かに猛っていた。こういう男が一番厄介かもしれない。家庭に入ればいつも無愛想で、高圧的で、事あるごとに子供や妻に暴力を振るう。そんなイメージが頭に浮かんた。もちろん多分に偏見が含まれてはいるが、決して的外れではないだろう。

わざとあくびを噛み殺し、余裕を装いながら、薫は事務員に近づいた。事務員の顔に驚きの色が浮かぶ。そしてさらなる怒り。自らのプライドを侮辱されたと思ったのだろう。コインをくれた時から思っていたが、おそらく事務員はひどくプライドの高い男だ。

予想通り、待ちきれずに彼から手を出した。剣を振り上げて、それを荒っぽく振り下ろす。そんな一撃、躲せないほうがおかしい。薫

は回転しながら事務員の横をすり抜け、その勢いのままマントの紋章へと蹴りを入れる。

「ぐっ……!!」

肺から息を漏らして、前のめりに体制を崩す事務員。薫は左のポケットからコインを取り出すと、彼が振り返るであろうタイミングを見計らって、それを指で弾いた。

「返すよ、それ」

振り向いた彼が、コインに目を奪われる。

——その一瞬の隙について、薫の足が彼の鳩尾に突き刺さった。

「……っ!!」

事務員は、声すら出せなかった。すべての衝撃を腹部で受け止め、その勢いのまま三メートルばかり飛んでいった。ごろごろと転がり、左肩を押さえながら呻き声を上げる悪口と重なる。

「……ふう」

薫はさもないでもないことのように、軽く息をついた。しかし突如どっと疲れが押し寄せた。気付けばひどく息が上がっており、同時に多量の汗も流れ出る。血流が早まっていたのだろう。緊張感から解放されて、酸素を欲しがる体がふらりと揺らいた。立ち眩みである。

無様にもよろける薫を、支える手があった。

「えっ」

「あっ」

白いドレスを着た、彼女だった。ふたりは時が止まったかのように、そのままその場で見つめ合った。むしろ目を逸らすという考えに至る気力が、薫には残されていなかった。なにせ久方ぶりの実戦である。小百合との組手とはわけが違う。張り詰めた糸が切れたところで、誰が責められることだろう。

しかし、次の瞬間、薫は意図せず跳び上がることになる。

薫の首に、彼女の腕が回った。上目遣いに薫を見つめ、白くきめ細やかな頬を赤く染めている。明らかにそれは夕日の色ではなかった。薫は、嫌な予感がした。

「ありがとう」

彼女は眩き、そして――

――薫にキスをした。

#07 ナイトパレード

その後のことは正直よく覚えていない。彼女に手を引かれ、路地をただひたすらに駆け抜けた記憶があるけれど、過ぎゆく風景は幻のようで、地を踏む足もふわふわと雲の上を歩むような心地だった。疲れもあったし、なにより混乱もしていた。唇に残った感触が、嫌でも時折蘇る。小さいけれど弾力があって、薄く湿っていて、互いの唇が張り付いたような心地がして……。そもそも、なぜあの時キスなんてことをしたのだろうか。考え出すとキリがなかった。だから薫は考えることを放棄して、導かれるままに走っていた。

やがて夜が訪れた。外灯のほとんどない路地はあまりにも暗い。その頃には薫も己を取り戻し、真剣な面持ちで彼女の後についていた。ばさばさと揺れる長く重たいスカートを履き、高いヒールの靴を履いているというのに、彼女の足取りはとても速い。そして持久力も持ち合わせている。時折息を整えるために足を止めるほかは、走りっぱなしだ。薫でさえ息を切らし、全身に汗をかいていた。

「――もう、いいかな」

唐突に彼女は呟いた。ふたりして壁に背をつけ、息を整えている最中のことだ。薫は深く息をつくとき、彼女に目をやった。

「だいぶ走ったな」

「そうだね。まあ、ここまでくればあとはもう大丈夫でしょ。暗くて追いかけるどころじゃないし」

「なんで追われてるんだよ」

その理由をまだ薫は知らなかった。ここまで付き合ったのだから、そろそろ教えてくれてもいいはずだ。しかし彼女は笑顔だけで薫を説き伏せた。

「それはまだ内緒。ごめんね」

それがあまりにも魅力的な笑顔だったから、長い間見つめていると恥ずかしくなってきた、薫は彼女から目を逸らした。

「まあ、いいよ。でも、名前ぐらい教えてくれてもいいだろう？
なんて呼べばいいかわからないし」

「ああ、それもそうだね」

そこで彼女はなにが面白いのか、不意に笑い出した。

「？　なんだよ」

「あははっ。だって、自分から名乗ることとか、そうそうないもん。
おかしくて」

「そんなに有名なのか？」

「まあね。庶民に対して名乗る機会は、特にないかなあ。――あ、
言い方悪かったらごめん。別に君を馬鹿にしてるわけじゃないよ？」

薫は苦笑した。その言い方から見て、どうやら彼女はこの世界における貴族かなにかのようだ。どう取り繕ったところで、自分と一般人は別物と考え見下している態度は拭えない。イヤリングの件から

もそれが窺える。あの事務員と似たタイプだ。しかし彼に対する印象とは異なり、薫は彼女に対しては不快な気持ちを抱かなかった。おそらくそれは、庶民であるはずの自分にも優しく接しようとする、彼女自身の性格が大きかった。身勝手さもあるが、なによりも彼女は優しいのだ。それが事務員と彼女との決定的な違いである。

「大丈夫。わかってるよ」

「そう。ならいいんだ。ごめんね、私、少し浮世離れしてるから」

「格好とかな」

「あははっ、それはお互い様だよ」

笑い合い、見つめ合う。

「いいよ。教えてあげる。私の名前は――」

「――ミライ。ミライ・ティンウェイ」

不意に闇の向こうから声がしたので、薫は体を強ばらせた。背後に彼女を隠し、身構える。その声は若い女のものであった。それも薫たちより年下の声だ。幼さゆえの悪戯心が窺える。名無しが女の子になったらきつとこんな声だろう、と薫は思った。

声が続ける。

……しかし、その調子はあまりにもずっこけていた。

「知らないから名乗ってくれなんて、もーおまえってばデリカシーにやさすぎ！ ミライを誰だと思ってるのさ！ 世界でいちばん優しくて強くてプリチーな、歌姫だよ？」

そうして闇の中から姿を見せたのは――

猫だった。

「……え？」

薫は言葉を失った。足下に黒猫が一匹、ゆっくりと寄ってくる。一瞬その猫が喋ったのかとも思ったが、そんなわけはないと必死に闇に向かって目を凝らす。しかし、人の姿は見えない。そうこうしている間にも猫はどんどん近寄ってきて、やがて薫のすぐ傍で足を止めた。後ろ足を畳んで、上手に座る。目が合う。

「よっす！」

猫が言った。片手を上げて、口を開けて、確かにその黒猫は人間の言葉を話した。

薫は驚愕から跳び上がった。猫が人間のように笑顔をみせて、喋っている。ありえない光景だった。自分の目と耳がおかしくなったのかと、普通ならそちらから疑うだろう。しかし背後の少女は歓喜の声を上げてその猫を迎え入れた。

「ナイト！ 来てくれたのね」

「来るに決まってるにゃん！ 捜すのにはちよっぴり苦勞したけどねん」

語尾に音符でも付きそうなくらい、元気で明るく無邪気な声だった。薫はまだ固まったままだというのに、ミライは猫が話す不思議なまろで意に介さない。こんな不可思議な状況に、どうして順応することができるのか。

少女が白いドレスをはためかせて近寄ると、猫は喜び勇んで跳び上がり、彼女が差し出した腕の中に着地した。

「な、なんで、おまえ」

「ん？ なに？ あたしににゃにか用？」

きょとんとした顔で猫が首をかしげる。その様はまるで人のよう。

「なんで猫がしゃべってんだよ！」

薫は叫んだ。もう、我慢ができなかった。

「にゃーんだ。そんなこと？」

猫が笑い、猫を抱く彼女も笑う。

「あーごめん。言ってなかったね。私、この子と待ち合わせしてたんだ。この子が町の外まで案内してくれることになってたから」

「いや、そうじゃなくて」

「？」

「だから！」

薫はだんだん苛々してきた。そして苛々している自分が馬鹿馬鹿しくも思えた。もしかしたらここでは猫も人の言葉を話せるのかもしれない。その小さな脳味噌でどのような処理がなされているかは謎だが、ミャウリンガルなんてものもあったわけだし。

猫が言う。

「まほーに決まってるにゃん！」

「……ま、魔法？」

傲慢気に胸を張る猫と、こくりと肯く少女。

「そうだよ。この子が喋れるのは、私が魔法をかけたから。当たり前でしょ？」

当たり前と言われたら、唸るしかない薫だった。薫にしてみればもちろん当たり前ではないけれど、この世界で当たり前ならばそうなのかと飲み込むほかない。いわば薫は記憶を失い、モラルや常識といったものをなくしてしまったようなものだ。そんな状況でこれが当たり前だよと言われたならば、受け入れるほかないだろう。郷に入れば郷に従え、とは昔の偉い人の言葉である。

「とにかく、ナイトが見つけてくれたから、もう安心。彼女についていけば、街を出られるよ」

「ちょ、待て待て待て。整理させてくれ」

薫は自らの前に掌を突き出して、彼女たちの言葉を止めた。長く急な坂道を下り続けるジェットコースターに乗っているような、そんな展開だ。このままでは知らぬ間に最悪な展開に巻き込まれてしまいそうな予感もあった。状況を整理するだけの時間が必要だった。「めんどくちやーい!」という猫の声は無視する。まずは名前だ。この際猫が喋れることとか、魔法がどうこうだとかは考えないことにする。本当に、キリがない。

「えっと、ミライと、ナイトだっけ?」

二人(?)はこくりと肯いた。白いドレスの少女がミライで、黒猫がナイト。どちらも覚えやすい名前である。薫も自分の名前を告げる。

「俺は薫」

「カオル? ふーん……。珍しいけど、いい名前だね」

「ありがとう」

ミライの笑顔に見惚れて、薫も微笑む。しかしすぐに我に帰った。

「そんなことより、俺たちはこれからどこへ向かうんだ?」

「あー、その話?」

ミライの笑顔が曇る。

「それもまだ秘密かなあ。でも、この街の外だよ。私はどうしてもそこに行かなくちゃいけないんだ」

「そんなことも知らにゃいのお？」

……薫は、イラッとした。ナイトを地獄の沙汰まで放り投げてやりたい気分だった。いや、しゃべる猫なんて珍しいから、見世物小屋にでも売りさばいてやろうか。その程度で許すなんて、なんて優しいことだろう。

閑話休題。

「なぜ追われてるか、どこに向かうか、それは教えられないんだな？」

「うん」ミライは肯く。

「でも、すごく大切なことで、悪いことではない？」

「そうだよ。私はなにも間違ってるない」

その言葉に、薫は内心渋い顔をする。語弊のある物言いだ。親子喧嘩をして家出をしてきた少女のそれに似た雰囲気がある。若気の至りという言葉で片付ければ笑い話かもしれないが、巻き込まれるこっちとしてみればたまったものではない。そういった馬鹿馬鹿しい欠陥は後々になって致命的な結果へ繋がる。しかし追求したところで答えてくれないだろう。聞いたところでおそろくなにかできるわけでもない。薫はため息をついた。

「オッケー。なにはともあれ俺たちは今からナイトの案内で街を出

るんだな？」

「うん」

「よし、それはいい」

薫は目を細め、ミライの瞳を見た。黒く大きな瞳が、きょとんと丸くなる。

「俺はそこについていいのか？」

「あれ、来ないの？」

割と真剣な質問のつもりだったのに、ミライの返答はあまりにもあっさりとしたものだった。

「い、いやだって」

「君、もうお尋ね者だよ。彼らを倒しちゃったんだから」

「……………」

薫は血の気が引く音を聞いた。

「ちょ、ちょっと待てっ。悪い奴ら倒したのに、なんでお尋ね者にならないといけないんだよ」

「別に悪い人たちじゃないから」

「……………」

なんだそれ。

素直に、最悪だ、と薫は思った。

「じゃ、じゃああいつらは？」

「そんなことも知らないの？　もう！　君はどこか別の星からでも来たみたいだね」

まったくだよと言いたかったけれど、そういうわけにもいかない。
薫は黙って続きを待った。

「彼らは国の騎士団だよ。むしろ正義の味方だね」

「正義の、味方……？　なら俺たちは――」

薫はそこで言葉に詰まった。なんだか、これ以上聞いてはいけない気がした。聞いたらさらなる絶望に飲み込まれそうな気分だった。俯き、力なく首を振る。

「――いや、わかった。もう、いい。もう」

「情けにゃい男め！」とナイトが鳴く。

「まあまあ、そう落ち込まないで」ミライは笑った。「それに君はもう、私のナイト二号なんだから」

「え？」

今度は薫がきよんとする番だった。意味がわからない。その時ばかりはミライの笑みも素敵だと思えなかった。少し不気味ですらあった。

彼女は言う。

「だって、私のこと守ってくれた。助けるために、戻ってきてくれた。すごい嬉しかったんだよ。ありがとう。ピンチに王子様が助けに来るなんて、おとぎ話の中だけのものだと思ってた。でも、現実には君に助けられて、そして今この場に一緒にいる。これから君は、あんな風に命を賭して、私を守ってくれるんでしょう？ だったらもう君は立派なナイト様。ぜひ一緒についてきて、これからも私を守ってよ」

……その言葉に、少しの間薫は絶句した。現代的でわかりやすい表現をするなら、引いた、と言ってもいい。信じがたいほど自分勝手な台詞だった。寒気すら感じる。けれどあの笑顔で言われたからには、薫には返す言葉がなかった。その笑顔を曇らせる言葉はたくさんあったけれど、してはいけないことのように思えた。それは小百合への怯えに近いものがあった。

仕方なく、微笑む。

「……わかった。なにかあったらまた助けるよ、歌姫様」

「やった！ だから私、人を見る目はあるんだって！」

改めて、最悪だ、と薫は思った。

＊

外に向かう前に着替えが必要だ、とミライは言った。確かに二人とも異端な服を着ている。薫の知る世界ならばそういった異端もファッションの一つとして受け入れられる可能性はあるが、ここは薫の知らない世界だ。常識は通用しない。少しでも目立つ服装は避けるべきだ。そう考えると、やはり街の中にいる内に服の調達は済ましておくべきだった。——ということで、ミライの両耳分のイヤリングを右ポケットにしまい、薫は街外れの服飾店へと入っていく。

そこは小さな店だった。客もおらず、店主であろう太った女がカウンターで呆けている。もちろん薫はそういう店を狙って入った。他に客がいないこと、店主がずぼらであること、そして町外れの小さな店であること——この三点が重要だった。今の状況を鑑みれば、当然目撃者は少ないほうがいいし、どうしても関わらざるをえない店主がずぼらであれば、後処理が楽だ。

薫はイヤリングを差し出し、店主に話しかける。

「すみません。これで、二人分の服をお願いします。どちらも男物で、軽くて動き易く、それでいて温かいものだトベストです。サイズは僕に合うものと、もう少し小さめのものを。できるだけ急いでお願いします」

それだけ言ってしまおうと、薫はにこりと微笑んだ。ただでさえ変な服を着ているのだ。妙な態度で変人だと思われたくなかった。出来る限りの愛想をふるまっておく。

店主は薫の顔に一瞥をくれたかと思うと、イヤリングに目をやった。そしてしばらく見つめたのち、急に表情が一変する。目は大きく見開かれ、口も馬鹿みたいに開けられたままだ。自分の見ているもの

が信じられない——そういった表情だった。

「……あんた、これ、どうしたの？」

店主の言葉に、薫は用意していた言葉をつらつらと返す。

「これは、ある高貴な方からいただいたものです。手放したくはないのですが、路銀が底を尽き、どんな宝も命には代えられないということで、売りに出そうと思った次第です」

「嘘はやめな！」

ぴしゃりと、店主は言い放った。

「こんな素晴らしいもの、あんたなんかはただただけるものかい。そもそもこれがどんなものか、本当にわかってるのかい？ どうせ盗んだんだろう！ 白状しなっ！」

そうしてカウンターから取り出した剣を、店主は薫の首筋に突きつけた。正直力に任せればどうとでも対処することはできたが、やはり暴力を振るうわけにはいかない。騒ぎを聞きつけて街の人が集まってきたらたまったものではないし、薫にだって倫理観はある。罪の無い人を傷つける気は毛頭ない。穏便に事を済ませる必要があった。

さてどうするべきかと薫が考えていると、背後で声がした。

「しょうがないなあ、もう」

ミライの声だ。その声の方に目を向けた店主の顔が、見る見るうち

に青ざめていく。

「み、ミライ様……！」

ミライ、様？ 薫は馬鹿馬鹿しく思いながら振り向いた。最終的に姿を表すくらいなら、最初からミライがやればよかったのだ。それにしても民衆に『様』という敬称をつけさせるほどとは、恐れ入った。まあ確かに豪華なドレス姿で有名人が入ってきたら驚くとしても、薫が考える以上にミライは偉い人のようだ。

剣を床に落とし、カウンターから外に出て、店主はそそくさとミライに近寄った。

「こ、こんな夜遅くにどうなされたのですか？」

「しー、ダメだよ」

ミライは口元に人差し指を当てて片目をつむる。愛らしいポーズだ。計算なのか、天然なのか、薫には判断できない。

「そんなに慌てないで。今日はお忍びなの。だから、静かにお願いね？」

「は、はい！」

ナイトはミライの足下にいた。さすがに人間の言葉は発さず、沈黙を守っている。黒猫と男を連れてドレス姿で言うお忍びにどれほどの説得力があるのか、考えるのはよしたほうがいいのかもしれない。

「さっきその男から言われたとは思うんだけど、男物の服を二着

用意してもらえますか？ できればここで着替えちゃいたいんだけど」

「……え、あの、そう申されますと、ミライ様が男装を？」

「まあ、そうなるかな」

「そ、そんな、いけません！」

店主がぶんぶんとう首を振った。後ろで結んだ髪も一緒に揺れて、その様子は少し滑稽だった。

「でも私が男装してるだなんて、誰も思わないでしょ？ だからお忍びには最適なの」

「ですが……！」

「もう、堅いこと言わないで早く用意してよ」ミライは腰に手を当てる。そして店主の目の前に、人差し指を一本掲げた。「——いい？ これは命令だよ？ 自覚がないなら教えるけど、あなたは今私に逆らってるんだからね？」

その言葉に、店主は跳び上がった。

「め、滅相ありません！ 私にそんなつもりは——」

「わかってるよ。だから、早くして。二度目はないよ」

厳しい口調でミライは言い放った。すると急激に店主の太った体が縮んでしまったかに見えた。それほどミライの言葉が堪えたと見える。しかしでしゃばりな店主は、もじもじしながらミライに尋ねた。

「ち、ちなみに、つかぬことをおうかがいしますが……」

「なに？」

「あのお方とはどういったご関係で……？」

店主と目が合う。どうやら薫のことを言っているらしい。確かに気になるのもわかるが、薫だったら絶対に触れない話題だった。

「ああ、彼？」

ミライは微笑んだ。

嫌な予感がした。

「私の彼氏よ」

——その瞬間、店主のテンションが一気に上がり、声のトーンもあがった。実にわかりやすく、彼女は興奮していた。それもそうだろう。有名人のお忍びデートに対面したら、興奮もする。それが耳年増な女性であれば尚更だ。

「そうだったのですか！ それは大変なご無礼を……。こんなこと言っているのかわかりませんが、どうも、妙な服装をされていたものですから」

「ああ、いいの。気にしないで。彼はいつもああなの」

おい。

薫のため息も追いつかない速度で、状況が進行していく。

「でも、私が彼を連れてここに来たことは内緒よ？　もし黙っててくれるなら、今度お城に招待してあげる」

「ほ、本当ですか!？」

いつの間にか薫のすぐ傍に来ていたナイトが、小さな声で言った。

「大変だにゃー?」

……薫はがくりと項垂れた。

＊

「――さて、準備もできたところで、行きましようかね」

やっと着替えられてすっきりしたのか、笑顔でそう告げると、ミライは薫の目の前でくると一回転した。いやはや、見事な男装である。無論かわいらしすぎて男らしくはないものの、遠目からであれば男にしか見えないだろうし、近くからでもしっかりと観察しなければ女だとはわからないだろう。帽子を被って、髪も中に隠している。薫もそんなミライと似通った格好だ。軽くて動き易く、そして温かい。肌触りが少しごわごわしているが、そんな些事に文句を言うべきではないだろう。

「ナイト、変身していいよ」

「んにゃ！　りょーかい！」

変身？

唐突かつ不吉な台詞に、暗い暗い路地の片隅で、薫の顔もまた暗く染まった。

「へーんしん！　とうっ！」

掛け声と共に、ナイトが前方宙返りをした。すると、音もなく一瞬にして彼女の体が大きくなった。――そしてまさしく人の姿になる。十歳かそこの少女の姿だ。黒くて短い髪に、浅黒い肌。瞳も猫のそれから人のものになっている。頭からはぴよこりと猫耳が生えていて、お尻から伸びるのは黒い毛のふさふさとした尻尾だ。

薫はもちろん絶句した。

もう何度目の絶句かわからない。

「あ、ダメだよナイト。耳と尻尾が隠れてない」

「んにゃ！？　こりゃまた失礼」

猫が顔を撫でるような仕草で、少女姿のナイトは頭をかく。すると猫耳は隠れてしまった。尻尾も幾度か振ると、掃除機のコードのようにしゅるんと収納される。こんな万物の理をねじ曲げた常識はずれの光景も、人々には当たり前の魔法によるものなのだろうか。薫は目が回って、その場に倒れてしまいそうな気分だった。

「あれ？　大丈夫？」

薫に触れようとしたミライの手を払って、薫は肯く。

「いや、うん。多分大丈夫。そういうの初めて見たから、信じられなくて」

「そう？ まあ、じきに慣れるよ。詳しいことも聞かないであげる」

「……ありがとう」

薫は深く息を吐き出した。ここまで来てしまったからには、超常現象だろうがなんだろうが受け入れて進まねばならない。

全ては、美緒のために。

「よし、行こう」

ナイトの先導で、三人は歩き出した。

＊

ナイト曰く、外は近い、という話だった。薫たちが向かっているのは、街の北東だ。この街は高く頑強な壁に覆われており、出入口となる門は東西南北にそれぞれひとつずつしかない。しかし彼女が言うには、そこに抜け道があるらしい。

「本当にやらあるはずがにゃい隙間なのになー」

「おそらくそこが奴らの出入口だね」

「その可能性は高いにゃ！ 出入りしている男を見たもんね！」

「本当？　どんな男だった？」

「しぶーいおじさんだったにゃ！」

「おじさんかあ。まあ、そんな若い奴もいないでしょうよ」

薫は黙って彼女たちの会話を聞いていた。混ざろうにも時折専門用語が含まれており、理解が追いつかない。なんとかその中から情報を拾おうと頑張っていた。

「それで、そこはどんな感じ？」

「二重の結界に覆われてるにゃん」

結界？　またわからない言葉だ。言葉だけなら知っているが、それがどんな意味を指すのかまではわからない。薫が考えているものに似ているのならば、おそらく目に見えなくて、なにかを守っているものだろう。

ミライがため息をついた。なぜだか知らないが、彼女にため息は似合わないと思っただ。

「出入口を隠すためのものと、侵入者を防ぐためのものね？」

ミライが尋ね、嬉しそうにナイトは鳴く。

「そのとおりにゃん。さっすがミライ！　だてに最強歌姫を名乗ってにゃいね！」

「やめてよ、もう」

ミライは嫌そうな顔をした。最強と言われるのが不満らしい。

「それで、鍵となる言葉はなに？」

ナイトは踊るようなステップでくると回った。その調子に、耳と尻尾が飛び出る。

「着くまでは教えられにやいでごじやる」

「ケチ」

「楽しみは後にとつとくものにゃーん」

「むう」

ふくれるミライと、回り続けるナイトだった。やれやれ、と薫は思った。

そこから歩いて十分足らずだろうか、不意にナイトが立ち止まり、薫たちに向き直った。なんとも自慢気な表情である。にやけて、鼻の穴が大きくなっている。思わず睨みつけてやりたくなったが、静かに見守ることにした。

「ふっふっふっ……。出入口は、ここにゃ！」

大げさに両手を広げて、ナイトは言った。しかし、どこにも抜け道なんて見当たらない。ただ確かによく見れば、そこには壁があった。今までのレンガでできた壁とは違う。石でできた壁だ。それも風雨

に晒されている割には、不思議と表面がつるつるしている。そしてとても大きく。縦に20メートル近くはあるだろうか。今までその存在に気づかなかったのが嘘みたいに、凄まじい威圧感だ。とっかかりもなにもないこの壁を登るのは、おそらく不可能だろう。壁を見上げていた薫をよそに、ミライはゆっくりと壁に近づいた。そして手を伸ばす。

「――さわるのは危険にゃ！」

「わかってるよ」

その声に、ようやく薫もミライの動きを注視した。彼女は掌を壁に触れるか触れないかというぎりぎりまで近づけ、目をつむり、なにかを探っているようだった。やがて彼女は目を開けて、言った。

「ナイトの嘘つき。結界は三重だよ。魔力をもってこの壁に干渉しようとしたら、その人を壁の中に飲み込むようになってる。いけ好かない結界ね」

「うわわ、怖いにゃあ……」

薫にはちんぷんかんぷんだったが、危ないものだということとはわかった。距離をあけて、様子を見守る。薫ではどうしようもできない問題だ。

「まあ、でも、鍵となる言葉さえ言えばなんの問題もないかな。声紋まで記憶するタイプのものじゃなさそうだし」

「よおし、いいぞ、ミライん！」

「もう！ 私の名前はミライ！ そんなことより、そろそろ鍵を教えなさいよ」

するとナイトが悪戯に笑った。

「知りたいかにゃ？」

「なに馬鹿なこと聞いてるの。知りたいに決まってるでしょ。ほら、早くして」

「えー？ どうしようかにゃー？」

そこで急にミライの眼光が鋭くなった。そしてナイトを睨みつける。その視線に思わずナイトは固まった。

ミライがぼそりと呟く。

「お仕置きするよ？」

「あうあうああ、それはカンベンにゃあー」

ナイトが足元にすりつく猫のような様で、命乞いを始めた。なんだかんだ言っても主従関係は完璧に出来上がっているようだった。仲が良さそうにも見えるが、こんなんでも互いに少しは苦勞しているのかもしれない。

「じゃあ教えるけど、聞いて驚くにゃよお？」

「驚かないよ。ほら、早く」

ナイトは息を吸い込むと、一息に告げた。

「『歌姫様を、我が手に！』」

「……………」

見れば、ミライはぼかんと口を開けていた。薫も思わず眉根を寄せているのだ、当然だろう。そんな中で「私は悪くにゃいよー」と、ナイトが縮こまっていた。

「……あいつら、なにを鍵にしてるんだか……」

ミライは渋い顔で、額に手を当てた。事の運びを知らない薫でも呆れるほどの、馬鹿馬鹿しい合言葉だ。そしてそれを本人に知られるという、最早どうしようもない展開である。どうやらこの結界を張った奴らは、歌姫であるミライを手中に収めようと画策しているらしい。薫の憶測ではあるけれど、大して間違っていないはずだ。合言葉ひとつで全てが丸分かりである。まあ、合言葉を知られる事がそもそも問題外なのだが。

「なによそれ、もお……。言いたくないけど、そういうわけにもいかないしなあ……」

「おうおう！ 言っちゃえ言っちゃえミライ！」

「ナイトは黙ってて！」

覚悟を決めたのか、ミライは一度深呼吸をすると、壁に手をかざし高らかに告げた。

「『歌姫様を、我が手に!』」

すると少しして、壁が二つに割れ始めた。音もなく、地響きもない。ゆっくりと、時計が時を刻むような調子で壁は分かたれていった。やがて鋭利な刃物で切られたような美しい断面が顕わとなり、壁には人がひとり通れる程度の隙間ができる。できた隙間には夜よりも暗い黒が埋まっっていて、ゆらゆらと揺らいでいるようにも見えた。薫は少し恐怖を覚え、険しい表情を浮かべる。

「さあ、行くわよ」

そう言うと、躊躇なくミライはその闇へ踏み込んでいった。あつという間に彼女の姿が見えなくなる。ナイトも後を追って行ってしまったので、薫も慌てて隙間に飛び込んだ。真っ暗闇が全天に広がり、一瞬くらりと目眩がしたかと思えば、薫は地面に立っていた。満点の星空の下、一面に草原の広がるそこは、壁の外だった。

「なっ……!」

驚いて振り返れば、そこには壁があった。継ぎ目どころかひびひとつすらない。美しい壁面だ。ここを抜けてきただなんて、考えられなかった。

「よし、これで第一段階はクリアだね」

ミライが笑顔で言う。やはりこの程度のことはどうってことないよ。うだ。全てを受け入れると決めてもお、魔法の神秘には開いた口が塞がらない。魔法とは、いかなる法則さえもねじ曲げてしまうものなのだろうか。

「なあ」

薫は思い切ってミライに尋ねた。

「魔法でこんなことができるなら、変装するためにわざわざ服を買う必要もなかったんじゃないか？ 騎士団から走って逃げる必要性だって疑わしい」

予想通り、ミライは苦い笑みを浮かべた。

「そうだよね。私だってそう思う」

「なら――」

「でも私、今魔法使えないんだ」

そう言って、ミライは首に巻いたスカーフを取る。――そこには、黒々とした紋様が描かれていた。

恐る恐る薫は尋ねる。

「それは？」

「呪いだよ」あくまでも笑顔でミライは言った。「魔法を封じ込める呪い。……そうだね。そろそろ私の目的と、今から向かう場所を教えてもいいかな」

そうして彼女は遠く遠く彼方を指さした。夜の向こう、そこには地平線があって、星が煌めいている。

「私たちが今から向かうのは、シェイタイムの森。そして、そこにあると言われる盗賊のアジト。目的は、ただひとつだよ」

ミライは強い決意のこもった口調で、告げた。

「――盗まれた私の魔法を、取り戻す！」

#08 月を宿した少年

無愛想を絵に描いたような顔で、少年は正面を見据えていた。鷹のような鋭い目付きである。しかし視線の先には、なにもない。強いて言えば、石の壁がある。もちろんその壁に彼の興味を惹くなにかがあるわけではない。彼は虚空を見つめながら、思考だけを遠い空へ泳がせていた。厄介なことになったな、と思う。非常に厄介な出来事だ。とある国民的ヒロインがもたらしたその惨禍は、まだ十五を過ぎたばかりの彼の未熟な心を何度も何度も掻き乱し、苦しめた。こんな事態を誰が予想しただろうか。止まない頭痛が、彼の苛立ちをさらに増幅させていた。

しかしてよく見れば、彼の顔立ちはとても凛々しい。切れ長の目に、細長くすらりとした眉。固く結ばれた薄い唇。それぞれのパーツは直線的で、見る者に冷淡な印象を与えることが多かったが、それでも彼の若々しい凛々しさは実に魅力的で、目を引いた。しかし特筆すべきなのは、その髪であろう。白狼を思わせる白髪である。光の加減によっては銀にも見えたが、近づけばそれが透き通るような白をしているのがよくわかる。若くしてこのような美しい白髪をもつ者はそうそういない。周りに数名の男もいたが、やはり皆黒や赤茶といった髪をしている。

「……はあ」

彼は小さくため息をついた。周りの男達が身構える。皆彼より年上であるにもかかわらず、それでも男達は彼の一挙手一投足に集中していた。それはその少年が、男達の上官にあたる人物だからだ。

そこは騎士たちの詰所だった。王宮の北東、あまり日の当たらない

その建物は日中も暗く、壁の燭台ではろうそくがちらちらと揺れている。低い天井に、冷たく湿った空気。床には木材が用いられているが、石壁の閉塞感がより居心地の悪さを際立たせていた。もちろん床板だって綺麗とは言いがたい。騎士の詰所といえば女の手が回らない男の場所であるから、仕方ないといえればそれまでであるが、それでもそこは無骨で、装飾品などもなく、しけていた。長机にくたびれた木の椅子が並べてあって、彼はそのひとつに腰掛けている。背もたれには、よく手入れされた剣が二振り。

騎士たちは皆体に密着する薄手の服の上から革の服を着込んで、ベルトで締め上げ、厚く膝丈ほどあるブーツを履いていた。小声で話し合う者もいれば、ただ呆けている者もいる。それでも常に彼らは気を張り詰めて、少年の変化を注視していた。近寄り難いオーラを発し続ける彼は、若い身の上ながら、皆の隊長なのである。

その時不意に戸が開いて、男が上がりこんできた。臙脂色のマントを羽織り、腰に剣を掃いた男だ。詰所の雑兵たちとは違い、その身なりは高級である。髪は黒みがかった金髪の癖毛。口を覆うヒゲを生やし、体？はがっしりとしている。歩くたびにブーツのガツガツという足音と、剣が放つ金属音が重なり合って、部屋の中に響いた。そして彼は皆が見つめる中、一直線に少年の目の前の席へ向かうと、なんの躊躇もなくそこに腰掛けた。未だに虚空を見つめる少年と、目を合わせる。

「よお、ルーン」

男は笑顔でそう言った。よく見ればその顔は掘り深いながらも優しげで、なによりもハンサムだった。三十を迎えた渋みも加わり、より男性として完成された印象を受ける。ルーンと呼ばれた少年は意識を狭苦しい詰所の中へと戻すと一二度しばたいて、無愛想なその

表情のままにぼそりと呟いた。

「トゥーシェさん、ですか」

「いつにも増して無愛想なところを見ると、やはり大変みたいだな」

トゥーシェと言われた男は、仄かな笑みで同情をたたえながら、間髪入れずにそう告げた。少年はなぜだかその一言がふっと胸に染み渡るようで、微かに表情が和らいだ。

「ええ、本当に」

「おまえが弱音を吐くのは珍しい。手伝ってやりたいのはやまやまだが――」

「わかっています。トゥーシェさんにはトゥーシェさんの仕事がある。我々で片付けます」

「すまないな」

「いえ」

トゥーシェは腰の剣を外すと机の上に載せ、脚を組んだ。それだけで非常に様になる。

「マゼランとルータスは――」トゥーシェは滑るような口調で言った。「俺も知っている。元々こっちにいた奴らだ。性格には多少難があったが、どちらも傭兵くずれに負けるような雑兵ではない。特にマゼランは冷静で頭も切れる」

「しかし」ルーンが後を続けた。「彼らは一瞬でやられた。それが現実です」

「話は聞いたのか？」

「はい。ルータスは怪我した肩を押さえて黙り込んでいたので、マゼランから」

「ルータスのやつ、プライドに縛られている状況でもあるまいに。……だが、まあいい。最初から詳しく話を聞かせてくれるか？ 俺も一応現状を把握しておく必要があるからな。おまえから聞くのが妥当であろうと判断した」

ルーンはじつとトゥーシェの目を見つめたのち、不意に視線を逸らした。そして口を開いた。

＊

それは昨日正午、立食パーティーの場で起こった。

突如美しい中庭に悲鳴が響き渡り、何事が起こったのかと、場は一時騒然とした。それもそのはず――今の今まで美しい少女の姿をしていた人間が、背の高い姿見に形を変えたのである。

少女の名前は、ミライ・ティンウェイ・リヴァート。

そのパーティーの主演とも言える有名人が、あるうことか鏡に変化したということで、人々の驚きも一入だった。傍にいたある者は腰を抜かし、ある者は訳も分からず自分の目をぬぐい、ある者は手に持っていた料理の皿を芝生の上に落とした。そして皆の視線は豪華な

姿見へと集中した。その場は時の凍りついた空間のようにも見えた。

ミライは魔法を封じられる以前に、自分の部屋の姿見に魔法をかけていた。鍵となる言葉一つで鏡がミライに変化する、というものである。そしてさらにミライは数年をかけて自分の癖や言葉遣い、仕草といったものを鏡の前で演じること、鏡にミライそのものを記憶させていた。食事も賃金もいらず、意思すら持たず、それでいてミライの生き写しとでも言うべき都合のよい影武者である。実際の鏡は立派な影武者として何度もミライの役に立ってきた。その魔法がパーティの場で解けたのである。とある事件から魔法を封じられ、魔力を発することもできなくなったミライには、それ以上鏡の魔法を維持し続けることができなかったのだ。

しかし強かなミライにとって、それは予想内の出来事である。ミライは当然鏡にかけた魔法が近いうちに解けることを知っていた。だからその魔法の効力が残っている内に、以前からの計画を実行することにしたのだ。

王宮からの逃亡計画である。

彼女は立食パーティの途中で姿見と入れ替わると、人気の少ない南宮へと向かった。そこにも以前から彼女がよく使っていた魔法の抜け道がある。ミライはそれを使って王宮を抜け出した。全ては、封じられた自分の魔法を取り戻すために……。

事を知った騎士団は、すぐに動いた。しかしミライが王宮を抜け出したことは、国民に知らせるわけにいかない。ルーン率いる『月』の出番だった。『月』とは、騎士団の中でも隠密の部隊である。正規の出兵もあるが、主に汚れ仕事を担当する。今回は路地を巡り、ミライを捕縛、連れ戻すことが任務だった。二人ずつのチームをつく

り、彼らはブロックごとに別れて搜索を開始した。

ミライを最初に発見したのは、マゼランとルータスのチームだった。冷淡で物静かながら高圧的でプライドの高いマゼランと、口が悪く育ちも悪いルータス。『月』の問題児二人組だ。彼らは必死でミライを追いかけた。しかし移動能力補助と質量削減の魔法がかけられたドレスを纏ったミライに追いつくのは、容易なことではなかった。見失ってはまた見つけ、見失ってはまた見つけを繰り返し、彼らはひたすらミライを追いかけた。

その途中で、彼らは出会ったのだ。

とある少年と。

彼は見慣れない服装をしていた。しかし乞食によく見られる汚らしく異臭のする服ではない。もっと小奇麗で、さっぱりとした、よく言えば前衛的な服装である。悪く言えば奇妙だろうか。マゼランもルータスも見たことのない作りの服だった。しかし子供の服装など重要な問題ではない。マゼランはいつもの事務的な調子で少年に尋ねた。

——白いドレス姿の女性を見なかったか？

少年は顔色ひとつ変えず、無愛想にとある方向を指さした。

——あちらへ。

結果として、その発言は嘘だった。そう断言する根拠は二つある。一つめは、少年が示した道をいくら進んでも、ミライの姿どころか、最近人が通った気配すら見られなかったからだ。二人は途中で踵を

返し、道を変えた。するとミライをまるで真逆の方角で追い詰めることに成功したのである。さらに二つめの理由として、少年がミライのピンチに駆けつけてきたことが挙げられる。つまり元々少年とミライは仲間で、ミライを逃がすために少年は嘘をついたのだ。

ミライのもとに駆けつけた少年は、文字通り、マゼランとルータスを一蹴した。

紫電一閃、とでも表現すべき目にも留まらぬ早業で、ルータスは肩を外され、マゼランは腹を打ち抜かれて昏倒した。彼にはふたりの剣戟の全てが見えているかのようだった。異様に目がいい体術使い。それがマゼランの所見である。

とにかく打伏させられたふたりに、それ以上ミライを追うことは叶わなかった。次にマゼランが目を覚ましたときには、日は暮れ、傍には他のチームの姿があった。明かりのない路地を搜索するには、既に暗すぎた。『月』はミライの捕縛を諦め、そして夜が過ぎた。ミライの行方はあれきり掴めていない――

＊

ルーンが事の次第を全て説明し終わると、トゥーシェは細くため息をついた。腕を組んで、背もたれに寄りかかる。

「なるほど。突如現れたアンノウンがおまえたちの邪魔をしたわけか」

「はい」

「見慣れない服に、マゼランとルータスの剣筋を見抜く目の持ち主。

その実体は目にも留まらぬ体術使い……。誇張な表現の気もするが、もしこれが本当だとすれば、実に厄介な話だな」

「ええ、だから俺も今対応を決めかねているところなんです」

トウーシェがぼりぼりと頭をかく。

「搜索隊は？」

「三チームだけ動かしています。ですが――」

「まあ、もう街の中にはいないだろうな」

「はい」

トウーシェが面倒くさそうに呻いた。

「まあ、ミライ様の目的ははっきりしているんだ。悩んでいる暇があるならすぐにでも出兵して、手遅れになる前に叩くのがベストだろう。事が事だけに、手段を選んではいけないぞ。動かす人員もそれだけでは少し心許ない。国王から全権を任されたならば、それだけの動きは見せなければ」

「もちろんそれはわかっています」

「盗賊どもの出方が心配か？　それで出し惜しんでいるのか？」

ルーンは一息置いて、肯いた。

「蛇穴を喜んでつつく者などいません」

「ミライ様は嬉々として取り組んでいるようにも思えるがな」

トウーシェが冗談交じりにそう言った瞬間、がたりと、ルーンは立ち上がった。詰所の雰囲気之急激に張り詰める中、ルーンはあくまでも無愛想に、下を向きつつ淡々と、それでも明確な怒りを込めながら言った。

「それはミライ様がご自分の立場を見失い、魔の秘法を取り戻すなど馬鹿げたことをお考えになられているからです。元々あの方は自分勝手が過ぎる。問題を起こすたびに後処理をしてきた我々の苦労のくの字も知らない。毒の笑顔を振りまき、魔術の利便に溺れてばかり。決して世界はミライ様を中心に回っているわけではないのです。彼女はそれをわかっていない」

そこでトウーシェも立ち上がった。ルーンの肩に手を置く。トウーシェのその行動に、はっとルーンは顔を上げた。

「……今の言葉は、聞き流してやる。だから、落ち着け」

眉根を寄せて、悔しそうな顔をするルーンの視線の先には、彼よりも背が高く、そして温和な笑みを浮かべるトウーシェの姿がある。己が興奮しているという事実が、彼のその顔ひとつでルーンには痛いほど理解できた。ルーンは恥ずかしそうに目を伏せると、ゆっくりと腰を下ろした。

「すみません」

トウーシェも座りなおし、首を振る。

「いい。わかっている。……心配なのだろう、ミライ様が」

「……はい」

ルーンにとって、それを認めることは悔しかった。しかしルーンがミライに対して好意を抱いているというのも事実である。日々の文句は雲の数ほどあるが、度々見せる彼女の優しさ、そして全てを包み込むあの笑顔のためならば、がんばろうという気持ちを抱くことができた。今回の件に関しては、ルーン自身にもよくわからないなにかを裏切られたような気がして、ルーンは怒っていた。それが部下の皆にも伝わっていたからこそ、今でもこうして彼らに気を遣われている現状なのだ。

「ルーン」トウーシェが改まった口調で告げた。「最善策はひとつだ」

ルーンは肯く。

「わかっています」

「……おまえには無用な忠告だろうが、ひとつ言っておく。ミライ様が起こそうとしている蛇は、でかいぞ」

その言葉に、ルーンはなにがおかしいのか、鼻で笑った。そして言う。

「ミライ様に比べれば、なんてことは」

その返しに、思わずといった調子でトウーシェは吹き出した。

「はっは！ 確かにその通りだ。まあ、それだけの軽口が叩けるのならおまえを信頼しよう」

トゥーシェが立ち上がり、剣を腰に帯びた。にやりと三日月のような笑みを浮かべて、マントを翻しながら背を向ける。

「謎の用心棒には、気をつけろ」

その言葉を最後に、トゥーシェは詰所を出て行った。足音と金属音のなくなった詰所は、しんと再び静まり返る。さて、とルーンはため息をつく、立ち上がった。そして詰所の皆に告げる。

「盗賊たちにミライ様が向かっていることを感づかせてはならない。シェイタイムの森まで進軍することはやはりできない。そこでミライ様のもとは、俺が一人で行く。隠密にミライ様を搜索、接触し、安全に王宮まで連れ戻す。なお、皆には今まで通り交代制で街の搜索を頼みたい。動かすグループも次からは五つに増やし、二チームは中心部の搜索に当たってもらう。現場の指揮は副隊長に一任してある」

言い終わると、一拍遅れて隊員たちの返答が一斉に上がった。納得していない者がいることもルーンは理解していた。しかし、こればかりは譲れなかった。

そうして二振りの剣を手につくと、ルーンも足早に詰所を後にした。

＊

「ルーン！」

厩舎で愛馬に鞍を取り付けていたルーンは、聞き馴染んだ少女の声に振り向いた。くるくるとカールした赤毛を振り乱しながら、見慣れた少女がこちらへ駆け寄ってくる場所だった。腕には紙袋を抱えている。庶民的で地味な色合いのワンピースが、朝日のもとでなぜか輝いているようにルーンには見えた。

「ちょっと、待ってよ、ルーン」

傍まで来るなり、彼女は大きく深呼吸をして呼吸を整え始めた。大きくくりつとした目はつむられ、その代わりに呼吸の度に頬が大きく膨らむ。そんな頬は仄かに赤く染まっていた。耳も赤い。まだ寒い早春の朝に、風を切って走ってきたためだろう。それは蕾が今にも花を咲かそうと大きく色づき始めた様に似ていた。不思議と恥ずかしくなって、ルーンは背を向けると再び鞍を取り付ける作業へ戻った。「なんだよ」と背中で答える。

「なんだよじゃないわよ！」少女は大声を上げた。馬が驚いて、ルーンも驚いた。どうどうと馬をなだめた後、振り向く。

「大声出すな。ヒカゲが驚く」

「なによ、あたしよりヒカゲが大事なの？」

「いや、そういう話じゃない……」

ルーンは場所を変えようと少女を促した。渋々といった様子で、少女はルーンの後についていく。厩舎の角で、ふたりの話は再開された。

「それで、ロゼッタ。どうしたんだ？」

ロゼッタと呼ばれた少女は、ルーンに詰め寄った。ルーンは眉根を寄せる。うっすらと香ばしいパンの匂いがした。彼女の朝食だろうか。おそらくまたパン作りの手伝いでもしていたのだろう。

「近い」

「いいじゃない、別に。それより、トウーシェさんから話聞いたわよ。ミライ様をひとりで助けに行くって、本当？」

「……………」

トウーシェさん、ロゼッタには話さなくていいのに、とルーンは心の中でため息をついた。嘘をつくわけにもいかない。ルーンは肯く。

「ああ」

「あたしも連れてって」

「……言うと思った」

「なら——」

「駄目だ」

「なんで!？」

我慢できずに、ルーンはため息をついた。

「危険だからだ」

「そんなところにひとりで行くほうが危険よ」

「ロゼッタがついてきたほうが危険だ」

「なんで？ あたしの眼を使えば――」

「そのつもりはない。その力はそう易々と使っていないものじゃない」

「易々じゃないよ、易しい任務じゃないんだから。それに、あたしの体のことはあたしがよく知ってる。別に平気だよ、それくらい」

「俺が平気じゃないんだ」

「どういうこと？」

「わからなくていい」

話にならないと首を振って、ルーンは踵を返す。追ってきたロゼッタは、ルーンの手を掴んで引き止める。

「あたしも連れてくの！」

「駄目だ。離せ」

「いや！」

「わがまま言うな……。俺は急いでるんだ。これ以上引き止めるようなら、トゥーシェさんに報告させてもらう」

「え!?!」

ルーンのその一言に、ロゼッタはぱっと彼の手を離した。

「それはやだ」

「……現金な奴だな」

「だって、トゥーシェさんに悪い子だって思われるのは、女の子なら誰だって嫌だよ」

「……まあ、否定はしない。彼が好かれるのは本当だからな」

「でしょ?」

ルーンは再びため息をついた。

「なんにせよ、わかってくれて助かる」

「まだわかってないよ。ルーンをひとりで行かせる気もないもん」

「おまえは本当に……」

やれやれ、とルーンは首を振った。もう相手にしていられない。そもそもルーンにはさほど時間もないのだから。愛馬のもとに戻るルーンと、わがままを言いながらそれについていくロゼッタ。王宮の者が見れば、それはありふれた日常の光景である。

ロゼッタの本名は、ロゼッタ・ハイエルンと言う。名門ハイエルン家の一人娘で、祖母と共に王宮に居を構えている。ルーンとは同じ

年で、幼少の頃からよく一緒に遊んでいた。ルーンにとっての十年来の親友、それこそ竹馬の友とでも呼ぶべき間柄である。無愛想で協調性のないルーンが心を許せるのは、トゥーシェの他にはロゼッタくらいだ。ロゼッタも王宮に同年代の女性が少ないということ、一番仲がいいのはルーンになる。見てわかるように、立場としてはロゼッタのほうが上だ。

「ちょっと聞いているの、ルーン」

ルーンは無視する。キリがない。

そんなルーンの頭に、なにかが投げつけられた。さほど痛みもなく、ぶつけられたそれはぼさりと音を立てて土の上へと落ちる。振り返って見ればそれはロゼッタが抱えていた紙袋だった。ルーンは怪訝に思いながら、それを拾い上げる。

「なんだよ、これ」

紙袋を投げた姿勢で固まっていたロゼッタは、なぜか慌てて背中を向けた。ルーンの頭上にクエッションマークが浮かぶ。

「おい」

返事はない。

「これ、投げていいものなのか？」

やはり返事はない。

わけがわからないと思いつつも、気になってルーンは紙袋の中を探

った。柔らかく、暖かな感触が指に触れる。引き出してみれば、それは毛糸の帽子だった。形は歪で、柄も綺麗とは言いがたい。しかし色の重ね方がシックで、センスはいい。

「……帽子？」

ルーンの頭上のクエッションマークがさらに増えてゆく。ルーンが再びロゼッタに声をかけようとしたところで、不意にロゼッタが大声を上げた。

「編んだの！」

ルーンの背後で、ヒカゲが驚く。しかしロゼッタの言っていることの意味がまるで理解できなくて、ルーンにはヒカゲをなだめる余裕もなかった。

「……編んだって、これを、おまえが？」

微かにロゼッタが肯いたのが、わかった。

「誰に？」

「――ルーンにに決まってるじゃない！」

勢いよく振り返りつつ、本日三度目のロゼッタの大声だった。さすがに身構えていたのか、ヒカゲの驚きは小さかったが、ルーンの驚きは殊の外大きかった。ロゼッタが、帽子を、俺に？

「なんでまた」

「だって、ルーンの白髪、目立つし、それに、寒いし」

「もう春だけど」

「し、仕方ないじゃない！ 遅れて悪いって思ってるけど、だって、初めてだったんだもの……」

俯きながらそう言われて、なんだか自分の頬が熱を帯び始めるのをルーンは感じた。

「別にいいよ。気にしない」

「そう……。ありがとう」

その場には、不思議な雰囲気立ち始め始めていた。ふたりとも目を合わせることができずに、なにがおもしろいのか、ヒカゲが小さな声で笑っている。

深く息を吐いて、ロゼッタは喋り出した。

「いいわよ、わかった。あたしは行かない。ただ、その代わり、その帽子を汚さないって、なくしたりしないって、約束して。いい？ わかった？」

ロゼッタがルーンを見て、ルーンもロゼッタを見た。ふたりの目が合う。互いの頬は赤い。青空の下で、雲と同じように緩やかに、二人だけの時が流れていく。

先に恥ずかしさを堪えられなくなったロゼッタが、やはり大きな声で言った。

「返事は!？」

ルーンは慌てて肯く。

「お、おう」

ルーンの顔には複雑な心境が如実に現れていた。いつも無愛想なだけに、こういう時は実に感情が顔に出やすいタイプなのだ。もらったばかりの帽子を勢いよく被って、俯き、表情を隠す。

「行ってくる」

「うん」

ルーンはロゼッタに背中を向けると、馬に飛び乗った。腰に掃いた二振りの剣を確かめ、そして最後にロゼッタに小さな笑みを見せる。

「安心して待ってろ」

その言葉を最後に、ルーンは馬を駆って走り出した。

#09 泥と光

泥のように眠るとはよく言うけれど、果たしてそれがどのようなものなのか、薫はうまく想像することができなかった。そもそも泥とは、人々が真っ先に思い描くであろう、水と混じった液状の土のことではない。中国の古書に描かれた、空想上の虫のことである。南海に住み、体には骨がなく、そのため水から上がると形が崩れてしまふ摩訶不思議な非實在生物。それが『泥』の正体だ。泥酔の由来もこれに帰属する。

だがなんと言ってもそれは空想上の生物。『泥のように』と喻えられるその姿を見たいと請われたところで、人間の想像力に頼るほか手段はない。そもそも比喩に實在しない生物を当てはめるというのは、如何なものなのだろうか。二重想像なんて、そんなややこしい真似をさせる意味がわからない。比喩とは物事をわかりやすくしたり、ウィットに富んだ味のある表現へと昇華させたりするためのものだ。泥という虫を表現するのに比喩を使うならまだしも、それ自体を比喩のもとにしてしまうセンスは、薫には理解できない。

まあ、つまり、なにが言いたいかというところ。

「つか、れた……」

薫は今まさに、泥だった。

街を出てから、およそ七、八時間は歩いたことだろう。まだ太陽は臨めていないが、既に空は白み始め、空気は朝の清々しいそれだった。疲労から脚は棒のように張っている。こんなにも長時間歩き続けたのは初めてのことだった。そもそも街の中でも歩き回っていた

から、少なくとも半日は歩いてた計算になる。

薫は大きく息をつくど、目の前の景色を拝んだ。森の入り口である。舗装された道があるわけでもなく、手付かずのまま荒れた景色。薫はもう耐えられないといった様子で、その場にしゃがみ込んだ。今なら泥がどのような虫かわかるような気がした。

「ここがシェイタイムの森でいいんだよな？」

ミライに向けた問い掛けは、弱々しい。同じように座り込みながら、ミライは肯いた。普段ならば朝日にも負けぬその笑顔も、さすがに疲れ切って霞んでいる。

「そうだよ、お疲れ様。まあ、やっと入り口に着いただけなんだけどね」

「そうにゃー。これからキャンプ地を決めて、一休みして、本番はそこからにゃ！ 盗賊のアジトがどこにあるかはわかってにゃいんだもの」

「それ聞いた。切なくなるから二度も言うな猫もどき」

「にゃ、にゃんだとー！」

「よく怒る元気があるね、ナイト……」

三人は群青色の空を見上げ、揃って深く息を吐いた。このまま倒れたら皆眠ってしまうだろう。むしろ座り込んだだけで二度と立ち上がりがたくない心地だった。力を入れようとすると脚が悲鳴を上げて、いつこむら返りが起こっても不思議ではない。

それでも、仕方がない、と薫は立ち上がる。

「さっさと休める場所を見つけよう。こんなところで寝たら追手に捕まえてください、って言っているようなものだ」

「リーダーぶって、かっこつけだにゃー」

「……おまえは本当に頭に来るやつだな」

疲労のせいかな、より険悪な雰囲気で見つめ合う。それをなだめるミライ。

「まあまあ、ふたりとも落ち着いて？ 確かに薫の言うとおり、ここで休むわけにはいかないもんね。早くいい場所見つけよう」

薫は肯く。誰がなにを言おうと、やはりこの場で休むわけにはいかない。気を抜くにはまだ早いのだ。三人は痛む脚を叱咤して、森の中に入り込んだ。

それからすぐのことである。薫は、度肝を抜かれた。森は表層こそいたって普通の森のようだったが、少し歩いただけですぐに別世界の様相を示した。木の一本一本が信じられないほど背が高く、幹が太いのだ。それぞれの間隔も10メートルは離れているだろう。そしてなによりも、不思議な綿毛がいくつも森の中をふわふわと舞っており、エメラルドグリーンの淡い光を発していた。地面や樹の幹に付着した苔も微かに光っているようだ。幻想的で、童話の中の夢に潜り込んだかのような空間だった。あえて現実のものに喩えるならば、森と言うよりも、鍾乳洞の雰囲気に近いものがある。

「ここはただの森じゃないの」

言葉をなくす薫へ、ミライは説明する。

「シェイタイムの森——別名、精霊の森。『魔力の蓋』と呼ばれる聖地のひとつで、地の底から湧き出る古の魔力を吸って、この植物はみな精霊化してるの。だから気をつけてね？ 邪な考えはすぐに彼らにバレちゃうから」

「彼ら？」

「君の周りの植物、全てのことよ。彼らは邪悪の芽を摘む。後ろから私のこと襲ったりしたら、痛い目を見るのは君だからね？」

「そんなことするか！」

「あはは、冗談」

ったく……。薫は若干頬を染めながら、横を見る。そこにはにやりと笑うナイトがいて、すぐに目を逸らした。苛々する。

閑話休題。

ともかく、目下の目的はキャンプ地の確保である。求められる条件は、拓けた平地であること、見晴らしと死角の両方が確保できると、水場が近いことの三点だ。まずは水場を見つけよう、というのが三人の総意だった。実際喉も乾いている。

それからすぐ、ナイトが黒猫の姿に戻った。

「あちゃー、時間切れにゃー」

「時間切れ？」

尋ねることも億劫だったが、薫は首をかしげる。

ナイトに代わってミライが教えてくれた。

「ナイトが人間の姿に戻るのは、夜の間だけなの。月の魔力を借りた魔法だから、太陽が顔を出すとかき消されちゃうんだ」

「でも話すことはできるから心配しなくても大丈夫にゃ！」

「……喋れなくていいのに」

薫はぼそつと呟いた。それを耳ざとく聞きとったナイトと、睨み合う。ミライがため息をついた。

水場は思っていたよりも早く見つかった。黒猫姿のナイトが森の中を俊敏に駆けまわって見つけてくれたのである。「もうずっと猫でいいよ」と言うと、「薫のイケズ！」と彼女は牙を見せた。イケズだなんて、難しい言葉をよく知っている猫である。……ちなみに、感心する箇所が明らかにずれていると薫自身も思う。慣れとは怖いものである。

それは細く浅い川だった。底の藻が光を発しているのだろう、透明で美しい川の水も若干黄色く光っているように見える。真っ先にナイトが水を飲み、それにミライと薫が続いた。冷たく甘い水である。体中に染み渡るにつれ、疲労がほどけていくような心地がした。言い知れぬ解放感に、すっと気分が良くなった。まさしく魔法のよう

である。

「さすが古の魔力が溶けこんだ水ね、すごいおいしい。体が元気になっていくの、わかる？」

「ああ、気のせいじゃなかったのか」

「気のせいじゃないよ。これも蓋から漏れて水に溶けた魔力のおかげ。私たちの体を形作るのは魔力なんだから、当然だよ」

「魔力が体をつくる？ 分子や、細胞じゃなくて？」

「ぶんし？ さいぼう？ なぁに、それ？」

「にゃにゃ、僕も知らないにゃー」

「あー……知らないならいいよ。説明難しいから」

「なにそれー」

「ずるいにゃー」

二人の非難を無視し、両手で掬った水を飲みながら、今まで学校で学んできた知識も役に立たないのだな、と薫は再認識した。

それからしばらく三人は川に沿って歩いた。しかしキャンプ地としてふさわしい場所は見つからなかった。確かに木々の間隔は広く、拓けているとは言えるかもしれないが、なにぶん見晴らしが良すぎた。これではすぐに追手に見つかってしまいうし、隠れることもままならない。ようやく浅い窪地を見つけると、三人はそこで妥協する

ことにした。もうこれ以上はさすがに体力がもたなかった。

ナイトが食料を探している間、薫とミライはその場にしゃがんでじっとあたりの景色に目をやっていた。素直にきれいだ、と薫は思う。日本にこのような場所があるだろうか。いや、どこを探しても見つからないだろう。ここは日本ではない。それはもう明らかだった。

薫は無意識の内に尋ねていた。

「ここはどこなんだ？」

もちろんそれはこの森を指して言ったわけではない。この世界そのものを意味する。それはミライにも伝わったようだった。彼女は小さく笑うと、急に真剣な口調で言った。

「それを知りたいなら、まずは私の質問に答えて」

薫は肯いた。

「……私は、君が盗賊団の一員じゃないかって少し疑ってる」

薫はなにも言わなかった。なるほど、そういう考え方もあるのかと、ただ思った。むしろそういう素振りをまったく見せずに警戒していたミライに、賞賛すら覚えた。

彼女は続ける。

「うんうん、期待してる、って言ったほうがいいのかもしれない。このままアジトまで連れていってくれないかなあ、って。でも、見るからに怪しいのに、私たちを騙しているようには見えない。無知

を装っている感じもしない。もし君のその態度も全て私を陥れるための謀略だとしたら、驚愕も嫌悪も通越して、感動する。思わず拍手しちゃうくらいに。だからね、カオル。本当のところを教えて君は、私の敵？ 正直に教えてくれたら、君だけは殺さないであげる」

薫はゆっくりと、ミライを見た。ミライも薫を見ていた。その瞳は大きく美しく、奥行きがあつて、そのまま見つめっていると惹き寄せられる凄みがあつた。そしてなによりも、真剣だった。『君だけは殺さないであげる』。そのセリフに、嘘はなかった。ミライは薫の実力を見てもなお、もし薫が本当に盗賊で、ここでもまたミライを騙すようなら、いずれ殺す、と言っていた。彼女の言葉と瞳にはそれだけの思いが込められていて、薫も真剣にならざるを得なかった。

ひとつため息をついて、薫は言う。

「残念だけど、違うよ。俺は盗賊じゃない。嘘は苦手だし、もし嘘をついているとして、変な服装とか無知とか、まわりくどい設定をつける必要もないだろう。俺は君や他の人からみれば、多分本当に無知で、変人だ。気づいたらあの街にいたんだ。その前の記憶は曖昧で、よくわからないけど、俺はあの街を知らなかった。それだけは確かだ」

嘘だった。薫はあの街に来る前のことを、よく覚えている。でもそれは切り札だった。まだ表にするわけにはいかない。だから薫は嘘をついた。浴槽にインクを垂らすように、真実に紛れ込ませて、少量の嘘を。

しかしミライは鮮やかにそれを掬ってみせる。

「曖昧って、どれくらい？　どこから来たのかもわからないの？」

薫はもう一度ため息をつきたかった。仕方が無いと、嘘を重ねる。

「水に浸した宝の地図みたいに、滲んでるんだ。目的はある。俺は人を探しているんだ。それはわかる。でも、理由とか、どんな人物とか、そういったことはわからない。ただ、誰かに会わなくちゃって、俺の心がそう言っている」

「心、ね……」

ミライと薫はしばし見つめ合った。その間に彼女が探りを入れていることは薫にもよくわかった。なにせミライはその雰囲気を読もうともしなかった。尋問官のように、ただ粛々と薫の内心を読んでいた。名無しに心を見られる経験を積んでいた薫にはそれほど苦でなかったが、彼女の視線は正直強烈だった。薫は姉の存在を少し思い出した。

不意にミライが笑顔になった。そのギャップは急激で、薫は驚くと同時に、その笑みに見蕩れた。

「残念」とミライは笑った。「本当に君は盗賊じゃないみたいだね」。そのまま上半身を後ろに倒し、寝転がった姿勢で彼女は薫を見上げる。「あーあ、案内してくれたらよかったのになあ。これでアテがなくなっちゃった」

無邪気にそう言うミライ。薫の内心をどう読んだかは、その笑みからは伝わってこない。言うつもりもないらしい。食えない女だ。頭がいい。薫はその件は忘れることにして、最初の質問に戻ることにする。

「それで？」

「ん？ ああ、ここがどこかって話だったね。シェイタイムの森も含めて、私達がいるのはリヴァントリーという国よ」

「リヴァントリー？」

聞いたこともない国だ。

「そう。リヴァントリー。大きな国だよ。豊かで、素敵な国。若干国民のプライドは高いけど、それは自意識の強さを表してるとも言えるのかな。私は好きだよ。この国の人間として生まれることができて、よかったと思ってる。魔法に対する見識の狭さには閉口するけど、まあ、特権持ちが文句言うのもずるいよね」

「悪いけど、もう少し具体的に教えてくれないか？」

「具体的？ うーん、そう言われるとどう言えばいいのかかわからないな。君が聞いてよ。答えるから」

「じゃあ、リヴァントリーは王政なのか？」

「おうせい？」

「王が国を統治しているのか？」

「当たり前じゃない。国王が統治せずして、誰が国を治めるというの？」

またしても示された常識の違いに、薫は渋い顔をする。デモクラシーはまだ確立していないらしい。創世間もない世界なのか、はたまた国王が信じられないほど有能なのか。国土が狭いから統治しやすいという可能性もある。

「たしかにその通りだ。国土は広いのか？」

「リヴァントリーは、国土が世界一広くて、世界一豊かな国だよ。三大国の中でも、領地、経済、武力、そのすべてで優ってる。鼻屑目なしだよ」

地球というアメリカやロシアのようなものか、と薫は自分に都合のいいように解釈した。そのほうがうまく知識を飲み込める気がしたし、理解の役にも立つだろう。

「三大国っていうのは？」

「リヴァントリー、ノーラッドライム、ゼグリファス。それら三つの国を合わせて三大国って呼んでるの。その三つの国だけで大陸の八割は占めてるかな。それぞれの頭文字をとってリノーゼなんて呼ばれたりもするけど、あまりいい意味では使われない」

「どういうことだ？」

「ああ、リノーゼの人なんだ、って嫌味みたいに使うの。三大国が世界を掌握しているようなものだから、小国の貧しい人たちは三大国を妬んでいる。聖地のほとんども三大国が保持してるし」

聖地、という言葉聞いて、薫はミライの最初の説明を思い出した。

「そういえばここも聖地なんだよな。聖地っていうのは、それほど重要なものなのか？」

ミライが一瞬、やれやれ、というような表情を見せた。気持ちはわかる。無知に当たり前のことを説明するというのは、疲れることだろう。

「この世界を象る魔力。それは聖地の存在によって保たれているの。聖地が失われたら私たちは魔法を使うことができないし、そもそも魔力によってつくられている私たちの体も、この世界そのものも崩壊しちゃう」

薫にはにわかには信じられない話だ。魔法の存在を受け入れきれないのだから、魔力の重要性についても信じられないのは当然である。神話の類だと解釈して、話題の方向性を少し変える。

「ちなみに、日本っていう国に聞き覚えは？」

「ニホン？ うんうん、ないかな。立場上世界を回ることとはよくあるけど、ニホンなんて国は聞いたことない。君の母国？」

「いや、わからない」こんなところでぼろは出さない。薫は嘘をつき通す。「でも、多分そうだと思う。少しだけ覚えている気がする」

「どんな国？ 聞けば思い出すかも」

「こことは全然勝手が違ったと思う。魔法なんてものもなかった気がする」

「魔法がないの？ リヴァントリーみたい一般人に魔法の使用を

禁止する国はいくつか知ってるけど、魔法自体をないものとする国なんて聞いたことがないな」

「なぜ便利そうな魔法を禁止にする国があるんだ？」

「魔法は危険だからだよ。人だけでなく、世界も傷つける。世界のバランスが崩れちゃうの。みんなそれを知ってるから、国によってはなるべく魔法を使わないようにしているの」

話が戻ってしまった。でも素直に薫はミライの言葉を繰り返す。

「魔法を使うと世界のバランスが崩れる？」

「さっき説明した通り、この世界は聖地が孕む魔力によって象られているの。それに比べたらひとりの人間が使う魔力なんてちっぽけなものだけど、似通ったベクトルのものが積み重なれば強くて大きな波にもなりうる。それは必ずなんらかの影響を世界に及ぼすの。いい影響か、悪い影響かはわからないけど、でも圧倒的に悪い影響だろうね。だから魔法の使用は基本的に魔法学校で習わないといけない。こうしたらダメとか、これはオッケーとか」

「魔法って、いいことずくめなイメージがあったよ」

「もちろんいいことが多いのは事実だよ。でもそんな単純な話じゃない。様々な制約があるし、努力が必要。もちろん才能もね。使えない人は一生使えない。私の父親なんかも魔法の才能はからきし。まあ、魔法がなくても生きていけるもんね」

そこででへっと一度笑顔を見せたかと思えば、また急にミライは真剣な表情になった。

「でも私は、私から魔法を取り上げられたら、生きていけない。だから、取り返すの。取り返せないなら、死んでもいい。ナイトがふたりもいるから、死なないけど」

その言葉に、薫は愛想笑いで返した。なんだろう、時折ミライから感じる重い空気がとても気になる。ミライは何を隠しているのだろうか。しかし薫にはまるでわからなかった。ただ、心に秘める何かがあることは確かだ。

とにかく、と薫は思った。まだまだ聞きたいことがたくさんある。魔法のことではない。この世界についてもっと知らねばならない。薫の中で、もうここがカオルの知る世界とは異なるのだということ は明確なものだった。美緒を捜すのと同時に、元の世界へと戻る方法を探さなくてはならない。もしかしたらミライが別世界の存在について知っているかも、という思いが頭をよぎったが、やはりその話は最後までとっておくべきだろう。薫のどの言葉がジョーカーを引くかわからないのだ。事は慎重に運ぶに限る。

と、その時、背後から歩み寄る気配があった。「ナイト、戻ったの？」とミライが振り向き、それに続いて薫も振り向く。

そこに、男がいた。

まず、白髪が目についた。毛糸で編まれた帽子を被っているのだが、サイズが少し小さいのだろう、はみ出した髪が銀色に光っている。発光する綿毛や苔が、髪に暖色の光を与えていた。年の頃は薫とさほど変わらない印象だった。顔は無表情で、しかし整っている。冷

たさを覚える顔だ。虫だろうが人だろうが命の価値をあっさり踏み砕いてしまいそうな顔をしている。押し込められた殺意や怒りがひしひしと感じられた。薫は彼の腰についた剣を見るまでもなく、瞬時に理解した。追手だと。

グリージョ色のマント。

無骨な二本の剣。

言葉を交わすまでもない。

すらりと剣が抜かれる。

「待って、ルーン！」

ミライが立ち上がり、声を荒らげた。ルーン。それが彼の名前か。どうでもいい情報だ。薫は思考を切り替えた。

闘わねばならない。

薫も立ち上がり、構えをとった。気を抜いていたつもりはなかった。長旅で疲れていたけれど、関係なかった。ただ構えをとったその瞬間、一瞬で、薫は斬られた。

血。

血が吹き出して、痛みはその後ゆっくり押し寄せた。もちろんゆっくりというのは薫の感覚的な話であって、実際は二秒にも満たない

時間である。斬られたその瞬間から薫の意識は急激に濃縮されて、一秒は膨大な時間となった。ルーンの刃は、まだ振り下ろされたまま止まっていた。右肩から、左腰へと、淀みない鋭さでもって振り下ろされたその刃は、美しかった。光だ。そう、まさしくその動きは閃光だった。

薫の体が崩れゆく。その動きに合わせて、ルーンが剣を再び構える。突きだ。いや、月か。そうか、目の前の君は、月の光を握っているのか。それで貫かれれば、僕は、あの幸せへと帰ることができるのか。

浮かぶ真緒の顔に、薫は泣いた。

最後に目に焼き付いたのは、自分の前に歩みでて、両腕を広げる少女の背中。

それが誰であるかは、薫にはもうわからなかった。

#10 囚われの姫

夢を、見ている。

高い高い、塔の夢。

塔は白くて、細長くて、荒野にただひっそりと立ち尽くしている。下から、頂上は見えない。雲を貫き、霞んで、消えている。きっとそこは寒い。寒くて淋しくて、悲しい。そんな場所である。言うなれば、そこはおそらく、世界の果てである。

世界の果て。

そこに、少女がいる。

塔の頂上。氷のように冷えた石の上に、裸足で立ち尽くしている。体に纏うのは、白い布一枚。吹き荒ぶ風に翻弄されて、右に左にと、裾がはためく。少女はそれを必死で押さえながら、泣いている。風に眼を打たれて、涙が止まらない。涙の粒が、風に舞っている。

痛い、と僕は思う。

なにが？

傷が。

傷？

そう、傷だ。血が流れている。限りなく透明に近い、血。僕の目に

その色は映らない。けれど、血は乾くことなく、塔の上に広がっていく。細かい粒子となって石に浸透し、とくとくと、塔を痛みで満たしていく。

彼女の長い黒髪が乱れる。叫び声は風に負けて、消える。塔が鳴いている。風に震えて、泣いている。そこから見える風景は、滲んでいる。見えたところで、なにもない。少女はひとりである。降りる階段もない。彼女は、生まれた日から、そこにいる。

痛い、と僕は思う。

傷が？

よく、わからない。

なぜ？

わからないよ。

どうして？

だって、僕は、君じゃない。

不意に気付けば、僕はそこにいる。そこ。それは、世界の果て。荒野の塔の、その頂上。目の前に少女がいる。少女が顔を上げる。急に風が止んで、時が止まる。雲が晴れ、光が差し、僕はその眩しさに目を瞑る。

薫。

それは、声。少女の声。

ゆっくりと目を開け、見つめ合う。

真緒。

僕は言う。

真緒。

何度でも、彼女の名前を呼ぶ。

そこに、真緒がいる。

光を浴びて、そこにいる。

世界の果てに、真緒がいる。

けれど、違う、と少女は首を振る。そして、手に持った包丁で、切りにくそうに髪を切る。切り落とされた髪は、石の床に落ちる前に消える。闇が光に溶けるように、もしくはうたかたのように、さわさと、はらはらと消えてしまう。彼女の手の包丁も、消えている。

少女は言う。

私は、美緒。

美緒？

僕は首を振る。

だって、美緒は、死んだじゃないか。

いつのまにか、僕の手握られている薄いナイフ。

僕はそれで、美緒を突き殺して。

そして――

世界に幕が落ちる。頭上から、暗闇がやってくる。闇は全天を埋め尽くし、やがて僕らさえも飲み込んでしまう。暗い。彼女の纏う布だけが、淡く光っている。僕はそれを見ている。彼女も僕を見ている。僕がいるであろう暗闇を見ている。それは永劫の時の中で訪れた、一瞬の交わり。

再び風は吹き荒れて、塔が揺れる。僕は立っていられずに跪く。少女は微動だにしない。ああ、そうか。僕だけが、揺れている。塔がふたつに割れて、僕だけが崩れてゆく。ガラスのように、暗闇も碎ける。僕らは再び分かたれる。

漏れ出す光。

名無しの笑い声。

手を離しちゃ、駄目だよ。

そんなことは、言われなくてもわかっていた。でも、駄目だった。約束は消えてしまった。大切なものは、損なわれてしまった。もう、戻らない。わかってる。僕のせいだ。だから、僕だけ、崩れてゆく。僕だけ、落ちてゆく。僕だけ、遠い遠い世界の果ての、さらな

る深淵へと、沈んでゆく。定規で線を描くように、ただ真っ直ぐ、消えてゆく。

さよなら。

さよなら、美緒。

＊

燃え盛るかのようだった。痛みが、全身を支配していた。なにかを
考えようとする痛みがそれを阻止して、傷の記憶が疼いた。どこ
が痛いのか、定かではない。ただ痛かった。薫にとってみれば、そ
れだけでもう十分だった。ただただその痛みだけが消えてくれない
かと、そればかり願っていた。夢を見ていたような気もしたけれど、
この痛みの前では既にその内容などかき消されて、何度も遠のく意
識に夢と現実の境界は曖昧だった。時間の感覚はとうの昔に消えて
いた。

「お目覚めかい？」

近くか、遠くか。どこから声がする。散らばった意識をなんとか
手繰り寄せると、声の主は隣にすることがわかった。薫は目を開け
て、見る。涙で滲む視界がなんとか人の姿を捉えた。男か女かはわ
からなかった。けれど男の声だったように思える。実際にその人物
は男だった。光源は数本のろうそくのみという暗い部屋の中、ひよ
ろりと痩せこけた男が黄色く照らされていた。見るからに汚らしい

格好をして、肌も歯も目も汚れている。彼は目を細めて、微笑んだ。もちろんその笑みも、彼の姿さえ薫にはよく見えていなかったが、彼の醸し出す雰囲気、薫に対する敵意はなかった。彼は近くのテーブルの上からコップを取って、それをカオルの口元に持っていた。

「飲みなさい」

薫の耳に、その声は確かに届いている。けれど、意味を理解するとはできなかった。聞いた傍から文字は失われて、残響だけが痛みの中で微かに存在していた。だから薫が素直にその言葉に従ったのは、本能によるものと言わざるを得ない。もちろん普段の薫ならば、何処とも知れぬ場所で得体の知れない液体を飲み込むなどありえない。しかしそれをさせてしまう安心感がその男からは感じられたし、なにより薫は喉が乾いていた。仰向けになったその姿勢のまま、液体を口に含み、飲み下す。

すると急にカーッと喉が熱くなって、薫はむせた。その動きに倍加した痛みが、薫を襲う。薫は全身を痙攣させた。男はそんな薫の肩を押さえながら、大丈夫、大丈夫、と呟いている。

しばらくして、薫は痛みが薄れていることに気付いた。未だ声すら出せず、もちろん体は動かさなかったが、確かに少しばかり痛みは薄れていた。感覚がばやけて、鈍くなったと表現したほうがいいのかも知れない。薫は目だけ動かして、男を見た。苦悶の化身にも見えた薫の顔が穏やかさを取り戻したのを見て、男はまた微笑むのだった。

「森の水を溶媒とした薬だよ。若干麻酔の効果もある。痛みは薄れたようだが、まだ何も考えないほうがよろしい。息をすること。君

は今、それだけでいい」

男の口調は穏やかだった。静かな海を想起させた。静かと言っても、海は揺れ動く。そつと、ゆりかごのように。そんな口調だった。薫は安心して、目を閉じた。息をすること。それだけを考えて、眠った。

＊

どれくらい眠っただろうか。

薫は目覚めていた。けれど目を閉じていて、声だけが聞こえた。

「実におもしろい」

それはやはり、海のような声だった。

「まず、傷が浅いこと。状況を聞いた限りでは、体がふたつになっ
ていてもおかしくはない。なにセルーン・アルセンの『月光』を浴
びたのだろうか？ 瞬殺とは彼のために、と言われるほどの男だ。そ
れであるのか。いやはや、大したものだよ」

男には、話し相手がいた。けれど黙して話を聞いている。

と、急に男の声が大きくなった。

「まあ、でも、本題はこちらだよ、君。彼の体さ。どういうことだ
ろう、

傷が治り始めている！

そりゃ傷は治る。だがそういう話じゃないのだよ。彼が斬られてからまだ二日も経っていない。にもかかわらず、ばっさりと斬られたあの傷が、なくなりつつあるのだ。そう、それはまるで、傷そのものがなかったことになってゆくかのように。闇医者として様々な事例に立ち会ってきたが、こんな事例は見たことがない。実におもしろい。実に！ 解体したくなるほどに」

最後の一言は、ぞっとするような響きがあった。今まで見せていた温和なイメージとは似ても似つかない。しかし話し相手は意にも解さず、解体はやめてほしいな、と笑った。渋い男の声だった。落ちて着きがあって、それと同時に潤いがある。

「でも、そうか。ふうん。あくまで姫様のついでだったが、はは、なかなか興味深いな。これはよい拾いものをしたかもしれない」

「どうする？」

「どうするもこうするもないさ。まだ、ね。目覚めたらナイト様直々のお話を拝聴しよう。確かに興味深いが、やはり我らがヒロインは彼女さ。経過も聞いたことだし、純真な下僕として、再度プロポーズに参上仕ろう」

「キザだな、相変わらず」

「褒め言葉さ。僕はいかなる時でも、紳士でありたい」

「そうか。興味がないな」

「ジェネレーションギャップだよ」

「君が幹部であることのギャップに私は驚きだよ」

「はは、なかなか冴えた笑いだ。では、失礼しよう」

男のため息だけを残して、音は消えた。

薫にとって、言葉はやはり記号でしかなかった。意味はうまく掴めなかった。ところどころ聞き取れた箇所はあったが、記憶する余裕はなかった。

薫はまた眠りについた。

＊

再び目覚めた時、男は薫の隣で読み物をしていた。やはり部屋は暗く、数本のろうそくだけが頼りである。そんな中、男はメガネを掛けて、汚れたレンズと暗闇に苦しみながら、読み物をしている。その姿は滑稽だった。屋根裏部屋の隅に転がった、壊れたオルゴールの人形のように見えた。

どうやらくだらない比喻を思いつくほどには、薫の思考は回復しているようだった。やはり痛みも前回以上に薄れている。だがまだ焼いた鉄パイプを押し付けられているかのような痛みが上半身にあっ

た。そこだけ皮が内側に引っ張られているようでもある。

そこで薫が目覚めたことに気づいた男が、例のコップを持って薫の口元に運んだ。

「飲みなさい」

海は静かである。薫は素直にそれを飲んだ。今回は本能ではなく、薫の意思であった。

三分の一ほどを一気に飲み下した姿を見て、男は微笑んだ。

「どうだい。少しは楽になったかな？」

薫は小さく肯く。痛むけれど、そのぐらいの反応はできた。

「よろしい。いい経過だ。むしろ、素晴らしすぎる。君はいいな。なんなのだろう。実におもしろい」

あまりよい気分のする物言いではなかったが、薫はなにも言わなかった。まだ言葉を発するには抵抗があった。おそらく話すことは出来る。だが痛みよりも、もう喋れるようになったという事実を男に見せたくなかった。そのほうがよいように思えたからだ。

しかし考える内に、それではいけないと気がついた。薫が白髪の男に斬られてから、なにがあって、今ここにいるのか。それを知らねばならなかった。あれからどれぐらいの時間が経ったのか。ミライはどこにいいのか。ナイトも一緒にいるのか。そもそもここはどこで、男は誰なのか。これから薫たちはどうなるのか。知らねばならぬことはたくさんあった。受け身でいるわけにはいかない。事は一

刻を争うかもしれないのだから。

薫は意を決すると、小さく口を開けて、言葉を発した。久し振りに出した声はぎこちなくて、かすれていて、うまく男に伝わらなかった。薫は先程より強い口調で、繰り返した。

「ここは、どこだ」

男は微笑んだ。そして、海のように呟いた。

「盗賊団の、アジトさ」

＊

ミライは元気だった。だからこそ、今の状況が不満でならなかった。盗賊団のアジトに幽閉され、自由な行動が制限されている現状もそうだったが、目的地に辿り着き、自分の魔法が目にあるのに取り戻せないという事実がなによりも齒がゆかった。苛立ちは態度として如実に表れる。

「ああもう、これで何日目よ！」

盗賊団のアジトは地下にあって、外の光が入らない。毎度運ばれてくる食事が、幽閉されてからの日数を知る唯一の手がかりだった。暗く汚い部屋で、食事をし、残りの時間は大抵かび臭い毛布にくるまってじっとしている。気が狂ってしまいそうだった。ただただ己の魔法のことだけを思い、時折地面や壁に魔方陣や魔法式を描いて

気を紛らわせていなければ、食事を運んでくる使いに襲いかかっていたかもしれない。

ミライが幽閉されている部屋は、木の板で覆われていた。ところどころ腐って、土が露出している。小さな机と椅子があつて、机の上には蜜蝋の入った鉄の皿が一枚。蜜蝋は一日を待たずしてなくなるため、朝の食事と共に運ばれてくる。ベッドなんてものはない。布が一枚敷かれた上に、横になって眠る。床の硬さに、ミライの華奢な体はすぐに悲鳴を上げた。それが四日。まだ耐えることはできるものの、限界は見え始めていた。

そもそもこのような場所で生活するのは、ミライにとって初めての体験だった。それも当然である。ミライは歌姫として、裕福な生活を送ってきた。しかし苛立ちこそあるものの、嫌悪感はなかった。気味の悪い虫がようと、不衛生だろうと、気にしない。それがミライに与える影響なんて、僅かなものだ。死ぬわけではない。ミライにとって今一番重要なのは、己の魔法だけだった。

魔法。

そう、魔法だ！

私は、そのために――

その時、扉をノックする音があつた。三回、トントントン。ノックの数は意味を持っている。三回は、プライベートノック。親しい者への、入室の挨拶。

ミライは反吐が出る思いで、返事もしなかった。錠の外れる音がして、扉が開く。すぐに声があつた。潤いを含んだ、渋い男の声だっ

た。

「こんにちは、姫。ああ、今日もなんて美しい。まさに、廃墟に差し込む一筋の斜陽。どれだけ汚くみすばらしい部屋でも、君がいるだけでこんなにも煌々と、美しい」

そうしてミライの手を取り、男はその甲にキスをする。恭しく、丁寧に。

ミライはうんざりしながら、目の前の男を見た。名前は確か、ユーリ。三十を通り過ぎ、若干シワの刻まれ始めた顔に、笑みが張り付いている。それは気味が悪いほど、爽やかだ。ミライの笑顔が太陽だとすれば、彼の笑顔は月である。春の月。黄色味を帯びた、春の終わりの月。メッキのような暖かみの奥に見え隠れする冷めた白は、彼の笑顔のためにある色だった。爽やかで、優しげで、そして冷えている。背格好は痩せ型の長身。髪は全体的に短いものの、襟足だけ少し伸ばしているようだ。

ユーリは毎日訪ねてきては口説き文句を放って帰っていく。また今日もなのねとミライが黙っていると、ユーリは困ったなという風に頭に手をやった。

「そんな不機嫌にならないでくれよ。僕だってね、この現状に満足していないんだ。なにが楽しくて美女をこんな掃き溜めのような場所に監禁せねならない。団長の考えは僕にも理解できないよ」

「なら早く出して」

「だからそれは僕のプロポーズを受けてくれたら検討する、って言うてるだろう？」

「いや」

やれやれ、とユーリは首を振った。それはミライの台詞である。

「冗談はもうこりごり。ねえ、何度も言ってるけど、私にはあなたの目的が見えない」

「合言葉の通りだよ」

歌姫様を、我が手に。

ミライはため息をついた。

「それは目的じゃなくて、目的に至るための手段。私だってバカじゃない。おおまかになら話は見えてる。要するに、こういうことでしょう？ 私の魔法を禁呪で奪ったまではよかった。でも、適合者がいない。仕方がないから私を囚えて従わせよう、ってね」

するとユーリは目を見開いて白々しく驚いてみせた。そしてぱちぱちと拍手をする。

「ご明察。さすが姫様だ」

「バカにしないで」

「まさか！ 女性を馬鹿にするなんて、そんなことできないよ。僕にとって女性はエッセンシャルだからね」

「言ってることの意味が分からない」

「識者の言葉は時折意味が分からないものさ」

ダメ、話にならない。いつもどおりミライはユーリを無視することに決め、背中を向ける。

「ああ、ちょっと待ってくれ」ユーリがその背中に声をかけた。「今日は君に聞きたいことがあるんだ」

無視する。

しかしユーリはめげずに続けた。

「あの少年のことだよ」

少年。それが薫のことであることは明白であった。ミライもすぐに薫の顔を思い浮かべた。彼は無事であるのか。今の今まで、ミライは薫とナイトに関する情報をなにも得られないでいた。聞いても教えてくれないだろうと、聞くこともしなかった。魔法のことだけを考えて、忘れたふりをしていた。けれどこうして相手から話をしてくれるというならば別である。いいように釣られて、振り返る。ユーリがしてやったりという爽やかな笑顔を見せたのは不服だったが、致し方ない。

「カオルは無事なの？」

「無事だよ。傷はもう塞がってる」

「傷が、塞がってる？」

ミライは思わず聞き返した。正直ミライは、カオルは死んでいるかもしれないと思っていた。ルーンの『月光』をあれだけ至近距離から受けたのである。避ける余裕なんて、あるわけがない。体がふたつになっていないだけ運がよかったという印象ですらあった。そんな深い傷が、たった四日で、塞がる？ 信じられない。

そんなミライの心情を察して、ユーリは説明する。

「そう、そこなのさ。彼の体は神秘だ。このままゆけば、致命傷が十日足らずで完全に消える。そんなことがあっていいのだろうか。いや、駄目だ。死者は蘇らない。死は覆らない。彼の存在は、その概念を吹き飛ばしてしまうかもしれない。彼はいったいなんなのだろう？ 何か聞いていないかな？ それとも君の魔法に関係しているのだろうか？」

ユーリの言葉を、ミライは黙って聞いていた。そしてしっかり咀嚼し、返答する。

「それに答えることで、私にメリットはある？」

「団長に会わせてあげよう」

ミライはしばし目を伏せた後、ユーリを睨みつけた。

「本当に？」

「僕は嘘をつかない。君に染められるために、清白でありたいからね」

「……本当に、意味が分からない」

ミライはため息をついた。

「でも、残念だけど、カオルに関しては私も謎なの。知っているのは、ニホンという国の出身で、魔法を知らないほど常識がないってゆうことくらい。なにか重要なことを隠しているのは確かだけど、きっと聞いても教えてくれないはずだよ。嘘つきだから、彼」

「ふうん、重要なことね」

ユーリは顎をさする。

「拷問でもしてみようか」

「嘘しか言わないと思うけど」

「嘘ならわかる。天才的に嘘がうまいとしても、あとで嘘だと分かったら殺せばいいさ」

「……やっぱり、最終的にカオルは殺すの？」

ユーリが横目を向けて、その視線がミライと合った。ユーリの瞳はもちろん、ミライの瞳にも感情はほとんどなかった。互いに探り合うけれども、どちらの感情もその瞳からは見えてこない。

「彼の価値によるな。彼の位置を決めるにはまだ早い。僕らにとって、王子にも、非人にもなりうる。……まあ、なににせよ、すべてを決めるのは団長だよ。あの人の適当さ加減には僕らもほとんど困っているんだけどさ」

ユーリはやれやれと首を振った。

「でも、困っているといえ、君もだよ、ミライ姫。それはあまり好まれた行為じゃない」

不意に、ユーリがミライの背後を指さした。ミライは振り返らない。ユーリが示唆したいものがなにであるか、当の本人であるミライからしてみれば振り返らずともわかる。

汚い木の壁。

その一面を使って描かれた、巨大な魔方陣。

しかしミライに書くものは与えられていない。だから、その魔法陣は赤かった。既に黒く変色を始めているが、つい先程書き足した部分はまだ赤い。鮮やかな赤。それはまさしく、血の色である。

血の、魔方陣。

「魔力の封じられている今の君がどんな魔方陣を書こうとそれは自由さ。魔法は決して発動しない。だからこそ、自分の指を噛み切って描くほどの価値があるだろうか。僕はないと思うね。傷口から悪いものが入って膿むかもしれないし、なにより歌姫の貴重な血液をそのようなことに使うなんて、実に勿体ない。血を抜きたいというなら、喜んで僕が啜おう」

「結構よ」

「冗談さ。ともかく、やめたほうがいい。その魔法陣が完成したところで、なにも起きやしない。君の魔法は僕達の手の中にあるのだ

から」

その言葉に反応して、ミライは強く強くユーリを睨みつけた。ユーリはやれやれとまた首を振る。

「いくら言っても無駄かな。でもこの忠告は受け取っておくべきだよ、互いのためにもね。そして非常に残念だけど、これ以上嫌われる前に今日はお暇しよう」

「もう、だいつきらいよ」

「心が痛むね。でも僕の好意に君の心はすぐに癒される」

ユーリは扉を開けると、去り際にウイंकをして、言った。

「そろそろ団長に会わせてあげよう。迎えは白馬の馬車じゃないが、がっかりしないでくれ」

＊

迎えは思ったよりもすぐに来た。ユーリの言葉を信じていなかったミライだったから、嬉しいという素直な気持ちが湧いてきた。ようやく、ようやく話が進展する。それだけで気持ちには驚くほどハイになった。今から会うのが盗賊団のボスであることは明確だったし、緊張もあった。しかしそれでも喜びが勝った。なにせこれでまた自分の魔法に一步近づけるのだ。歌姫という職業柄、ミライは肝が座っている。

四日ぶりに出る部屋の外——とはいえ、移動に際して目隠しと両手の拘束は必須だった。それに歩くのは団員によってつくられた人工的な洞窟内である。陽の光もなければ、清々しい空気もない。ミライは歩きづらそうに、それでも支持に従って、ただただ歩いた。右に曲がり、数段しかない階段を降り、また右へ、と思えば次は120度ばかり左へ回され……。しばらくして、止まれという声があった。ミライが足を止めると、遮られた視界の奥からノックの音が聞こえた。ミライをここまで連れてきた男が何処かの扉をノックしているようだ。おそらく、そこは目的地である。あらゆる意味での、目的地。

「入りましたえ」

その声は、ユーリのものだった。失礼します！ と迎える男が叫んで、扉を開ける。手の縄を引っ張られて、ミライは転びそうになりながら部屋の中に入った。そしてすぐに拘束を解かれる。ミライは一瞬逡巡したが、目隠しの布を外した。

そこは広い部屋だった。ミライが幽閉されていた部屋とは、規模が違ふ。たくさんの燭台がところ構わず部屋中に配置されており、ミライは若干ぞっとした。禁呪の祭壇に雰囲気似ている。しかしそれほど燭台があっても、天井は高く、部屋は広い。だから隅々まで灯火が届かない。暗幕に包まれているかのようにだった。もしくは、闇という虫に光を喰まれつつあるようだった。

部屋は奥に進むほど高くなる階段状の構造になっていた。その最奥、ミライが見上げるその先に、ふたりの男がいた。ひとりユーリである。手に燭台を持って、その光で顔の右半分だけ明るい。火が揺れる度に影の形が変わって、目に色が灯ったり消えたりする。ミライは一瞬人形かと思った。だがユーリは突然あくびをしてみせた。

どうやら本物のようだ。

次いでミライはその隣にいる男に目をやった。その男は、椅子に座っていた。その部屋に似つかわしくない、アンティークの素晴らしい椅子だった。燭台の火をぬるりと琥珀色に反射して、光っている。その椅子に問題があるとすれば、明らかに二人が十分に座れるだけの横幅がある、ということぐらいだ。

そう。

二人用の椅子に、男はまるで違和感なく座っている。

さらに言うならば、男の顔はちょうど光の範疇外にあって、伺えなかった。きちんと見えるのは下半身だけである。それだけでミライがすぐに男だと判断したのは、もちろんその異様な風貌を見てでもある。だが、そんなもの、見ずともわかる。その雰囲気だけで、わかる。

幾度も話には聞いていた、盗賊団アイネ・クライス・エゾナーの团长。

ヴォルドロス・キング。

「ひどい顔だな、ミライ・ティンウエイ」

低音のドスの利いた声が、大蛇のように床を伝って、一瞬でその場を支配した。

「おまえ、俺の嫁にならねえか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0346w/>

ワールズエンド

2011年11月13日19時05分発行